

宮城県芸術年鑑

令和元年度

宮城県

はしがき

文化芸術は人々の暮らしに豊かさと潤いをもたらすものであると同時に、地域の魅力を発信し、活力の源となるものであり、社会的・経済的に様々な場面で役割を果たすことが期待されています。現在、新型コロナウイルス感染症対策に最優先で取り組まなければならない状況が続いており、多くの文化芸術活動が休止・延期を余儀なくされておりますが、このような時にこそ、文化芸術の力が求められており、その活動を支える取組が必要であります。本年鑑は、宮城県の文化芸術活動のより一層の活性化を図るため、一年間の活動内容等の記録をまとめ刊行しているもので、今回で四十九巻目となります。

令和元年度は、平成九年度から開催している「みやぎ県民文化創造の祭典」において、「ワークショップ」及び「アウトリーチ」と呼ばれる少人数を対象とした体験型事業を引き続き実施いたしました。児童生徒をはじめ参加された皆様は、学校や図書館など身近な場所で直に芸術家の方々と交流を行ったことで、文化芸術の素晴らしさを感じることができたと思っております。

このほか、宮城県美術館では「横山華山 KAZAN-A Superb Imagination at Work」や「ストラスプール美術館展」など、東北歴史博物館では「東北歴史博物館開館二十周年・宮城県多賀城跡調査研究所設立五十周年記念特別展『蝦夷―古代エミシと律令国家―』」や「宮城の土偶」などを開催し、県内外の多くの皆様に足を運んでいただくことができました。

本年は、「宮城の将来ビジョン」と「宮城県震災復興計画」の最終年となり、復興の総仕上げと復興期間後の取組を見据えた重要な年となります。県といたしましては、震災によって被災された方々の心のケアや地域コミュニティの維持・再生において、文化芸術が果たす役割は非常に大きいと考えており、引き続き、その力を活用した心の復興に取り組んでまいります。

結びに、本書の刊行に当たりまして御執筆いただきました諸先生をはじめ、貴重な写真や資料を提供いただきました関係者の皆様に對しまして、心から感謝申し上げます。

令和二年四月

宮城県知事 村 井 嘉 浩

芸術年鑑

もくじ

各ジャンルの動向

● 総論		宮川 宏	7
● 日本画		庄子 幸一	14
● 洋画		大嶋 貴明	24
● 彫刻		佐藤 淳一	35
● 工芸		樋田 隆	43
● 書		後藤 大峰	54
● 写真		清水 有	60
● 文芸		玉田 尊英	72
● 洋楽		太田 峰夫	79
● 邦楽・芸能			

〈おことわり〉 本文に掲載されている方の敬称は原則として省略しています。

宮城県における文化行政の概要	169
広域文化団体の文化活動記録	151
●古典芸能	83
●民俗芸能	87
●三曲	91
●長唄	96
●民謡	99
●演劇	105
●洋舞	113
●日舞	119
●茶道	126
●華道	132
●メディア芸術	138
●二代目	99
小塩さとみ	83
小塩さとみ	87
宮澤 寒山	91
杵家弥登鈴	96
藤本 和夫	99
鈴嶋 久善	105
高橋 厚子	113
大須賀 豊	119
児玉 宗睦	126
西村 一観	132
清水 建人	138

各ジャンルの動向

総論

【総論】

もしも後年、宮城県のカ文化行政、あるいは文化施設の在り方を振り返る場合、令和元年は県美術館（仙台市青葉区）の移転問題が論議を呼んだ年として特筆されることだろう。

県が、県美術館を東京エレクトロンホール宮城（県民会館、青葉区）とともに宮城野区のカ仙台医療センター跡地に移転、新築する方針を発表したのは十一月。県有施設再編の基本方針を検討する有識者懇談会で中間案として示された。

移転集約案は、主に財政面から効率化を図る狙いがある。県によると、建設費を県民会館二百億円、美術館百億円と想定。両施設を複合化する場合、延べ床面積を現行の両施設の合計よりも小さくすれば事業費総額のうち百十二億円が交付税措置される見込みなのに対し、現地改修は事業費二百六十億円のうち補助は十一億円にとどまる。また、現在地での建て替えには二、三年の休館を伴い、地下に仙台西道路のトンネルがあることなどから施工上の制約があるとされる。

これに対し、県内外の幅広い層から、反対や疑問視する声

が相次いだ。主な理由は①県美術館の現地改修を前提に県の検討会議が策定した「リニューアル基本方針」を棚上げし、唐突と受け取られるような形で移転集約案が示されたこと②県美術館の立地、環境面や、故前川国男氏が設計した建物に対する県民の愛着が深いこと③県美術館の開館に至る経緯や果たしてきた役割等が考慮されていないこと―などがある。

中でも②の声は多く、県民が立地環境を含めて現在の県美術館に対して、愛着とともに特別な思いを抱いていることが図らずも浮き彫りになった。

県は令和二年二月、県有施設再編基本方針の最終案をまとめた。中間案の「集約する」を「検討する」に改めたものの、移転集約の方向性は変えていない。

今回の移転案は、公立美術館の在り方をはじめ、文化行政やまちづくりはどうあるべきかなど、さまざまな問題を内包している。結論を出すには、県民の声を十分に聞き、議論を深めることが前提として求められる。

新型コロナウイルスの国内感染の拡大を受け、令和二年二月以降、全国各地でイベントの中止が相次いだ。県内でも演

奏会をはじめ各種文化系行事が中止となり、文化活動に大きな影響が出た。

以下、各分野について本年度の多彩な活動の概略を述べる。

【美術】

東日本大震災で被災した石巻市の牡鹿半島を主な舞台とするアートと食、音楽の総合祭「リボン・アート・フェスティバル2019」が八月九月に開かれた。平成二十九年に続き二年ぶり二回目の開催。「いのちのてざわり」を全体テーマに、七地区で約六十組のアーティストの現代アート作品などが展示された。地元在住作家の奮起も目立ち、被災地住民の心情や捕鯨基地・鮎川の現状など作家たちの多様な問題意識がうかがえた。

第八十二回河北美術展（四月末～五月上旬、藤崎、TFUGギャラリーミニモリ）は、日本画、洋画、彫刻の三部門で日本画百十一点、洋画六百五十四点、彫刻二十五点の応募があった。河北賞には、日本画が山形市の源由華さんの「あいまいな時間」、洋画は二戸市の高田啓介さんの「古い工場」、彫刻は新潟県上越市の竹本悠太郎さんの「藍色の肖像」がそれぞれ選ばれた。

第二十八回河北工芸展（十一月、TFUGギャラリーミニモリ）には、陶磁、硝子、木竹など十一部門に二百二十二点の

応募があった。河北賞には登米市の鈴木由香さんの陶磁「登米藁灰釉（わらはいう）掻き落とし花器」、JAL賞には南陽市の川合ひさ子さんの染織「手織り紬衣（つむぎころも）月山の祈り」がそれぞれ選ばれた。河北工芸展は令和二年度、県芸術協会との共催公募展に移行し、「杜のみやこ工芸展」の名で十一月に開催の予定。河北写真展は毎年秋に開催している県芸術祭写真公募展に統合する。

八回目を迎えた無審査の公募展「せんだい21 アンデパンダン展2019」（十月）は、過去最高の二百二十六点が集まり、内容的にも充実していた。

県美術館では特別展として「横山華山展」（四～六月）を開催。江戸時代後期の京都で活躍しながら、現在はいま知られていない絵師の全容を紹介した。仙台市博物館では企画展「戦国の伊達氏―植宗から政宗へ」（七～九月）を開催。東北歴史博物館では特別展「東京芸術大学スーパークローン文化財展 最先端技術でよみがえるシルクロード」が四～六月、同館開館二十周年などを記念した特別展「蝦夷―古代エミシと律令国家―」が九月十一月にそれぞれ開かれた。

青葉区の画家瀬尾夏美さんは、個展「風景から歌」を三月に開催。震災の被災地陸前高田市を取材した膨大な資料を元に民話調の文章と絵画に仕上げた。台湾人アーティストによる展覧会「仙台湾の風景」と「コンテンポラリー仙台湾（仙

台湾＝仙台＋台湾」（九月）は台湾と日本の対比が際立った。青葉区の美術家青野文昭さんの大規模個展「青野文昭 ものの、ねむり、越路山 こえ」（十一月く令和二年一月）は、震災経験を受容し、作品に昇華させた力量が圧巻だった。

彫刻「風の環シリーズ」や絵画「記憶の壁シリーズ」などで知られる彫刻家で画家の武藤順九氏が第六十九回河北文化賞を受賞した。

計報では、河北美術展参与の菊地義彦さん（栗原市）が六月に八十八歳で、書家で河北書道展参事の今野深泉さん（多賀城市、八十二歳）と同じく書家で同展特別顧問の大友青陵さん（岩沼市、八十五歳）が十二月に、河北文化賞受賞者で宮城教育大名誉教授の彫刻家土屋瑞穂さん（仙台市）が令和二年一月に八十六歳で、それぞれ亡くなった。

【音楽】

三年ごとに開催される仙台国際音楽コンクルの第七回が五、六月、仙台市青年文化センターを会場に行われた。ピアノ、バイオリン両部門に三十九の国・地域から過去最高の四百六十七人が応募した。

ピアノ部門はチェ・ヒョンロクさん（韓国）が一位。バイオリン部門は一位該当者なしで、シャノン・リーさん（米国、カナダ）が最高位の二位となった。同コンクルの一位なし

は初めて。バイオリン部門の堀米ゆず子審査委員長は「仙台のレベル（の高さ）を示す指標となる」と語り、コンクルを今後、世界最高峰の一角に押し上げたい意欲が垣間見えた。同部門ではオーケストラのコンサートマスター（コンマス）として演奏する課題も出された。国内のコンクルでは初の試み。ソリストに加えコンマスの育成も重視する姿勢がクラシック界の注目を集めた。

仙台フィルハーモニー管弦楽団は全九回の定期演奏会を開催。前年に引き続き、令和二年に生誕二百五十年を迎えるペートーベンの曲を柱に据えた。常任指揮者の飯守泰次郎さんが計三回登場したほか、レジデント・コンダクターの高関健さん、客演指揮者の広上淳一さん、飯森範親さんらがタクトを振った。

仙台市宮城野区文化センター・パトナホールを会場とする室内楽のシリーズ「ミュージック・フロム・パトナ」は六年目を迎え、「まだある名曲」をテーマに計四回の演奏会を開いた。

「せんくら」の愛唱で親しまれている第十四回仙台クラシックフェスティバルは十月、四施設十会場で計八十九公演が行われた。仙台オペラ協会は九月、仙台市で第四十四回公演を行い、レハールの喜歌劇「メリー・ウイドウ」を上演した。

東北大学混声合唱団は令和二年二月、創立六十周年の記念

特別演奏会を仙台市で開いた。現役団員と、OB・OGによる同窓会「秋の子」会員の計約百七十人が出演。フォーレの「レクイエム」などを披露した。

仙台市出身の作曲家、ピアノリストの秩父英里さん（米ボストン在住）が、国際ジャズ作曲家協会（ISJAC）賞を受賞した。国際的な活躍が期待される若手作曲家に向けた賞で、日本人の受賞は初。仙台で東日本大震災に遭い、米留学を経て作曲家として歩み出すまでの七年間を航海に例えた曲「The Sea—Seven Years Voyage—」のストーリー性が評価された。

仙台の音楽施設整備を巡っては大きな動きがあった。仙台市の有識者による音楽ホール検討懇話会は三月、二千席規模の「生音源に対する音響を重視した高機能、多機能ホール」を中核とする施設の整備を提言した。一方、県も九月、青葉区の東京エレクトロンホール宮城を宮城野区の仙台医療センター跡地に移転、新築する基本構想案を示した。

県、市の両議会や市民の間で「二千席規模の二つの施設が共存できるのか」と議論が巻き起こり、両方で調整し合うよう求める声が上がった。音楽施設問題は令和二年も引き続き重要なトピックとなるだろう。

【文芸】

創設二年目となる仙台短編文学賞（実行委員会主催）の大賞に決まったのは、東京都の会社員綾部卓悦さんの「ビショップの射線」。東日本大震災後の仙台の街に暮らす窮屈さを転入者の視点で率直に描きだし、チェスの対戦と絡めた巧みな心情描写で共感と呼んだ。選考委員は仙台市在住の直木賞作家熊谷達也さんが務めた。南相馬市在住の芥川賞作家柳美里さんが選考委員を務めた第三回の大賞は仙台市の書店員佐藤厚志さんの「境界の円居（まどい）」だった。

仙台市と仙台文学館が主催する小中学生の詩のコンクール、第六十回晩翠わかば賞に登米市横山小二年奥田梨智さんの「あいたいよ パパ」、晩翠あおば賞に仙台市上杉山中三年大久保観さんの「時速一〇〇km」が選ばれた。

奥田さんの作品は、自分が生まれる前に東日本大震災の津波で亡くなった父への思いをつづった。震災から八年の月日を重ね、直接経験していない世代も震災を文学として書き継ぐ可能性を示す作品として注目を集めた。

仙台市の佐々木貴子さんは第一詩集「嘘の天ぷら」で第三十回歷程新鋭賞（詩誌「歷程」主催）を受けた。不条理で不穏なショートショート風の表現が、今後どんな発展を見せるのか、次作以降にも期待したい。

市在住の作家からは引き続き話題作の刊行が相次いだ。佐

伯一麦さんの「山海記」は芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。熊谷達也さんは「エスケープ・トレイン」「我は景祐」、伊坂幸太郎さんが「シーソーモンスター」「クジラアタマの王様」、瀬名秀明さんは「小説 ブラック・ジャック」「魔法を召し上げれ」などで気を吐いた。伊集院静さんはエッセー「ひとりで生きる 大人の流儀9」で好評を博した。

仙台文学館は開館二十周年を迎え、特別展「井上ひさしの劇列車」を二期に分けて開催した。令和二年二月には、館長の歌人小池光さん（柴田町出身）が三月末で退任、後任に佐伯一麦さんが就任することが発表された。小池さんは初代館長の井上ひさしさんの後を継いで平成十九年四月から館長を務めていた。

第六十七回県短歌大会（県歌人協会、河北新報社主催）が六月、仙台文学館であり、最高賞の河北新報社賞に仙台市太白区の小柴知子さんの句が選ばれた。

【演劇】

仙台的演劇界はベテラン俳優が存在感を発揮した。

劇都仙台を代表する劇作家、演出家だった故石川裕人さんゆかりの俳優たちが「演劇ユニット石川組」を結成し、五月に旗揚げ公演を行った。石川さんが主宰した劇団「OCT／PASS」の絵永けいさんや宿利左紀子さんたちが、宮沢賢

治をモチーフにした「隣の人々 静かな駅」を二十七年ぶりに再演した。石川さんの戯曲を埋もれさせないのが狙いで、今後も公演活動を活性化させていく考えだ。

井伏銀太郎さんは演劇活動四十年を迎えた。東日本大震災をテーマにした芝居を、多賀城市で六月、仙台市で七月と十二月に上演するなど精力的に活動した。「劇団鳥や」代表の白鳥英一さんは活動三十年を迎え、短編オムニバスによる記念公演を七月に行った。

東北弁でシェイクスピア劇に取り組む「シェイクスピア・カンパニー」は八月、英国・ロンドンで「アイヌ オセロ」を上演した。差別問題を扱った四大悲劇のオセロを、仙台藩士とアイヌ民族の女性の物語に翻案し、アイヌと共演。本場で好評を博した。

身体表現と詩的なせりふを組み合わせた「詩劇」と呼ぶ独特の表現手法に挑む仙台市の劇団「EΣ（アイム）」が八月、紅花をモチーフに東北の文化を発信する詩劇「BENIBANA」をフィンランドで上演した。日本とフィンランドの国交樹立百年を記念するアート事業の一環で招待された。

平成三十年度文化庁芸術祭賞で演劇部門優秀賞を受賞した「SENDAI座☆プロジェクト」は十月、フランスのサスペンスが原作の「罠（わな）」を上演した。大衆芸能部門優秀賞の六華亭遊花さんも五月に記念落語会を開いた。

せんだい演劇工房10―BOXなどがある若林区卸町を演劇で盛り上げる「せんだい卸町アートマルシェ」が十月に開かれた。せんだい短編戯曲賞（仙台市、市民文化事業団主催）の大賞作家の作品を劇団短距離男道ミサイルが演じた。今回が三回目の開催で地域に浸透してきた。

石巻市では十一月―十二月の一カ月間、「いしのまき演劇祭」が開かれた。実行委員会の主催で、四回目。文化センターと市民会館が被災し、舞台公演ができるホールがなくなった中心部で、多目的スペースなどを会場に開催した。地元石巻のほか仙台などの八団体が参加、二十六公演を行い、地域を活性化づけた。

南相馬市在住の芥川賞作家、柳美里さんが主宰する演劇ユニット「青春五月党」の新作「ある晴れた日に」の公演が十一月、仙台であった。仙台公演に先駆け、南相馬、盛岡両市でも上演された。悲しい記憶を抱えながら生きる女性の姿を通し、東日本震災でかけがえのない存在を失った人々の心情を表現した。

【舞踊】

仙台市旭ヶ丘小六年の下永小百合さんが三月に盛岡市であった「東北支部バレエ・コンクール」（日本バレエ協会東北支部主催）で優勝した。小学四―六年が対象の部で「眠れ

る森の美女」のオーロラ姫を踊り、技術力などが評価された。世界屈指のオランダのコンテンポラリーダンスカンパニー「ネザーランド・ダンス・シアター（NDT）」が六―七月に日本公演。クラシックバレエ界から平成二十六年にNDTに移籍した仙台市出身の刈谷円香さんも出演した。九月には、フランスのパリ・オペラ座バレエ団のエトワールを長く務めた世界的ダンサー、アニエス・ルテステュさんがプロデュースしたバレエとピアノが競演する舞台が多賀城市民会館で上演された。

仙台市の佐取純子モダンバレエスタジオは八月、創作舞踊公演「心の伏流水―拈華微笑（ねんげみしょう）」を開催。風土や庶民信仰を通して東北人の精神性を浮き彫りにした河北新報社の連載企画「こころの伏流水―北の祈り」をモチーフに、意識と無意識、「人はどこから来て、どこへ行くのか」といったテーマに迫った。県洋舞団体連合会は十一月、第五十回の洋舞公演を仙台市で開催。七団体の合同作品「遙（はる）かなる道を行く」などを披露した。

高校ダンスの強豪、福岡大付属若葉高（福岡市）のダンス部が八月、山元町坂元中で公演した。ダンス部は東日本震災の後、岩手、宮城、福島の前被災三県を毎年巡り、ダンスを通じて被災者を元気づけてきた。同町には平成二十四年から八年連続で来訪してきたが、今回で訪問活動に区切りを付け

た。

【宮城県芸術祭賞・芸術選奨】

第五十六回県芸術祭（県芸術協会、県、仙台市、河北新報社など主催）の最高賞・県芸術祭賞は、日本画が土屋薫さんの「佇む」、洋画は渡辺昭昶さん「生命譜（3・11）」、工芸は馬場興彦さん「彩泥鉢」、彫刻は赤井靖武さん「凜」、書道は吉岡芝耕さん「柳宗元詩」、文芸は佐藤成晃さんの「見納めの花」（短歌）、写真は紺野勝司さんの「空へ」がそれぞれ受賞した。

令和元年度の県芸術選奨は、美術が日本画の三浦長悦さんと彫刻の土門邦勝さん、書の田村政晴さん、写真の志賀理江子さん。文芸は詩人の須藤洋平さん。演劇は俳優・演出家の白鳥英一さん。メディア芸術は声優の山寺宏一さんが選ばれた。新人賞は美術が洋画の田中望さん、音楽は仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスター西本幸弘さん、舞踊は鯨井謙太郎さんが受賞した。

宮 みや

川 かわ

宏 ひろし

（河北新報社生活文化部長）

日本画

社会情勢の変化とは裏腹に、顕著な動きは特に見られなかった。中央の公募団体には入選歴のある数名が今も出品を続けているがその数はずいぶん減ってきた。高齢化の波がここにも押し寄せている。大作を描く気力、体力が保てない、多くの時間と高い経費を捻出し出品することへの疑問、諦め等々が大きな原因と思われる。会員の主宰する画塾で研鑽を積み受賞を重ね会員、同人となり「絵に値段が付く」が、いわばプロ画家としてのスタートだとすれば、ここに至る道筋を出品者本人がどう捉えるかが問題だ。「自作を世に問う」としても生半可でないことだけは事実。「描くことの意味」不明のままでは主体性の無い、なぞっただけの脆弱な作品しか生まれえない。ある種の「覚悟」を持って臨むべきと思われる。私が学生時代、担当の教授（無所属）が「公募展へ出品するのは良いが、将棋の駒にだけはされないように」と言われた言葉が思い起こされる。

昔、読んだある雑誌にこんなジョークがあった。沈没しそうな船から客を海に飛び込ませるための最も適している言葉、もし客がアメリカ人だったら（場合）「飛び込んだらヒー

ローになれるぞ」イタリア人の場合「飛び込んだら女にもてるぞ」フランス人の場合「飛び込んではいけません」ドイツ人の場合「飛び込むのがルールです」そして日本人の場合「他のみんなも飛び込んでいるよ」国民性が出て面白いと思った。何がいいかという点と、このような日本人の描く「日本画」を真剣に考え「他のみんながやらないこと」を目指さないと絵画としての日本画はこれから先大変になるのではないかと。否、これから先の「日本画」がどうあろうと。そんなことはプロに任せ、私は好きな岩絵の具を用いて好きなように描くだけ。どこに出品しようが私の勝手。いずれにせよ一種の「覚悟」は必要だ。

このような状況、高齢化の中で、画学生を含む若手台頭の兆しが現れはじめ期待を寄せていることも事実。美術教育は基より、その後、師弟関係を越え、共に制作者として展覧会を開くなどその献身的な取り組みの成果は大きいと感じた。昔から「金を残して死ぬのは下、仕事を残して死ぬのは中、人を残して死ぬのは上」と言われる。その「人」を残そうと尽力されている先生方を随所に取り上げ、稿を進めてみたい。

「森 敏美 退任展 AMBIVALENCE」(一月

二十一日)二月二十二日 東北生活文化大学六号館 Gallery CORE) 東北生活文化大学 生活美術学科 教授の退任展。大阪市出身で東京藝術大学大学院卒業。新現美術協会会員、モザイク協議会員、フレスコ普及協会会員、美術解剖学会理事、現在宮城県芸術協会絵画部運営委員としても活躍中。

氏の作風は経歴からもわかるように金属によるパッチワーク、ステンドグラスの作品背面からライティングするなど、洋画、日本画の範疇では収まらない平面作品を越えた一種独特な世界を築き上げている。ここで取り上げる理由は、あの有名な「那智の滝」をベースに制作された作に圧倒されたからである。絹本に鉋物から作られた絵の具を膠で定着した本作を氏は圧縮された金属片、単なる金属片ではなく日常生活の中で見捨てられた空き缶や看板などが氏の手で巧みに姿を変え再生された数々の断片が氏の絵の具となる。塗料の色がまだ鮮明に残ったもの、錆びたもの、まだ、かすかに凹凸がのこったもの、それらがジグソーパズルのように居場所を得たかのように画面に小鋸で丁寧に固定される。何という緻密さ、予測不能を可能にしたこれらの作品を前にしたとき甲冑師のように制作に打ち込む氏の姿が想い浮かぶ。「素材」とは「表現」とは、日本画を視たとき以上に日本らしさを感じ

るのは「再生」リサイクルという手法ではないのか。「利休鼠」色は再生紙から生まれた色。リサイクルは日本のお家芸。氏は「私は工芸ではなくアートを創っています」と言う。「工芸性」に陥っている今日の日本画への警鐘とも聞こえた。循環型社会の実現としてリサイクルアートのトップランナーとして走り続けて欲しいと願っている。

「第六回 新春日本画展」(一月四日)一月十三日晚翠画廊)

県芸術協会運営委員、会員等の企画展 庄子幸一 梅森さえ子 大泉佐代子 奥山和子 小野寺 康 佐藤朱希 新藤圭一 中畑富佐江 三浦 孝 毛利洋子 橋本道代 菅井 糸子 鈴木多恵子 鈴木洋子 高瀬滋子 高橋美紀子 高橋 悠華 千田卓内 千葉勝子 土屋 薫 富樫清子 福田眞津子 鈴木清隆(特別出品)

「第七回 悠々貫々展」(一月十五日)一月二十日 ギャラリー専)

東北芸術工科大学の大学院生により発足し東北の地で将来の芸術を担うものとして、何を考え、何を生み出すのかを幅広い表現の中から見いだしたいとの趣旨で発表を重ねている。時代感覚に富んだ清新な作が並んだ。代表の山口裕子 阿部佳菜子 菅野耕平ら十七名のグループ展。

「宮城県芸術協会 絵画部門 現運営委員等の「現在と過去」Ⅲ期」(二月二十九日～三月十日 カメイ美術館)

三年計画で開催されてきた県芸術協会とカメイ美術館との共催事業の本展も今回が最後。Ⅲ期は昭和二十八年以降までに生まれた二十一名と今年度新運営委員になった八名、合計二十九の作が並んだ。いわば若手・中堅作家と呼ばれ芸術協会絵画部においても精力的に活動し絵画展発展のために力を注いでいる。今回も期間中作家による作品解説やギャラリーコンサートが開催された。安住小百合「薔薇図」 小野寺康「残雪」 梅森さえ子「白く」 橋本道代「夢紅を差す」 山口裕子「まるまるだんだん」(作品はいずれも現在の作) 五人の新作・旧作の並列展示となった。そこから見えてくるのは何か、これから先どのような展開となるのか、日本画の確かな技法で円熟味を増している五人、今後の活躍を見守りたい。

「三浦ひろみ 作品展」くさくら咲くく(三月六日～三月十二日 松坂屋上野店 本館七階 美術画廊 本館七階アートギャラリー)

薔薇、牡丹をテーマに本会場では二回目の個展。横浜に居を構える氏だが、県芸術祭や受賞者展にも精力的に発表。近年、余白と鉄線描を駆使した水墨を追求し、評価も高い。「会場芸術」とまではいかないまでも大作に期待するのは私だけ

か。

「第三回新日春展」(四月十八日～四月二十四日 東京都美術館)

本県から十二名が入選を果たす。中でも初出品で奨励賞の「水を抱いて眠る」酒井美雪がこれまでの「水」をテーマに新境地を拓いていた。北斎を例に挙げるまでもなくこの壮大なテーマをどのように展開していくのが楽しみた。「日本画の伝統を共に次世代へと続く新しい発表の場」をスローガンに、審査に当たられた佐藤朱希氏の指導力、牽引力にも期待したい。

「第八十二回河北美術展」(四月二十五日～五月七日 藤崎本館七階催事場・TFUギャラリーミニモリ)

今回は二会場での展示となった。デパート内だけの展示が難しくなったのと思うがこの分散型、二会場展示はいかなものだろうか。県展の無い本県にとって本展は公展にも似た任を担っているだけに残念だ。「賑やかさは人を呼ぶ」集客数だけではないもっと別な対応策が必要な時期にさしかかっている。招待作家に田名部典子氏が加わり計九名となった。受賞者には県芸術協会員の顔ぶれも多く地元開催ならではの結果となった。河北賞「あいまいな時間」源 由華 宮

城県知事賞「春韻」阿部志宇 一力次郎賞「おでかけ日和」阿部淑子 東北放送賞「春めく」荒井静子 宮城県芸術協会賞「立」高橋美紀子 東北電力賞「気允つ」新藤圭一 東北福祉大学賞「いとでんわ」数本冨英佳 新人奨励賞「特異点」土田 翔 審査員奨励賞「愛しき仲間たち」佐々木玲子

「喜寿記念 斎藤ミツ 日本画展」(三月二十二日～二十七日 せんだいメディアテーク五階ギャラリーC)

届いたDMに「日本画に魅せられ、描き続けて30年」写真の「遺跡の村で」F50号を庭を見るようにぼんやりと眺めていた。いい絵だ。喜寿を迎えた氏の自画像とものとれた。会場には思い描いていた以上の作が並んでいた。開催までの準備は大変だったろう。勇気も要ったろう。入り口近くに「干支」と題した羊の顔だけの小品があった。聞けば、娘さんの結婚祝いに描いたという。どんな状況下にあっても「励まし」の言葉が聞こえてきそうな慈愛に満ちた表情をしている。その娘さんは笑顔で来訪者の対応をしていた。私はつくづく斎藤ミツさんという方は恵まれた環境の中で伸び伸びと描かれている方なのだと思うた。

第十一回 宮城野高校美術科日本画専攻OG展「みののこ展 part 2」(八月六日～八月十一日 仙建ギャラリー)

展示目録のあいさつに「仙台では油画や彫刻と比べると日本画が浸透していないことを痛感したこともありましたが」「展示を通して地元の方たちとの交流をはじめ、ご意見、ご感想をたくさん頂戴し私たちも大きく成長させていただきました」の一文を読み、なんと、しっかりした捉え方だろう。ここには「日本画」を描いているという明確な意思があり、日本画認知の方法として作品を発表し交流を通して広めたいとの目的が定まっている。結果、自らも学び成長することが出来た。さらに文は、「毎年ご来場くださる皆様のご声援やご家族の支援があつてこそ制作を続けることができています」と続く。自分の置かれた立場を自覚せずには今後の制作は困難であることを知っている。頼もしい限りである。若い作家に見られがちな、ムード絵画と一線を画す。てらいや傲慢さ、独りよがりには微塵も感じられない。この、あいさつ文に裏付けられるように各作品は発想の斬新さ、技法の確かさなど、その力量が見て取れた。これは、小野寺康氏の長年の指導者としての作品群でもあり、良き師弟関係の現れでもあるろう。最後には「私たちは宮城野から巣立った子、今日もどこかで描いている」と、結んでいる。このグループ展が投げた波紋の広がりに期待し「今日もどこかで描いている」人達に心よりエールを送りたい。小野寺康 野田陽子 阿部佳菜 子 渡辺 綾 日野沙耶 小関瑛美 小野あゆみ 高橋悠華

阿部汐夏

「おかげさまで開館十周年 特別企画展」悠 祈り・いのち・風・流れ・大地」（登米市 高倉勝子美術館 桜小路）

収蔵作品の展示ばかりではなく、高校生の発表の場であったりと美術教育の一翼を担うなど、社会教育振興にも尽くしてこられた。これまでの取り組みに中学校美術教師だった高倉勝子氏の意味が伝わってくる。これからも枯れることのないわき水的存在であって欲しい。

「第五十六回宮城県芸術祭絵画展」公募の部（九月二十七日～十月二日 せんだいメディアテーク六階ギャラリー）

絵画祭に公募が取り入れられて広く認知されるようになったものの、点数的にはさほど変化はみられなかった。若手作家のデビューの発表の場と考えたとき、出品者の年齢幅が広く表現に対する捉え方にもそれがみられた。油彩、水彩、アクリル、麻紙に岩彩と、一般的な素材が主流だが、段ボールアクリル・「融解する街」岩渕わか菜（奨励賞）断熱建材にアクリル・阿部正彦、木材にウッドバーニング・色鉛筆・「胡蝶の夢」佐藤 結（奨励賞）の作が目をついた。壁面は充分確保されているのだがそれに見合う大きさの作が少なかったのは残念である。二段がけを避けたせつかくの壁面がもった

いないと感じた。県芸術祭賞「景」佐藤健太郎 優秀賞「留まるものは何もない②」阿部正彦「夜明けの詩」山本政彰「景」は滝にも見える形態を岩絵の具や金属泥を用いた絵肌が魅力。「夜明けの詩」情緒溢れるテーマを描き切った。二点とも清新な「日本画」作品へと昇華させていた。

「第五十六回宮城県芸術祭絵画展」会員の部（十月四日～十月九日 仙台メディアテーク五階・六階）

日本画の部は五階aフロアでの展示。別室の役員等の作を含めてもその数は少なかった。制限の多いしかも出品画となればそれなりの大きさも必要となる。そんな中で出品を辞退した会員も多かったのではないか。会員一人一人が年一度の発表の場、研鑽の場と捉え出品し続けることはこれからの芸術協会絵画部のみならず個々の今後の制作にも必ずや好結果を生むに違いない。「多くの会員の出品が不可欠」であり常連会員の活躍する会場は安定こそすれ、ともすると新鮮味を欠き停滞を意味することになる。二年続けて芸術祭賞を受賞した「佇む」土屋 薫氏の「表現を可能にするのは確かな技術」であり、大作を出品し続けている「自然の光明」菊地禮藏氏のお二人の取り組みに拍手を送りたい。宮城県芸術祭賞「佇む」土屋 薫 宮城県知事賞「見集む」數本冴英佳 仙台市長賞「追憶」武知美枝子 河北新報社賞「或る日の庭」中邨

圭子 宮城県教育委員会教育長特別賞「羽音」富樫清子 公益財団法人仙台市民文化事業団賞「舞」阿部志宇 公益財団法人カメイ社会教育振興財団賞「自然の光明」菊地禮蔵

「奥山和子日本画展Ⅱ」卒業記念（十月十八日～十月二十二日） せんだいメディアアテーク五階c)

毎年個展、グループ展、団体展で発表している氏だが基礎力不足を痛感し京都造形芸術大学通信日本画コースに入學。今年の卒業を機に近年の日春展、日展出品作を中心に発表。氏の作品を前に私は「基礎力不足」を感じたことはなかった。風景、人物、そして授業での課題制作と、どの作にもモチーフに対する思い入れとエネルギーに満ちていた。技術的な基礎云々は後から付いてくるもの、むしろ表現の基礎とは強い意志と持続性であり、どれだけ熱を帯びて制作したかであろう。目的はなんであれ、これまで、描き続けて来られたではないか。臆することなく邁進して欲しい。

「第七十二回塩竈市美術展」（十一月十二日～十一月十七日）ふれあいエスプ塩竈

審査員講評で「作品数が増え、とてもいい作品が多く、賞を選ぶのに苦労した」とある。しかし主催の塩竈市教育委員会・塩竈市芸術文化協会の熱心なこれまでの取り組みからす

ればまだまだ少ないように思う。日本画の人口にも問題があるのだろうが、素材を問わず「これが私の日本画」といえば、それは、「まぎれもなく日本画」ぐらいに考えて応募してみてはどうか。「これが日本画なの」と言われたところで「日本画はこうあるべきだ」などとはだれも考えてはいないのだから。今こそ若い発想と新しい表現技術が求められていると感じているのは私だけだろうか。授賞式場に担当の先生に引率されて臨んだ女子高校生が自作を前に感想を訪ね聞く姿が印象に残った。こんな光景が更に増えることを期待したい。塩竈市美術展賞「朝顔流木」高橋哲子 塩竈市教育委員会教育長賞「彩夏回想」中間美佐子 杉村諄賞「花冠」小泉百合子 塩竈市芸術文化協会賞「青梅雨」氏家結衣 塩竈市生涯学習センター審議会委員長賞「南国ZOOで目が合って」丹野あき子 塩竈市議会議長賞「煌めき」佐藤順子 NHK仙台放送局賞「奥入瀬溪流」畑山美佐 杜の都信用金庫理事長賞「紫の花咲く頃」我妻京子 日本画奨励賞「陽射しの中で」板橋孝子 日本画奨励賞「森の木管」佐藤黄英 日本画奨励賞「椿」前洪理恵 招待「さくらんぼの実る頃」阿部淑子 「浮萍」鈴木理平 「願いながら」橋本道代 「山峡」新藤圭一

「第二十七回宮城シニア美術展」(十一月二十八日～十二月一日 宮城県美術館 県民ギャラリー)

今回もシニアならではの丁寧で、ぬくもりのある二十二点の作品が並んだ。特に構図、技法ともに工夫された完成度の高い作、三点が選ばれた。最優秀賞「利府菅谷不動尊」一光優秀賞「旅の遊興」下鳥整子 奨励賞「夏はすぐそこ」樋口富子

「第五十六回 宮城県芸術祭絵画展 受賞者作品展」(十二月十三日～十二月十九日 東京エレクトロンホール宮城 五階展示室)

今年度の会員の部では土屋薫「佇む」「樹」数本冨英佳「見集む」「とどのつまり」武地美枝子「追憶」「樹」富樫清子「羽音」「共演」中邨圭子「ある日の庭」「ある朝」阿部志宇「舞」「秋いろ」菊地禮蔵「自然の光明」「輝き」の七名、公募の部では佐藤健太郎「景」「静」山本政彰「夜明けの詩」「薄暮」が並んだ。受賞作と新作の対比が見所となっているが新作が小品化して趣旨が見えてこない。受賞作に至った軌跡とし「旧作も可」としてはどうか。大きさも大切だ。

令和元年度宮城県芸術選奨 河北美術展招待・宮城県芸術協会絵画部運営委員で八十四歳の三浦長悦氏が選ばれた。洋

画から日本画に転じて約三十年ひたすら風景を描いてきた。近年は果樹園の網越しの風景で院展入選の常連。氏を知ったのは三十数年前のとある居酒屋だったと思う。安住英之氏が「ちょーさん」と呼び紹介されてからである。その後、実直な人柄から生まれた作品群は佳作の連続。毎年の院展出品は想像に余りある。これを維持するのだから並大抵ではない。今も、地道に「作風追求」と「更なる高み」を目指し歩み続けている。これからですよ「ちょーさん」。

改組新第六回日展 第一科日本画

「翁(黒川能)」能島和明(会員)「人・人・人」能島千秋(会員)「銀野花遊図」佐藤朱希(会員)

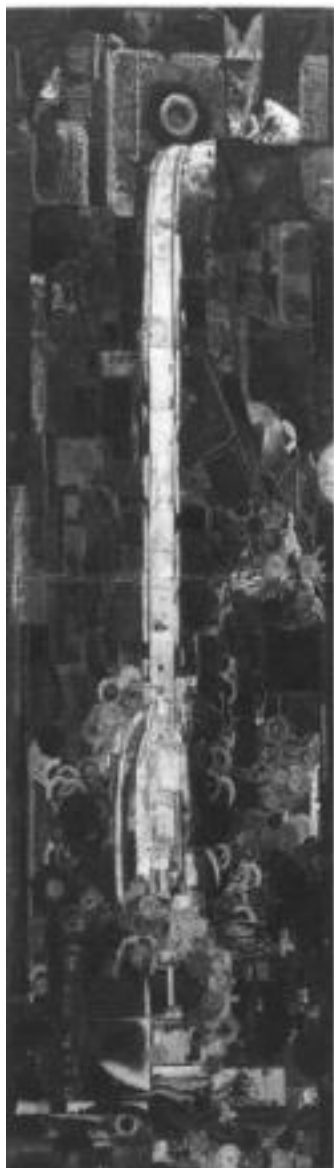
入選 「日向雨」奥山和子 「立」荒井静子 「又狗遊水図」酒井美雪 「星降る夜に」高橋美紀子

庄^{しょう}子^こ幸^{こう}一^{いち}

(宮城県芸術協会絵画部部长)



再興第 102 回院展 三浦長悦「佇む」



森敏美 退任展 AMBIVALENCE



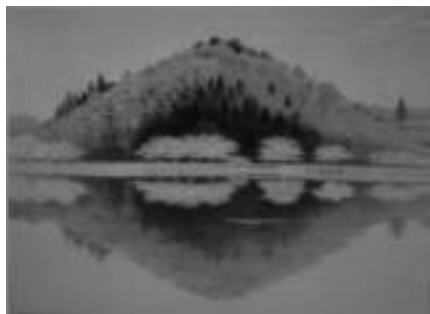
再興第 86 回院展 三浦長悦「翁樹」



第 96 回院展 三浦長悦「懷舎」



日本画展 奥山和子「育つ」



第 11 回みののこ展 part2
小野寺康「春」 元宮城野高校教諭



喜寿記念 齊藤ミツ日本画展 「遺跡の村で」



第 56 回宮城県芸術祭絵画展 日本画会員の部
県芸術祭賞 土屋薫「佇む」



第 56 回宮城県芸術祭絵画展 日本画会員の部
宮城県知事賞 数元冴英佳「見集む」



第 56 回宮城県芸術祭絵画展 公募の部
宮城県芸術協会賞 佐藤健太郎「景」



第 56 回宮城県芸術祭絵画展 公募の部
優秀賞 山本政彰「夜明けの詩」

洋画

前年の「洋画の動向」の末尾は以下の文章で終えた。「…しかし、制作密度の濃い個展が、青野だけではなく連続している。次年の「動向」は多重な作品・群や多様な作品群の個展を繋いでいくことで書きだせる。…」

もちろん、その予測のとおり可能性に開かれたそれぞれに違った個展を取り上げることができた。主体が制度によりかかる度合いが少ない制作・発表形態であつてこそ、「発表」という公共圏への投企に合致するのだし、また、それが内容面でも形式面でも創造性をもったものであれば、それなりのポリシーがなければ理解可能なものにはならない。制度に規定された内容と形式でそれも一点だけでは、そのパタナイズした（していく）表れによって、取り上げるべきものかどうかすら判断不能になる。だから、大きなグループ展や公募展は避けて、可能な限り私には自分にとって未知の個展を巡ることになる。

半年ほど前読んだ特異な美術史の本にある一節があつた。かいつまんで文意を説明すると、年鑑に毎年毎年、同じような作品が同じような選択によって同じような語り口で記述さ

れ続ける時、それは時代やそのジャンルが停滞していることを示している、という。これを書いてしまうと自縄自縛にもなるのだが、まあ、そういうものかもしれない。だが、少なくとも本年の様々な個展、特にミッドキャリアにある美術家によるそれらはこの小論での言葉が追いつけないほど豊かな問題をそれぞれに提起していたように思う。

だが残念なことに、その問題群を追っていくだけでは現在の美術や文化の状況変化を提示しきれない。県の年鑑という形式の限界でもあり、あるいは、本県の文化の状況をつくる各アクターや要素に最初から欠け落ちているものがあるからなのかもしれない。断片的にしか認知できない世界レベルでの美術や文化の動向で問題になっていることは、本県の動向はほとんどずれているのだし、全国レベルで、美術や文化の最大の問題になったことに対応した動向はほぼほぼなかった。また、県レベルで制作者だけではなく、文化の動向では、そこを抜きには語れない市民層にとって最大の問題も、ここでは語れないし語るべきではないように自己規制が働く。確かにその二つの問題点は、個々の美術制作とそれに連続する

発表の動向や状況にあるというよりは、美術の制度や基盤や考え方の問題にある。そして、それを正面切って論ずることは、美術・芸術関連の当事者性の強いメディアが分断もしくは有効には無い状態になっているとき、社会状況論つまり文化面ではなく社会面に任されてしまう。

今、美術や文化の動向を記録することは、作品発表の記録だけではなく、その作品が投入された公共圏の動きこそが記録されねばならない。

変化する現実に参加して、その現実から受ける多様な印象を多様な作品形式で表現していく、状況没入的というか調査的というべきか、作品が形式的に自立しているよりも、文脈を大事にした、三人の発表をとりあげたい。

補足すると、すでに現実には印象派のような一瞬でとらえられるものでも、短時間のスケッチからタブロー化できるものでもない。現実是不確かで、様々な情報形態によって、つまりはテキスト（詩・エッセイ・小説・紀行文・・・）、図表・・・で多重に記述することでかろうじて繋ぎ止めるほかはなく、作品を成立させる状況の構造との相似性は、多重な多様な喩によってしか成立しない。（例えば、社会問題はきれいな解決策など無いから社会問題なのだし、それぞれの現実を生きることなのだろう。）

「佐立るり子展―思考の森―」（一月十五日～一月二十日 Sendai Artist-Run Place）

前年の五月から十一月までの佐立の体験、「山学校（木こり育成事業）」参加、を基にした多様な表現方法で展示されていた。森という場の現実には、そこで関わる人間の「身体」と、一方ではその場性を越える「社会」もまた交錯して表れている。その交錯した状況のそれぞれのエレメントに根ざす印象とその思弁的思考とを、視点を変えながら多様な表現方法で表していく。抽象度の高いタブロー、巻物状のイラストレーション、イラスト付きのメモランダム、いくつかの什器、そして実物のペレットストーブがギャラリー内部にゆるやかに配置されている。

それらの様々な形式の表現は、対応している印象や情報形体の違いでもあるのだが、喩の形式の違いでもある。その時、印象の形式と喩の形式は対応するのだが、その現実そのものの全体の変化に対応するのは抽象度の高い、つまり思弁性の高いタブローだろうか。思弁が既存の喩に収まらない、もう一つの表現形式が求められているようだ。

瀬尾夏美個展「風景から歌」（一月二十九日～二月十日 Gallery TURNAROUND）

瀬尾単独の発表では、ぼくは、背後の現実よりも、作品の自律性をついつい求めてしまう。作品にとっては、自律性か、

文脈かは、二律背反ではないし、今決めねばならぬものでもない。ましてや、現実には文脈のほうが大事だと考えるべきとも思える。が、今回の Gallery TURNAROUND の個展では、現実の経験のその時その時の印象に対応する多様な方法というよりかは、独自の絵画形式が優越しているように見える。(別な場では、テキストや画像やドローイングが優越している。)そのことは、自律性が強く出ることにもつながっている。そのせいかどうか、瀬尾の作品の視角は、例えば、完成予想図で使われるような俯瞰が使われていることが多い。これは、俯瞰性を持つ全体把握という特出、ある種、現実の当事者性から一步引いた権力的な眼差しのそれではないことを強調しておきたい。おそらく、その場の「現実」に参入したとき、同調や共感ではすまずに、否応もなく距離をとる、一種の自己防衛なのだろうか。現実には常に変化していくその時、オブジェクトに対し空間性の大きい、または俯瞰的でもある瀬尾の表現は変わるのだろうか。

菊池聡太郎 図画工作展「家事 (いえごと)」 (三月二十八日～四月二日 Gallery TURNAROUND)

菊池聡太郎「喫茶 荒地」 (十月二十三日～十一月三日 Gallery TURNAROUND)

菊池の二度の個展は、可視・不可視の現実を、種々の表現方法を組み合わせ、ドキュメントではなく、ノンフィクシヨ

ンフィクシヨナルな作品化によって探求している。二つの展示はそれぞれに違う方法によっている。彼自身は建築のバックグラウンドも持っているそうだが、「家事」では、建築学的な提示の方法論が強く関与している。ある住宅建築の多重なレベルでの変化が問題になっているという。では、その時に提示すべきものはなにか。一見、変化の記録に思えるのだが、菊池が問題にしている／すべきものはそこにはないようだ。問題が、不合理な時や現実にあるとすれば、作品化は現実には類似的記録の提示ではなく、現実の「不合理」に働いている力と相似な構造の提示ということになるのだろう。

「喫茶 荒地」では、提示されている種々の表現方法が展示空間でインスタレーションはされているのだが、菊池が過去に経験している現実の記録性は薄れ、説明的な類似性というよりは、制作されて創造されたイメージと、それを切断する物体の持つ物質性によっている。前回に比べれば、建築学的に對してアートのな方法ともいえるのだが、イメージの切断をつくりだす、物質・物体の既製品性は越えるべきかもしれない。

多田由美子 still life 展 (四月三十日～五月五日 Sendai Artist-Run Place)

今回の個展、作品にふれた瞬間に感じたのは、場に対する適切な大きさということであった。適切な大きさがあるお

げで、多田のオリジナルな作品形式、「テーブル絵画」が、十全な形で知覚、認識されている。机状の場の上に、さまざまな物体がこまごまと配置され、一見するとおもちゃの都市模型のようにもみえるのだが、見ればそうではない。そして、「絵画」としてでも、「オブジェ」としても「インスタレーション」としても、その形式は捉え難く外れていく。内的な構成、物の配置も、一見、連続的に造形的に組み合っているかのようだが、そここに不連続があつて、どの不連続に注目するかによつて、見えてくる構造は変化し、イメージも更新される。この不連続と適切な大きさこそが、既存の一つの表現形式におさめずに、また、それぞれの形式が類似的に持つてしまふ世界の認識ではなく、その作品を世界の優れたコミュニケーションとしているのではなからうか。

もう一点付け加えておくと、多田が作品のパーツとして選ぶ、カラフルな物体の色と、それが寄り集まることができる作品の色彩効果は、作品を画像化した時に最大のパワーを発揮しているのかもしれない。本誌ではモノクロなので不能なのだが、デジタルの色彩表現は人間の色彩の分別や認識とは違ったものになつて、そのようなデジタルな場で成立する作品世界もあるのだ。絵の具という、優れて人間の認識を反映する色材ではできない表現が生まれている。

照井 隆 展 PARALLEL & FRAGMENT 2019 (三月十二

日～三月十七日 Sendai Artist-Run Place)

照井の作品は、ある種の風景画的抽象画形式のもの。その場の痕跡を補強していくようなインスタレーション。そして、前回から見られる、グラシン紙を使った、その素材と制作プロセスによつて生み出される形式主義的な作品に広がっている。

今回は第三の形式の作品群だが、素材の性質がストレートに使われ作品化されれば、そこでは、作品から意味・イメージが創発されるよりも、物質・物体性が直接見えている。そして、長方形の用紙がグリッド状に集められた今回の作品は、パーツになる一枚一枚の内的形式と、それを強調していく全体のフォーマットによつて強固に提示されていた。世界との関連形式としては、照井の場合、一見、インスタレーションの時に成立しているかのようだ。だが、それも、取りあえず、その場でのしぐさのようなものであるときに、そこからは展開しにくいものなのかもしれない。

素材のフティシズムはつくるものが陥る罠の一つなのだが、突破口を見つけ出せるものは少ない。

佐々木 健 展 “Wear a second skin without foundation” (一月十五日～一月二十七日 Gallery TURNAROUND)

佐々木 健 展 “Dusk and abstraction” (七月三十日～八月

三日 Sendai Artist-Run Place)

佐々木 健展「薄暮と抽象」(十一月五日～十一月十七日
Gallery TURNAROUND)

これまで、佐々木の作品は一貫して、その純粹な作品形式への集中によってつくられてきた。一方で、形式主義は完成度が高ければ高いほど、その時々々の恣意的なバリエーションと恣意的な初発のイメージでしか作品を展開できない。作品の主體的な発表機会の多い佐々木は、回顧展的な過去の作品の展示もあつたが、新作の展示では、絵画の平面性や、自己の作品形式の根幹をゆさぶるような、変体を窮屈というよりは遊ぶように提示していく。そのいくつかの形式の変体の組み合わせを、一つの個展に展開している。

佐々木だけではなく、抽象画とか形式主義の美術とかが、美術の形式の史的展開の線上に、つまりジャンルの内的な論理の中に現れるだけではなく、外的世界との新しい関係性を持ち得るか。特に、表面性の強い佐々木の作品には展開を期待していきたい。

タイトルの紹介だけになるが、印象深い発表をあげておきたい。

ササキツトム 展 (二月五日～二月十日 Sendai Artist-Run Place)

ササキツトム 展 〈中間の庭〉 (十二月十七日～十二月二十二

日 Sendai Artist-Run Place)

形式主義的な絵画の力量ある作家が活動を再開した。小さいドローイングやコラージュもまた、形式の内に入っているが、完成度は高い。

小野寺綾展―世界のかげら (二月十二日～二月二十四日
Gallery TURNAROUND)

世界＝外界というよりは、世界＝内界とでもいうべき感性か。絵画というものの再創造の方策としてはありえるが、表面のしぐさが強くなっている。

檜野 武彦 鮎、鮎、鮎展 (四月九日～四月十四日 Sendai Artist-Run Place)

生活世界と作品が重なり合う独自の美術活動を続けてきた、本県での草分けで唯一の作家の久方ぶりの発表。

翁ひろみ展「角のあゑ形―由・SAPP」(六月二十五日～六月三十日 Sendai Artist-Run Place)

作品形式と内容の両面がそろって、作品の外の実空間に微妙にズレ重なっていく。その緊張はどこに向かうか、見ていきたい。

千葉 実展 (十一月五日～十一月十日 Sendai Artist-Run Place)

イメージ形成が、物質性や作業のプロセスと深く結びついているのだが、今回の作品群では、ネタの物質・物体が見え

ることが中途な感じを与えていた。

斉藤文春展——そして、いつか（十二月三日～十二月八日
Sendai Artist-Run Place）

個々の作品を分かちぐさだが、形式的な限界のうちにある
ことで、趣味性を強くして、アクチュアリティを無くしてい
るかもしれない。

THE6 GALLERY PROJECT — 7 — 村上裕之（十月二日
～十一月二十九日 THE6）

形式主義的だが、センスの良さをを見せていた。そのセンス
の先での切断、もしくは相対化が可能な場があることを期待
したい。

THE6 GALLERY PROJECT — 8 — 門真妙（十二月三日
～二〇二〇年一月三十一日 THE6）

もしかしたら、ゼロ年代的感性をそこに留まらずに広げて
いける一人かもしれない。「世界」との距離や関係が形式面
でも多様に提示されていくのだろう。

大型のグループ展いくつかに簡単だがふれておこう。

「リボーンアート・フェスティバル (RAE) 2016」

第二回目のこのアート・フェスティバルでは、ワーク・イ
ン・プログレッシブのいくつかの作品と、石巻に住み着いた？

若い作家の試みを特筆しておかなければならない。

「第八回 せんだい21アンデパンダン展2019」

新しい会場として「スタジオ開墾」も入って八会場でおこ
なわれたアンデパンダン展は、そのコンセプトも今はたして
いる役割も十二分に理解できるし、その場になじんだ作品群
と手慣れた運営が本年の特徴といえるかもしれない。役割を
中心に考えるなら、それは得難い展覧会だが、また、アーティ
ストではなく、ギャラリー主体ということもあるが、もし、
コンセプトのアクチュアリティが上がることも可能なら、そ
れを期待したい。

『交響のソロ』11人の作家に見るみやぎ 美術のいま（カメ
イ美術館、秋保の杜 佐々木美術館&人形館 十月九日～
十二月一日）

二つの私立美術館を会場としたこの展覧会は、本県で行わ
れた宮城県を本拠地としている美術家のいくつかの大型グ
ループ展に対する対抗性を意識されたものだろうか。この試
みが、より明解なキュレーションによって、タイトルが象徴
するような場が開けていくことを期待したい。

いくつか他にもふれておきたい展示もあるが、アンデパン
ダン展の会場にもなった「スタジオ開墾」について書いてお
きたい。

「スタジオ開墾」は仙台市の東部の卸売団地内の、これま

でもイベント会場に使われてきた倉庫を改装したシェアアトリエとして、本年の初めに開かれた。これまでも本県でも共同アトリエはあつたし、世界的にはアンデパンダン展にも並行するように新しい美術の潮流が起こるときには、若い芸術家のコロニーが形成されてきた。「スタジオ開墾」には、これまでの共同アトリエとは違った開放性と展開を期待したい。おそらく、それが制作レベルの美術活動が陥りがちのジャンルを分ける制度の占有ではなく、横断的な活動の場であればより開放的なモーメントを持ち得るのではないだろうか。そして、共有スペースとして展示スペースも持っているが、展示場としてよりは、滞在型制作やワーク・イン・プログレッシブに対応する場としてみていきたい。

もう一つ、触れておきたいのは、「スタジオ開墾」のキーマンの一人である**関本欣也**のことである。近年の関本は、美術家やギャラリストとしてだけではなく、美術家教育、レクチャープログラムやその他の企画、そして、いくつかの場の形成など、幅広く多面的な活動をしてきている。また、そのことによって、初期の**Gallery TURNAROUND** 運営の時よりも、関本を結節点として関係していく美術や人が広がってきている。このことは、現在の美術と文化の状況にとって、大事なことのひとつである。公的な施設の職員としてではなく、「私」民が公共圏形成に関わる活動をしていく、またそれが

可能な人材が関本だけではなく、本県に増えてきていくことは特筆しておきたい。

青野文昭 もの、ねむり、越路山、こえ（十一月二日～二〇二〇年一月十二日） せんだいメディアテーク 六階ギャラリー4200)

企画展 — **青野文昭** — その思考の変遷を辿る—1989～2019（十一月二十六日～二〇二〇年一月十一日） **Gallery TURNAROUND**

第一期：「初期・その他」十一月二十六日～十二月八日

第二期：「無縁—有縁 修復」十二月十日～十二月二十二日

第三期：「異界交流 合体」十二月二十四日～二〇二〇年一

月十一日

この段階での青野の集大成ともいえる、メディアテークでの大型企画展と、それを中心に、**Gallery TURNAROUND** を会場に連続しておこなった回顧展とでもいえるような、興味深い展示があつた。

作品群が創り出すパワーに応答して、十分な論評は、この場では今回も書けないが、また紹介や記録も含めて、まとまった論考がいくつかでているので、とりあえず二、三気になったことを書き留めておきたい。

Gallery TURNAROUND での展示を見ていくと、きわめ

て早い段階から、テイストやコンセプトが絞り込まれ、ブレずに続いていることが、それぞれの同時代に、初出で見ているとき以上に感じられたが、第一期・「初期・その他」の中に展示されていた、ドロ잉というべきか、何点かの作品に使われている、青緑色とも、緑色とも言い難い色が不思議な雰囲気とテイストの連続を生みだしていた。

メディアアークでの作品群で、一つは、展示の前半の平面性の強い作品より、より立体として作られた作品の表面のほうがある種の強い絵画性、現象的な平面が成立しつつそれと対立するようにイメージが表れる、が見られた。二つ目としては、展示全体の配置がある種の洞窟的な異世界性を持っているかのような在り様と並行して、各作品に凹空間が多く形成され、それも、空間のレベルが一つの部分から、多くの部分が集まって形成されるものまで重層的に繰り返されていた。

にもかかわらず、これは、取材していないので僕の勘違いかもしれないが、あるいは、そんなに意識すべきことではないのかもしれないが、展示の最後、《幾万年の食卓—3.11の夜を経て（青野実家のテーブルセットより）2019》という作品から出口側に、作品の断片とも小部材とも残材といえる木片群が置かれていた。それは、木片の賽の河原ともあの作品群を生み出したアトリエの片隅ともいえそうだが、そこで

は、作品を見ているという知覚状態が切れて物体を見ているという意識の切断があるように思える。この切断は、充実した展示から、外の日常への境界というふうに解釈するよりは、作品が創発させる想像の連関が型とおりになることを引き戻していると考えたい。

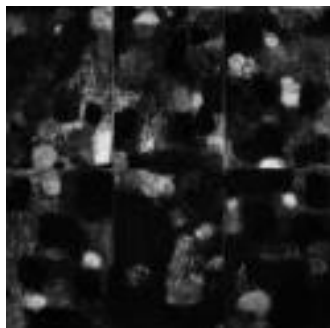
最後に、美術や文化の状況をつくりだす制度面での問題に少しだけ触れておこう。

県レベルでの最大の問題について、その問題の答えではなく反応についてなのだが、多少戯画的に言うところ、市民層と制作者層とで主になった意見の在り方はそれぞれ違うのだが、それぞれの意見の合理的な部分ではなく、声高になる不合理な無意識の部分については、まさにそこが多数性を持てば持つほど、ここ百五十年ほどの美術と文化を巡る歴史性や制度性に規定された意見になっていることである。

（今が）ユートピアが在り得ぬなら、美術の役割の一つは、歴史や制度の別な読みを提起することにある。大声でも声なき声でも、どちらも、ステレオタイプは許されない。「災害」と「祝祭」とその間の「日常」と、どこを区切りにもなく、それらが時間と空間の範囲の取りようでは全てが並行するように、声Ⅱ作品は他者としての自己との対話形式を実装する必要が生じている。完成は無いかもしれないが、

事の進行⇨公共圏の変化を起こす作品は、言葉を変えると、事からの作品ではなく、事を予感⇨予測させる不穏な作品なのかもしれない。
仄見えつつあった。

大^{おお}嶋^{しま}貴^{たか}明^{あき}
(美術家・宮城県美術館学芸員)



佐立るり子《第六感》2019年 H90
× W60cm程度 6枚 パネルに布、炭・
石膏・パラフィン・マツメディウム



「佐立るり子 展 ―思考の森―」展示写真
2019年1月15日ー20日 SARP (仙台市)



Sotaro Kikuchi “喫茶荒地”
(Gallery TURNAROUND 2019)
photo by Tsutomu Koiwa



Sotaro Kikuchi “WISMA KUWERA”
(Gallery TURNAROUND 2019)
photo by Tsutomu Koiwa



部分
多田由美子《テーブル絵画ーニホニウム見聞録》
2019年 150 × 150cm
テーブル・日用品・照明・植物



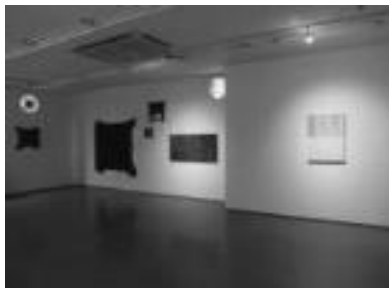
多田由美子 still life 展示写真
2019年4月30日ー5月5日 SARP (仙台市)



照井 隆 《PARALLEL & FRAGMENT 2019 #04》2019 年 H202.0 × W600.0cm
グラシン紙、粘土質の砂



「佐々木 健 展 「薄暮と抽象」」 展示写真
2019 年 11 月 5 日ー 17 日 Gallery TURNAROUND
(仙台市)



「佐々木 健 展 “Dusk and abstraction”」
展示写真
2019 年 7 月 30 日ー 8 月 3 日 SARP (仙台市)



スタジオ開墾 共用スペースでの「せんだい 21 アンデパンダン
展 2019」スタジオ開墾展示写真 撮影：小岩 勉

彫刻

平成三十一年一月から令和元年十二月までの宮城県ゆかりの彫刻、立体造形の作家による制作活動、発表あるいは、宮城県内で開催された展覧会、アートプロジェクト、グループ活動における彫刻、立体造形の作品の紹介や活動の報告を行う。本年も彫刻、立体造形活動の発表は精力的に行われた。震災から九年を経過しようとする中、様々な試練、困難に立ち向かう人々に対して彫刻、造形で何ができるか、また自己の制作とは何か。真剣に考え活動する作家の思いが、見るものに伝わってきた。その中には、素晴らしい優れた発表もあったと思われるが、筆者が実見出来ず、知らなかったものについてはご容赦いただきたい。文中の作家に対する敬称も、略させていただいたことを合わせてお許し願いたい。

川俣正 さんだいいンプログレス2018報告展、アートプロジェクト活動報告展

二月一日から三月十七日 さんだいいメディアテーク

フランスを拠点に活躍する現代美術家川俣正が、東日本大震災の津波で被災した仙台市沿岸部の復興を、支援するアー

トプロジェクトの活動報告展。宮城野区岡田の新浜地区で津波で流された、貞山運河の橋を「橋の機能を持った作品」として掛けなおすプロジェクト。ミニチュアの模型に基づいた、造形ワークショップやパネル展示が行われた。

翁 譲 個展

二月二十六日から三月十日 TURNAROUND 企画

元宮城県芸術協会会員で、現代美術家の翁の個展。言葉にならない情感が感じられる。新作、旧作を交えた展示。

アートみやぎ2019

二月二十三日から四月七日 宮城県美術館

東北生活文化大学を卒業し、多摩美術大学彫刻科講師の木村剛が彫刻作品を出品した。五人の出版作家のうちの一人。七基の彫刻とその上に乗る小さなオブジェ、月の映像で構成された作品。彫刻の可能性を、様々な意味でとらえようと常に新しい表現に挑戦している。観客との対話も行われた。木村は、五年前に宮城県芸術選奨新人賞を受賞している。

スギサキマサノリ展

三月五日から十日 SARPアーティストランプレイス

テラコッタ粘土で、折曲がった子供の人体塑像を公開制作した。作家は、毎日会場で作品を制作しながら、来場者と会話した。現代の子供たちが向き合わざるをえない、様々な問題を抱えた、現代の社会に対する作家の思いが伝わる。

動物xじゅぶつx Dobutsu

三月二十六日から三十一日 晩翠画廊

三人の出品。彫刻は、木彫作家の佐々木莉央が、ウサギなどの動物をモチーフにした作品を出品した。彫刻する際のデッサンを残したままの作風で、作家の思考の痕を感じる事ができる。

彫、挑、超展

四月二十二日から二十八日 東京銀座アートホール

東京、埼玉など在住の八人の彫刻作家のグループ展。大崎市在住で、河北美術展招待作家の宇佐美明が木彫作品「木塑ing」等を出品した。

第八十二回河北美術展 彫刻部門

四月二十五日から五月七日 T F Uギャラリーミニモリ

河北賞は、竹本悠太郎「藍色の肖像」木彫彩色の像。とても技量のある作家である。格調高い作品。東北放送賞は、「光

と風と夢と」鈴木満、ガラス、ステンレス、石による抽象作品、宇宙や自然といった、人間をはるかに超えたものを様々な素材と技法を駆使して制作している。宮城県芸術協会賞は松岡圭介「REFUGIATI」難民の姿を抽象形態で表現した。難民の不安感が強く伝わる佳作である。東北電力賞は、「黒耀」塑像の人体作品、生動感あふれる若々しい作品である。東北福祉大賞は「命の種」清水玄太。米袋を切り裂いて丸めた紐を大量に使用して、卵や米粒を想起させる磨いた白い大理石と組み合わせた具象の人体作品。発想が素晴らしく、少女のポーズも堂々として力強い。秀作である。

「Feel so good」佐野美里彫刻展

四月十二日から二十一日 OONACHI GALLERY (福島県福島市)

木彫の彫刻家として活躍する作家。犬をモチーフにして、ユニークで愛らしい作品を制作している。松島町在住で、新作を含めた二十点が展示された。

石の若手彫刻作家四人展

「109 サポートセンター」白石市

仙台市在住の、清水直土や白石市小原在住の清水玄太など四人が、約三十点の作品を日本家屋を改装した、和風庭園やセンター内に展示した。

第六十七回創型会展

東京都美術館

宮城県芸術協会会員の赤井靖武が、文部科学大臣賞を受賞した。「陽だまりの丘」と題した木彫作品。丸太を輪切りにしてあるが、その中に猫が車輪を回しているような造形である。生動感と時空を旅するような心地よさが伝わる秀作である。



赤井靖武「陽だまりの丘」

地域の作家が展示する作品展。宮城県芸術協会会員の姉齒公也、小関俊夫、早坂修、彫刻家の宇佐美明らが造形作品を出品した。絵画、写真など大崎地方や南三陸町などで活動する二十一人が百十七点を出品した。

20th LIFE WORK EXHIBITION

六月二十九日から七月三日 センダイメディアアテーク五階

東北生活文化大学の二十九期卒業生によるグループ展。丸山恵美が女性をモチーフにした塑像彫刻作品「えん・ぎ」、山本泰士が、動物をモチーフとした段ボール彫刻を出品した。その他二十二名による絵画、工芸、デザイン等多様な展示が行われた。

「TAKUYA HATAKEYAMA KOTEN」

六月十八日から二十三日 晩翠画廊

登米市の彫刻家 畠山卓也の作品展、石彫やアクリルの平面作品など三十五点の展示。大理石の丁寧な磨きによる「SANRIKUFISH」など河北美術展入賞作品などが展示された。

「角のある形―余白・SARP」翁ひろみ個展

六月十五日から三十日 SARP

展示空間を主題にした展示。ギャラリーの壁や隅の一部

JIBART 展

六月四日から十日 大崎市民ギャラリー緒絶の館

を再現した石膏の作品六点の展示。展示空間自体も作品化した。

「YACHAM !! るくおんな元年」

六月十五日から三十日 ギャラリーターナーア라운드

東北生活文化大学OG六人によるグループ展、阿部扶美子が立体を出品した。

リボンアート・フェスティバル2019

八月三日から九月二十六日 牡鹿半島、網地島、石巻市街地、松島湾（宮城県石巻市、塩釜市、東松島市、松島町、女川町）

瀬戸内芸術祭など、日本各地で大規模な野外アート展が開催されている。この展覧会は、ほかの芸術祭に匹敵するかそれ以上の、内容の濃い展示が楽しめるフェスティバルである。

地域の高齢者が案内してくれたり、説明してくれる、地域みんなでこの行事を支えているこうとの温かい気持ちたちが来場者に伝わる。

コバルト荘跡地の石川竜一の「痕」、ユニボで大地を掘り出したランドアートによる大規模なインスタレーション。島袋道浩の「白い道」、玉砂利がひかれた白い道を歩むと、海が現れる。笛を吹き、雄大な自然と自分が一体化するような感覚になる。身体全体で自然を体感させてくれ

る作品である。堀場由美子の「その場の物語—He Knows everything—Vol2」、精緻で不思議な造形。鹿の頭蓋骨や角を使用した彫刻の展示。心に何か霊的なものが引っかかる作品である。萩浜エリアにたたずむ名和晃平の「White Deer (Oshika)」、巨大で聖なる白鹿。野村仁の「Analemma-Slit:The Sun,Ishinomaki」自己と自然と宇宙の関係を体感させてくれる作品である。またそれらと一体化できる作品でもある。作者がそこにいて、話ができて作品について語り合える。身体ごと感ずることのできる質の高い作品がある。すべて見たえのあるものばかりであった。参加作家たちとそれを支える人たちの、このフェスティバルのテーマ「いのちのてざわり」への思いが、気概が、充滿する素晴らしい空間であった。

Zero x Zeo・ケルビン現代彫刻展

九月六日から十一日 せんだいメディアアテーク六階

内山翔二郎、清水玄太、森岡慎也、相本みちるが出品した。金属、石材、軍手など彫刻で制作材として使用されるものから、日常の生活用品まで使い斬新な作品が展示されていた。彫刻、立体造形に対する可能性の探求心が大いに感じられた。清水玄太が手彫りで温かい印象の石彫作品を出品していた。

吉岡滋人彫刻展

九月十四日から十月二十日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館
一九七一年北海道芦別市生まれの作家の木彫展。精力的に制作活動を展開している。



ゼロ・ケルビン現代彫刻展

野外彫刻公開制作

九月十九日から二十九日 東松島市野蒜防災体験型宿泊施設
砂を素材に巨大な作品を制作する保坂俊彦が、「天女と鯉」をモチーフに「キボッチャ」と題した高さ三・六メートル、幅五メートル、重さ八十トンにもなる震災祈念の作品を制作した。犠牲になった児童を追悼するイベント。

第八十三回 新制作協会展

九月十八日から三十日 国立新美術館
石巻市出身で会員の高家理が石彫作品「バギーばいわ」を出品、清水直人が石彫作品「そよ風ライダー」を出品し入選した。



清水直人「そよ風ライダー」

第五十六回宮城県芸術祭彫刻展

九月二十一日から二十六日 メディアテーク六階ギャラリー
宮城県芸術祭賞は「凜」赤井靖武。木彫による作品。作品に、猫を登場させる作風になっている。東京の全国公募展、創型会で文部科学大臣賞を受賞した作品にみられる、新たな展開である。猫は自分であろうか、時間がテーマであろうか、不思議な面白さがある。宮城県知事賞は相澤オサム「布ガムテープ 2019-9 落花生」実際にプールや河川で大きな落花生を浮かべて流れてゆく様子を撮影し、映像化した。その

映像を、会場で流しながら落花生を展示した。自分が、流れる姿を見ているような擬人化された落花生ともいえる。ユーモラスな感覚、見る人の心を開く楽しい作品である。震災被災者に対する心の支援を目指している。河北新報社賞は、「こころのかたち」中平哲夫。人体の量感と動勢が調和して、優しい作品のテーマが、力強いものに感じられる。細部にまで心をこめて丁寧な、制作し造形している秀作である。菅野美術館賞は永倉香名子「青嵐」、人体塑像による作品、着実な造形性が人間の精神を表現し、見るものに伝わる秀作である。芸術展会場ではメディアアートの構造体のチューブを背景にした展示により、光が背後から映り込み効果を生んだ。聖性も感じられた。招待作家は、畠山卓也。大理石の彫りと丁寧な磨きで、魚の群生を表現した「SANRIKUFISH」を出品した。

彫刻公募展では、宮城県芸術協会賞が東北生活文化大学の学生、寺澤大和「生まれるということ」木



相澤オサム「布ガムテープ 2019-9 落花生」

彫と、小作品で構成した作品。新しい作家の育成を、目指して公募している。



寺澤大和「生まれるという行 (為)」



中平哲夫「こころのかたち」

ふわふわとたゆたう 姉齒公也個展

十月十七日から二十四日 蔵王町ギャラリーカフェ CrossRoad
モビール作家の個展、空気の流れで微妙に動く造形である。

第七十四回行動展 仙台巡回展

十一月十五日から二十日 せんだいメディアアテーク五階

三十七年ぶりの仙台巡回展、百点余りの絵画、彫刻の展示、
翁観二らが出品した。

山中環 石彫展―石の一筆書き―

十一月十六日から三十日 ライフスタイルコンシェルジュ
仙台一番町

石彫家の山中によ
る、石をここまで造
形して生命感を表現
するかという、素晴
らしい技術力と作家
のユニークな視点が
面白い。



石の一筆書き

「清水直土のおもちや場個展」

十二月十一日から十六日 東京 ギャラリーストークス
石彫作品中心の展示、清水独特の世界を二十点余りの石彫
作品で表現した。

しょうじこずえ展 ……「一滴を、宿す」…

十二月十三日から二十二日 東京 ギャラリーフェイストゥ
フェイス

ペン画、布絵、木彫中心の展示、宮城県芸術協会会員で山
元町在住の作家、宮城、東京のみならず韓国、台湾などのア
ートフェアなどでも活躍している。

宮城の彫刻 菅野美術館賞受賞者展

十二月十一日から二十五日 菅野美術館

宮城県芸術祭彫刻展で、菅野美術館賞が創設されてから受
賞した作家の展覧会。二〇一〇年に菅野美術館館長によりこ
の賞は創設され、以来十作が受賞、その八人の作家が二十一
点の作品を展示した。絵画でなく彫刻の展示に適した空間で、
自然の光線の効果も考えられている。有機的な造形と幾何学
的に設計された空間が相乗的な効果を生んで、それぞれの作
品が、とてもよく鑑賞できた。赤井靖武、板持彰、小泉百合
子、佐々木莉央、丹野智子、永倉香名子、中村たみ子、松下

文久が出品した。

「昭島・昭和の森」開園

仙台市出身でイタリア在住の武藤順九の作品九点を展示する「武藤順九彫刻園」が東京都昭島市、「昭和の森」に開園した。樹木や花と彫刻が調和するように展示されている。展示するのはローマのバチカン宮殿や、インドのブッダガヤ寺院などに展示された代表作「風の環」シリーズの二分の一モデルを中心にした大理石の彫刻。

第六十九回新現美術協会展

十二月十三日から十八日　せんだいメディアテーク五階

彫刻、立体作品では四名が出品していた。山本泰士のダンボールで制作された猫の造形は、壁面に展示され様々な猫の表情を良く捉えユーモラスに表現していた。横山信人はバス停を造形で表現。ベニヤ板を細かに切り裂いて貼り付けた作品を展示した。

佐　　藤　　淳　　一

（東北生活文化大学美術学部学部長・教授）

工芸

第六十五回日本伝統工芸展の巡回展が一月二十九日から仙台三越で開かれた。前年開催の本展後、例年この時期に仙台展が行われている。本県からは八点の入選作が展示され、会期中は大勢の来場者で賑わった。

私はこの会場で、ある作家の作品に出会うことを楽しみにしてきた。磁器の練り込み作品だ。数年前、『Spangle』という作品を目にした時、そこから漂ってくる雰囲気が一際、印象的で懐かしさと同時に鮮烈な感動を覚えた。遠目には白一色の作品だが、近づいてよく見ると、表面の柔らかな凹凸は波紋を思わせる仕上がりで精緻に組まれた放射の文様は光をあててみれば夢幻のように透けて見えるだろう。

ある時、何気なくテレビを見ていて、石膏型に薄い粘土の板を巧みにかぶせていく作者の手が目に入ってきた。次の瞬間、富士山の麓にある工房の一角で蛍光灯の明かりのもと、一心に石膏を削っているM君の姿が私の脳裏をよぎった。数十年前ぶりに見た彼は、練り上げの技法で異彩を放つ陶芸家だった。

アートギャラリーでは日本工芸会 東北の作家による作品

展「手から手へ」も併催され、技術の粋を集めた全国の工芸作品を一同に鑑賞できることの幸運を実感した。

五月、仙台市内の晩翠画廊で岸上まみ子作陶展が開かれた。彼女の作品は磁器の持つ硬質で冷たい印象とは違う柔らかな白さが特徴だ。

確かな技術でクロ引きされた形はきつぱりとして清々しい。素焼きを終えた器に弁柄で多彩な表情の線を一筆一筆、丁寧に描きこんでいく。絵付けの作業は大きい作品になると骨描きから始まって仕上がるまでには数日間かかることもあるそう。吟味して入手した細筆は輪郭を描くうちにたちまち消耗してしまう。線描きした中には大きな筆を使い具須を用いてだみを施していく。

山紫陽花文蓋物と鳥文蓋物に心を惹かれた。身近に生きる動物や草花に温かな眼差しが注がれて、見慣れた日常の中に豊かな世界が広がっていることを教えられた。

蚕の吐いた糸をそっと引き出し、引き揃えて糸にする、この手仕事を「座繰る」という。私はこの言葉を染織家の吉田信子から聞いた。

「繭を煮て糸を作り、草木で染めて、布を織る。昔は誰もが行っていたことでした。既製服が手軽に買えるようになったのは、ここ六十年〜六十五年ほどのことです。それまでは、衣は母（あるいは近しい人）が作るものでした。アサやカラムシを植えて繊維を取り出し、糸にして織る。養蚕の盛んな地域では屑繭で糸を取り、よそ行きの着物を織りました。家族の衣の管理は女の人の重要な仕事で、手間をかけて作った衣は縫い直しや補修を重ね、端切れにいたるまで大切にされました。このことは今や急速に忘れ去られようとしています。特に糸は、機械で作られたものが流通し、手で作ることがほとんどなくなってしまうました。自然物である繭やアサはかなりの無理を強いられ痛めつけられ、さらに機械で織りやすいように均一化され、味気ない糸となってしまうです。」

彼女は繭を丸森の養蚕農家から直接分けてもらい、健全さを欠く要因を排除して手で引き出していく。こうすることで艶やかで自然の伸縮性を持った糸になる。そして繭を煮てつむいだ糸は、撚りのかけ具合や太さによって、無限の表情を表す。

「機械にはかけられない、健全で奔放な糸をだしましたし織ると、それは風合いや肌触りとなって、人に伝わると思っています。急速に失われようとしている糸つくりや織の技術を伝承することも、私の大切な仕事です……」

七月、彼女は「森から布を作る」というテーマで山形と仙台を舞台にワークショップを開催した。

九月、第五十六回宮城県芸術祭のテーマイベント「結い〜次代へ〜」の舞台で染色家山崎泰子と書家池田儼雲によるコラボレーション作品が紹介された。前年の芸術祭工芸展で中国の美術家、齊白石の書を山崎が池田のアドバイスを得て藍染めで表現した作品がきっかけだった。制作は「令和」の文字と梅花の歌が揮毫された縦百六十センチメートル・横百三十センチメートルの原寸大の紙に白梅の文様を重ね合わせ、梅文を配置してゆくことから始まった。絹の布の表と裏に刷毛引きで地入れをした後、白色を残す部分にのりを置いて、外側から薄い青のぼかし染めを繰り返す。次に梅花の文様に色の変化をつけるため、のりを重ね、型紙も使用しながら文様を際立たせる。最後に、画面全体を俯瞰しながらポイントとなる梅の花に赤を着色し、さらに黄の色も効果的に配置して梅花文を浮き上がらせた。染められた布は一旦書家の手に渡される。池田は明るい青のグラデーションの中、梅の文様が染められた絹布に梅花の詩を字配し、特徴的な黒色の文字造形を揮毫した。その後、水洗い、乾燥の後アイロン掛けされた作品は書家によって押印され、二人の共同作品『令和を祝う』が完成した。

会場に集まった人達に染色家は「色の足し算をパレットの

中ではなく布（きれ）の上でしています。」と制作の一端を話してくれた。

十一月、宮城教育大学の窯芸実習場で陶芸ワークショップが開催され、大学のOBである市岡泰が講師を務めた。

市岡は日本陶芸展や伝統工芸展で入選、入賞を重ねている気鋭の作家だ。彼の作品は陶土の特徴を生かした質感で際立った印象を与える。普段使いの器も素地、化粧土、釉薬を自在に組み合わせる意匠を凝らし、多くのファンに支持されている。

ワークショップ当日、参加者は電動ロクロで筒形を複数個作ることから作業を始めた。慣れないロクロ引きに悪戦苦闘をしながら引き上げた基本形を適度な乾燥の後に変形し、組み合わせることで思いもかけない形に仕上げる事ができた。

仙台を紹介する雑誌の十一月号で石巻在住の陶芸家亀山英児が紹介されていた。彼は堤焼乾馬窯、四世針生乾馬のもとで修行した



陶芸ワークショップ

後、独立し、石巻市の旧河北町三ノ輪田に築窯した。

仕事は土づくりから始まる。掘り出してきた土は水簸の後、適度な硬さになるまで乾燥して、頃合いを見て土練機にかけ、粘りが出てくるまで室で寝かせる。

ロクロ引きの技術は九年間の修行で培ったもの。土は手の中でまるで生き物のように閉じ、膨らみ、形が決まっていく。近くの山から採取してきた石に長石や石灰を加えて出来上がった釉薬は予想もしなかった青色を呈色した。さらに灰を加え調整すると石巻の海を象徴する青に白波のような釉調が生まれた。

七宝作家、高橋通子は一九九七年から一年おきに北京工業大学芸術設計学院で客員教授として教鞭をとってきた。本年も六月に省胎七宝の技術指導と講演を行なった。氏の労作となる技法書「七宝 美の世界」のページをめくっていると、初めて実技指導を依頼された時の逸話が語られている。



北京工業大学美術学部にて省胎七宝を指導

北京の琺瑯工場でのことだ。苦心の末に出来上がった省胎七宝の作品を前にして、一人の工具に説明を遮られた。「あなたが言った通りに作ったができない。日本人の言っていることは本当か」と。

四年後、氏は再び依頼され、技術交流の現場に立つ。この時、言葉こそ通じなかったが、図を示し、身振りを交えながら互いに実技交流をし、共通の仕事をし終えたことで初めて共感を得ることができた。

かつて氏は省胎七宝作家加藤耕三氏の省胎七宝鉢に出会い、その美しさに心を奪われた。省胎七宝は難易度が高い。剥離や割れを防ぐ裏釉が必要になる。

それから試行錯誤が始まった。解決の糸口が見つからないまま行き詰まった時に師である重無形文化財保持者早川義一氏から釉薬の指導を受けた。その中に一つのヒントを見つけた。

そうして五年の月日をかけて独自の裏釉を作り上げ、省胎七宝の技術を復活させた。氏はこの時期のことを「私の七宝生活の中で最も思い出に残る期間であったと思います。」【七宝美の世界】と回想する。

昭和六十二年の河北新報にシリーズで特集された記事「『創るこころ』七宝・高橋通子―1』」の中に「：何かに会った時、そのものの中にどこか引きつける点を感じたら、思い切って、

その出会いにかかわりたい意欲を燃やすこと：」という一文がある。氏のこの言葉を書き添えて本年度の公募展、団体展の入選、入賞者を紹介していきたい。

文中では敬称を略させていただいたことを御了承願いたい。

四月、東京都美術館で第五十八回日本現代工芸美術展が開催された。

竹藤の林恵美子が「銀河」で【現代工芸賞】、染織の古山文子が「硝子障子」で【現代工芸新人賞】をそれぞれ受賞した。

そのほかの宮城県の入選者は次のとおり

大江文彦 「プリズム」(陶磁)

桑原リエ 「風光絶佳」(陶磁)

第五十九回東日本伝統工芸展

ガラスの鍋田尚男がモザイク硝子兜鉢「回雪」で岩手県知事賞を受賞した。

宮城県の入選者は次の通り

橋本昌彦 「塩釉条文方壺」(陶芸)

甲田綏郎 精好仙台平袴地「瀧眺」(染織)

江田 蕙 面取釜「凍雪」(金工)

高橋通子 省胎七宝壺「繚乱」(諸工芸)

鍋田尚男 モザイク硝子兜鉢「回雪」(諸工芸)

第四十四回東北現代工芸美術展(六月)

東北六県在住または出身者を対象とする造形作品の公募展で一般の入賞、入選作と会員・顧問・審査員の出品作八十九点を展示した。

宮城県の入賞者は次のとおり。

一般入賞

【河北新報社賞】

合田智恵 「炎舞」(籐)

【宮城県知事賞】

山口幸雄 「風の行方」(陶磁)

【仙台市長賞】

相沢静子 「思い出の尾瀬」(染織)

【奨励賞】

今野隆子 「宵の滝桜」(染織)

只野和子 「紺碧」(陶磁)

水谷志津子 「稗(わら)」(陶磁)

第六十六回日本伝統工芸展(九月)

宮城県の入選者は次のとおり。

橋本昌彦 「塩釉刷毛書長方皿」(陶芸)

本間 潔 「櫻拭漆盛鉢」(木竹工)

甲田綏郎 精好仙台平袴地「雪聲」(染織)

安藤令子 七宝鉢「森の中」(諸工芸)

種澤有希子 省胎七宝器「秋の野」(諸工芸)

宮城県芸術祭工芸展(九月)

宮城県の芸術祭工芸展がせんだいメディアアテークで行われ、宮城県芸術協会会員による作品が展示された。

本年度の【宮城県芸術祭賞】に馬場興彦の「彩泥鉢」(陶芸)が選ばれた。

そのほかの受賞者は次のとおり。

【宮城県知事賞】

村山耕二 「Geological Glass」

(地質学的アプローチのガラス)(ガラス)

【河北新報社賞】

もみやま尚子 「飛翔」(金工)

【宮城県教育委員会教育長賞】

桑原リエ 「風光」(陶芸)

【宮城県教育委員会教育長特別賞】

林恵美子 「悠久」(木竹芸)

【公益財団法人宮城県文化振興財団賞】

新藤睦子 「祈りの時」(陶芸)

【宮地房江賞】

横田美和 紬着物「薄荷の花」(染織)

第二十八回河北工芸展(十一月)

陶芸の鈴木由香が「登米藁灰釉掻き落とし花器」で河北賞を受賞した。

「周囲の空気をうまく取り込んだ。口元は縄文の火炎土器のようだ。」と評された。

他の宮城県を受賞者は次のとおり。

【青森県知事賞】

宮川敏子 「虹の架け橋」(陶磁)

【岩手県知事賞】

櫻井富久子 「夜の秋」(染織)

【宮城県知事賞】

山田 龍 「転生杉隠浮造輪廻十角箱」(木竹)

【秋田県知事賞】

林恵美子 「渦」(木竹)

【福島県知事賞】

加藤 晋 「深雪」(陶磁)

【仙台市長賞】

小林寛子 タペストリー「糸遊」(染織)

【宮城県教育委員会教育長賞】

木村八百子 「愛し野丘」(陶磁)

【仙台市教育委員会賞】

村上 章 「軌跡」(木竹)

【宮城県文化振興財団賞】

水谷志津子 「春寒料峭」(陶磁)

【宮城県芸術協会賞】

園部信子 「風音」(人形)

【NHK仙台放送局長賞】

横澤秀夫 「歓天喜地」(陶磁)

【東北放送賞】

福田一実 「みえない想いを湖に浮かべて」(人形)

【東北電力賞】

軽部和湖 「ウレシバ」(染織)

【東北福祉大学賞】

千田 圓 「花紋―風雷」(木竹)

十月に**第三十五回石巻市美術展**が河北総合センタービッグバンで開催された。

陶芸部門の受賞者は次の通り。

【石巻市美術展賞】

阿部繁夫 「飛龍」

【宮城県知事賞】

山口光成

「没骨鉄絵緑彩竹文大皿」

【河北新報社賞】

熊谷百里子

「クレマチスのダンス」

【NHK仙台放送局長賞】

後藤次夫

「色絵花文皿」

【石巻ロータリークラブ賞】

本田律子

「釉彩葉文皿」

【奨励賞】

平塚新次郎

「焼締め角口壺」

改組 新 日展が十一月に国立新美術館で開催された。

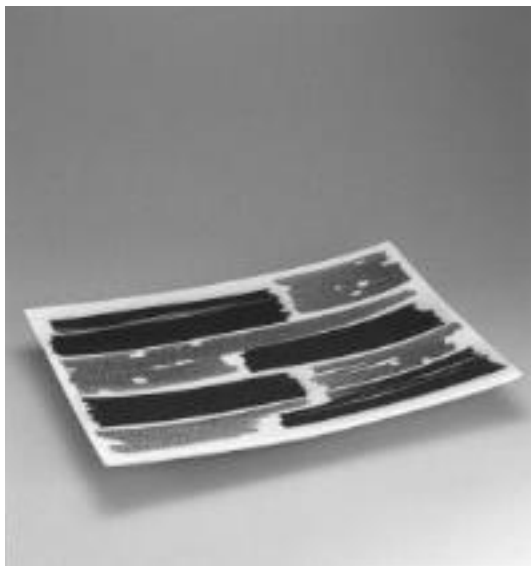
第四科 工芸美術では小川和子が「飛翔Ⅲ」で入選を果たした。

樋田隆

(宮城県芸術協会工芸部部长・陶芸家)



小川和子 「飛翔Ⅲ」 改組新第六回日展



橋本昌彦 「塩釉刷毛書長方皿」 第六十六回日本伝統工芸展



甲由綏郎 精好仙台平袴地「雪聲」
第六十六回日本伝統工芸展



本間潔 「櫛拭漆盛鉢」 第六十六回日本伝統工芸展



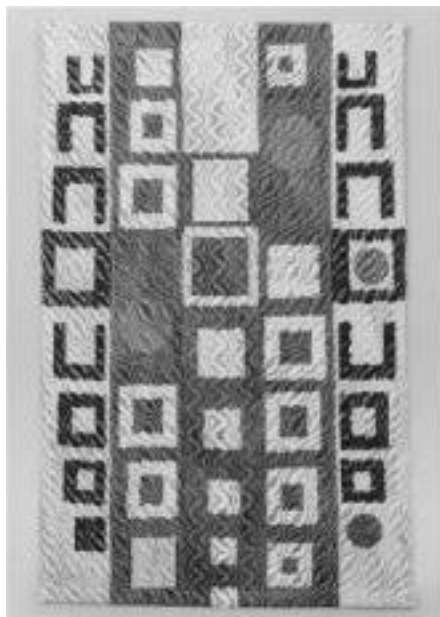
種澤有希子 省胎七宝器「秋の野」 第六十六回日本伝統工芸展



安藤令子 七宝鉢「森の中」 第六十六回日本伝統工芸展



林恵美子 「銀河」 第五十八回日本現代工芸美術展 現代工芸賞



古山文子 「硝子障子」 第五十八回日本現代工芸美術展
現代工芸新人賞



鈴木由香 「登米藁灰釉掻き落とし花器」 第二十八回河北工芸展 河北賞

書

芸術面ばかりでは無いが、その関わりを持つ人間の数は非常に大事である。其れが今、極端に少なく成りつつある。

書道分野に関してもこれは例外ではなく、県内全体の会派の構成人数は、一時代前から比較すると減少と言う言葉を使わざるを得ない。

そんな中、令和改元に伴い、県内各地で揮毫イベントが多数、開催された。

又、残念なニュースとして永く県内の書道界を牽引してきた山崎晁秋、大友青陵が相次いで鬼籍に入られた。その功績に心より敬意を表し改めまして哀悼の意を表す。

◎文化庁地域文化功労表彰は中塚 仁

◎宮城県芸術選奨は田村政晴

主な書展

◎第六十六回河北書道展

(九月一日から八日までTFUギャラリーMini Moriで開催。主催は河北新報社、河北文化事業団、特別協賛、JAL)

出品点数は八百十三点、入賞、入選作と顧問を始め審査委員など含め千三点を展示。昨年同様、公募と会友を分けて審査を実施した。

巡回展は九月二十五日から二十九日まで大崎市民ギャラリー緒絶の館で開催。主な受賞者は次の通り。

公募部門

河北賞 軽部奏月 斎藤 瞳 武者友紀 吐生宗彌 吉田活実 小野寺千寿華 伊藤里祥

宮城県知事賞 齋藤雅貴 仙台市長賞 渡辺桃苑 宮城県教育委員会教育長賞 平塚汀泉 金沢泉明 仙台市教育委員会賞 中村舜水 藤崎賞 渡邊紀峯 宮城県芸術協会賞 伊藤

智子 JAL賞 水戸盛雄 東北放送賞 相内珠莉 加納鳴華 東北電力賞 笹木蒼風 東北福祉大学賞 浅野麗翠 奨励賞 富沢信重

会友部門

河北会友賞 志賀彩華 鎌田陽子 阿部緑玲 会友秀逸賞 石井秀苑 佐々木草萌 吉田恵也 太田栄美子

伊藤煌容 砂金 碧 対馬恵萩
委嘱作家からの特別賞

阿部香華 沼澤祥泉 一條紅蕭 佐藤華炎 三浦八重子 菊田杏仙



第六十六回河北書道展 委嘱作家特別賞
三浦八重子

◎第三十六回産経国際書道展東北展

(八月三十日から九月四日まで) せんだいメディアアテーク
東京本展には公募、会友以上約二千五百点の展示。本県からの主な入賞者は内閣総理大臣賞に田村政晴。
同時に「2019産経ジュニア書道コンクール」も開催。

◎第七十一回毎日書道展東北仙台展

(十月十三日から十八日まで) せんだいメディアアテーク

東北仙台展には宮城、青森、岩手の入賞者と同展役員の作品を中心に約900点が展示された。東北仙台展の応募総数は三県で約千三百点。

県内からの主な入賞者は次の通り。

会員賞 武山櫻子 千葉

紅雪

毎日賞 松坂嶺雪 板橋

雅邦 佐々木一峰 三浦

淡虹 荒川空華



第七十一回毎日書道展 会員賞 千葉紅雪

◎第五十六回宮城県芸術祭書道展

公益社団法人宮城県芸術協会主催芸術祭書道展

(九月二十日から二十五日まで) せんだいメディアアテーク

入賞者は宮城県芸術祭賞 吉岡芝耕 宮城県知事賞 黒田

清苑 仙台市長賞 菊池慶輝 河北新報社賞 千葉四帆 宮

城県教育委員会教育長賞 藤野秀一 宮城県教育委員会教育

長特別賞 武山櫻子 一関京子 仙台市教育委員会教育長

賞 木村笙園 宮城県議会議長賞 中島桃沙 仙台市市議会

議長賞 一條紅蕭 (公財) 宮城県文化振興財団賞 船山常

松 佐藤華炎 小嶋カズ子 (公財) 仙台市市民文化事業団

賞 佐々木鳳堂 門伝勝太郎賞 板橋翠苑 宮城県芸術祭奨

励賞 岩崎邦彦 長谷川青澄 庄司清香 小元雅香 佐々木

青霞 天野白扇

関連行事として、受賞者による席上揮毫会。

◎第三十六回読売書法展・東北展

東北展は十月三十日から十一月三日まで

山形美術館 山形県芸文美術館で開催。(実行委員長 大

友青陵) 東北六県から役員、入賞、入選作品を展示。

社中展、グループ展、個展ほか。

〈二月〉

◎東北書道新春選抜展(会長 後藤大峰)

(十日から十六日まで) せんだいメディアアテーク

新春にふさわしい漢字、かな、篆刻、刻字の役員選抜作品、

七十点を展示。

〈二月〉

◎第七十一回県・仙台市小中学校児童生徒書き初め展覧会

(十六日から十八日まで) 県連合小・中学校教育研究会書

写研究部会など主催、市情報・産業プラザ)

毛筆と硬筆の各部で選ばれた県内の小中学校の優秀作品と

仙台市内の児童生徒の入選作品を展示。

◎田村政晴書作展

(二十六日から三月三日まで) セントラルミュージアム銀

座)

近代詩文、漢字を中心に三十点。宮澤賢治の「銀河鉄道の

夜」、縦百八十一センチ、横九百六十五センチの大作が圧巻。

◎仙萩会書展(実行委員長 叶 きみ子)

(十五日から二十日まで) せんだいメディアアテーク

二〇一七年以来、二年ぶりの開催、小品など約五十点。

〈四月〉

◎創立九十六周年記念 書禅会展(会長 池田僊雲)

(二十七日から五月一日まで)

一般会員、教育部作品、約百五十点。二〇一五年以来の開催。

〈五月〉

◎2019みやぎを魅せる書展（代表 千葉蒼玄）

（三日から八日まで） せんだいメディアアテーク）

七十五人、七十五点の大作展。社中の垣根を越えて新たな書の魅力を探る書展。今回は宮城県に關係する題材を選抜、二十人が出品。

◎第四十九回宮城書芸院書展（会長 加納鳴鳳）

（十五日から十九日まで） 大崎市民ギャラリー 緒絶の館）
漢字、詩文書を中心に百点を展示。

最高賞には永沢翠雪。

◎第六十五回全国公募東北書道展（会長 後藤大峰）

（十八日から二十三日まで） せんだいメディアアテーク）

役員、一般公募の部（漢字、かな、篆刻・刻字作品）、及び教育、学生部を併せて千八百点の展示。東北書道大賞・内閣総理大臣賞には大山雪柳。

〈六月〉

◎加納鳴鳳書展

（二十七日から三十日まで） 大崎市民ギャラリー 緒絶の館）

「腎臓移植四十五年」と題し、書を自身の闘病克服の糧とした事を表出したの思いから、これを企画されたと言う。

注目作は、江戸時代の漢詩人、菅茶山の七言絶句。病床の作者が当時の心境を表した作。作家自身の今に重ね合わせた、縦二百四十センチ、横六十センチの大作。

展覧会はこの後、八月に石巻で、令和二年一月に仙台でも開催。

〈八月〉

◎第四十七回宮城野書道展（会長 佐藤象雲）

（九日から十三日まで） せんだいメディアアテーク）
一般会員は漢字を主に約百点、併催の教育部展は約二百七十点。

◎玄穹社社中展 併催 第十一回玄穹社学生展（会長 千葉蒼玄）

（九日から十二日まで） せんだいメディアアテーク）
前衛書を中心に百点、学生展約四百点の展示。役員作品に注目した。

◎宮城野書人会学生書道展（会長 尾形澄神）

（十六日から二十一日まで） せんだいメディアアテーク）
学生部展、約千四百四十点を展示。
併せて、同会創設者、加藤翠柳の「翠柳かな」作品ほか、役員作品の展示。

〈十月〉

◎第五十八回洗心書道展（会長 中塚 仁）

(三十一日から十一月三日まで 宮城県美術館・県民ギャラリー)

会長ほか会員作品、約七十点、他に教育部作品を展示。初代会長、有井凌雲の作品も展示。

今年度版も紙面の関係にて掲載する事の出来なかつた書展も多数あつたこと残念に思う。諸賢の宥恕をお願いしたい。又、敬称を略したことあわせて、お許し頂きたい。

後

藤

大

峰

(宮城県芸術協会 参考)



加納鳴鳳書展



田村政晴書作展

写真

はじめに

二〇一九年。東日本大震災から九年。「平成（へいせい）」が終わり、「令和（れいわ）」に改元される。平成天皇が四月三十日に退位され、五月一日、新たに皇太子徳仁親王が第百二十六代天皇に即位された。新元号「令和」は、「万葉集」から引用された。元号では初めて、日本の古典（国書）が出典となった記念すべき年でもある。記念すべき年といえば、ラグビー・ワールドカップが日本で開催。日本は健闘し、初のベスト8入りを果たした。チームスローガン「ONE TEAM（ワンチーム）」は、年末の新語・流行語大賞に選ばれた。また、大会を通じ、出場チームの国歌や、代表歌を一緒に歌うなど、ホスト国としての観客の振る舞いも注目を集めた。

喜ぶべきニュースに対して、驚くべき悲しいニュースもあった。その一つに「京都アニメーション放火」がある。七月十八日午前、京都市伏見区のアニメ制作会社「京都アニメーション」第一スタジオで、男がガソリンをまいて火をつけ、

鉄筋コンクリート三階建て約七百平方メートルがほぼ全焼した。死者は三十六人、負傷者は三十四人に上り、平成以降の火災では死傷者が最多の惨事になった。人気作品の監督や有望な若手アニメーターなど多くの才能が失われた今回の事件は、世界中で報道され、海外の著名人やファンからも追悼の声が相次いだ。

また、今年は、消費税率十%がスタートした。十月一日、八%から十%に引き上げられた。外食や酒類を除く飲食料品などの税率を八%に据え置く軽減税率制度や、キャッシュレス決済を対象にしたポイント還元制度も同時に導入された。増税による増収は、社会保障の充実や、幼児教育・保育の無償化などに充てられる。

そして今年も天災は続いた。十月十二日に上陸した台風十九号は東日本の広い範囲で大雨となった。国土交通省によると、東北地方や関東地方を中心に七十一河川百四十か所で堤防が決壊。浸水や土砂崩れなどで死者は九十人を超えた。特に県内では丸森町の被害は大きかった。

天災だけではない。十月三十一日未明、那覇市の首里城

から出火し、中心的建造物である正殿など計八棟が焼損。七十四年前の沖繩戦で焼失したが、一九八九年に復元工事が始まり、今年一月に全体の工事が終わったばかりだった。琉球王国の王宮だった首里城は、二〇〇〇年に城壁などが世界文化遺産にも登録されている。

最後にアフガニスタンを支援する民間活動団体（NGO）「ペシャワール会」の現地代表で医師の中村哲さんが十二月四日、アフガン東部を移動中に武装集団に銃撃され、亡くなった。七十三歳だった。中村さんは一九八四年からパキスタンなどで医療活動に従事し、二〇〇〇年にアフガンで起きた大干ばつを機に、井戸や農業用水路の整備などに取り組んできた。国内外から長年の功績をたたえ、悼む声が相次いだ。他にも「カルロス・ゴーン氏の逃亡劇」、「十歳の少女棋士」、「イチロー選手の引退」、「女子ゴルフの人気」、などなど、この一年を振り返ると、新聞や雑誌、インターネット上で掲載される様々なジャンルの「決定的瞬間」は、静かな瞬きの中にあつた。それでは、今年度の「写真展」の概況を振り返ってみたい。

国内の写真展の概況

今年全国的な話題となった展示としては、「あいちトリエンナーレ2019」だろう。従軍慰安婦を象徴する少女像を

展示した企画展「表現の不自由展・その後」の中止・再開で混乱し、運営体制などの抜本的な見直しが求められた一方で、文化庁の補助金の全額不交付（後に減額して交付に。）を決めたことも大きな波紋を広げる結果となった。また、県内では「リボンアートフェスティバル（RAFF）2019」の開催といえる。東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市の牡鹿半島を中心とする食とアートと音楽の総合祭「リボンアートフェスティバル（RAFF）2019」が、「いのちのでざわり」をテーマに八月三日から九月二十九日までの五十八日間開催された。今回から会場に小積浜と網地島を含む七地区に七組のキュレーターが国の内外のアーティストとアート作品を展示した。期間中の来場者数は四十四万人。前回二〇一七年の二十六万人を大きく上回った。宮城県内の展覧会の話題としては、「アートみやぎ」が久しぶりに開催された。これは宮城県ゆかりの作家の活動を紹介する展覧会で、今回で五回目となる。今回は会期の終了近くに東日本大震災が起き、やむなく中断。今回は実に八年ぶりの開催となった。続いて、写真という範疇の展覧会としては、「春」という狂気の季節を題材にした志賀理江子氏「ヒューマン・スプリング」（東京都写真美術館）、「見る」とことと「理解する」とこととの間のズレを問い直す長島有里枝氏「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」（横浜

市民ギャラリーあざみ野)、パフォーマンスの要素を取り入れた、やなぎみわ氏「神話機械」(高松市美術館。アーツ前橋、福島県立美術館、神奈川県民ホールギャラリー、静岡県立美術館に巡回)など、高度な構想力が発揮された。

最後に、今回で二十七回目の開催を迎える「VOCA展2020」でグランプリの「VOCA賞」を受賞した、アーティストデュオ・Nethol(田中義久・飯田竜太)両氏は、写真の要素が大きい作品であったし、「VOCA奨励賞」の菅実花氏と李晶玉氏の作品も、同じく写真的要素が大きいと言える。また、大原美術館が同館独自の選考を経て決定する「大原美術館賞」は、絵画作品ではあるが、こちらは宮城県名取市出身の浅野友理子氏が受賞した。それでは二〇一九年の一月からの県内の動きを見ていきたい。

一月―三月の動き

○「スマホ大衡村百景」

会期 一月十八日～二月七日

会場 大衡村ふるさと館(大衡村)

主催 大衡村教育委員会

スマートフォンで大衡村の自然や人々の写真を集めた展示会で、住民らによる五十二点の作品が展示された。

○第十一回「にっこり写真コンクール」

会期 二〇一八年十二月一日～二月十五日

会場 石巻市北上観光物産センター(石巻市)

主催 にっこり写真セミナー実行委員会

「北上町の四季」をテーマにしたカメラ部門では、竹内邦昭さんによる「黎明」が最優秀賞、「わたしが感じる北上町の魅力」をテーマにしたインスタ部門では nikolenosora さんの投稿した作品がグランプリを獲得した。

○第五十五回「観光のしおがま写真コンクール」

会期 ①一月二十二日～二十七日

②二月五日～二十四日

③二月二十六日～三月十七日

④三月十九日～四月七日

⑤四月九日～二十九日

会場 ふれあいエスパ塩釜 ほか(塩釜市)

主催 塩釜市・市観光協会

市内外の八十四人から自由・ジュニア・レディース部門に二百十六点の応募が集まった。特選には横田弘さん(塩釜市)による「力を合わせて」が選ばれた。

○写真展「小牛田機関区」

会期 二月五日～三月三日

会場 JR小牛田駅(美里町)

主催 美里町総合案内所

地元の「美里フォトクラブ」に所属する志摩勝彦さんが約五十年前から撮りためた機関車などのモノクロ写真四十点を展示した。

○第二回「しろいし慕心フォトコンテスト」

会期 二月十七日～五月十二日

会場 しろいし情報館

主催 白石市教育委員会

戊辰戦争一五〇年記念事業として開催され、二十六点が入賞。佐々木俊江さん（白石市）による、川原子ダムの桜を幻想的に表現した「櫻浪漫」がグランプリに選ばれた。

○第十二回栗原市写真展「ふるさと再発見」

会期 二月二十三日～三月三日

会場 栗原文化会館（栗原市）

主催 栗原市教委・栗原市文化協会

栗駒山や伊豆沼をはじめとする景観や、「裸たるみこし」といった地域の祭りを題材とした作品が並んだ。

○「震災の消えた傷跡と神戸の壁遺構達の写真展」

会期 二月二十二日～四月三十日

会場 南三陸ホテル観洋

主催 リメンバー神戸プロジェクト

遺構という、物言わぬ語り部を用いた防災の啓発や教訓の伝承を目的とし、阪神淡路大震災の被災状況をまとめたパネ

ルなどが展示された。

○写真返還イベント「みなさんの思い出を手元に」

会期 三月二日～二十二日

会場 石巻ニューゼ（石巻市）

石巻市立渡波小の児童が震災後の日常などを撮影した写真を、土屋英二さん（金沢市）が集め、東京や名古屋で展示。当展覧会に来場した撮影者にネガを返還し、成長した当時の児童らの未来への歩みを願った。

○「登米観光フォトコンテスト」

会場 登米市観光物産協会の公式インスタグラムで閲覧可

主催 県東部地方振興事務所 登米地域事務所

「登米を愉しむ」「登米で感じる明治150年」をテーマに開催。長沼ユートピアの花火大会を撮影した布田尚也さん（名取市）の「長沼ユートピア」が最優秀賞に選ばれた。

○第十一回「栗原市観光写真コンクール」

会期 三月二日～二十二日

会場 イオンスーパーセンター栗原志波姫店（栗原市）

主催 栗原市

市内の景観や祭りを題材にした写真を募集。最優秀賞には、八ッ鹿踊りを活写した鈴木岳美さん（栗原市）の「八幡様の秋祭り」が選ばれた。

○第九回「おおさき観光写真コンテスト」

会期 三月十八日～二十九日

会場 JR古川駅、大崎市ホームページでも閲覧可

主催 大崎市

最優秀賞には、鳴子ダムのだれ放流を写した熊谷利昭さん(仙台市太白区)の「日本土木遺産・鳴子ダム」が選ばれた。

○「しろいし中町通り駅前通り写真展」

会期 三月二十三日～二十七日

会場 寿丸屋敷(白石市)

主催 白石高等学校写真部

高校生の視点から、白石市中心部の商店三十五店の店員や商品を撮影した。

四月―六月の動き

○写真展「想いの山 四季Ⅳ」

会期 四月九日～十四日

会場 宮城県美術館(仙台市)

主催 山岳写真家集団仙台

仙台市内外の写真家九名による写真展。山頂や中腹から望む壮大な風景を写し、A1版を中心とした大判サイズで展示した。

○第七回駒美会写真展

日時 四月十日～十四日

会場 栗原市文化会館(栗原市)

駒美会会員の作品と第三十四回河北写真展の入賞・入選作品を集めた企画展。田園風景や祭りなどを題材にした約百点の作品が展示された。

○第三回「3月12日 はじまりのごはん」

会期 三月十七日～四月十九日

会場 せんだいメディアアテック(仙台市青葉区)

主催 3がつ11にちをわすれないためにセンター
20世紀アーカイブ仙台

震災体験を語るハードルを下げる狙いで開催。震災後の食にまつわる写真を十三点展示し、写真を見て思い出したことを付箋紙に記入してもらう参加型の企画展となった。

○「SENDAI COLLECTION PHOTO EXHIBITION Vol.23」

会期 四月二十三日～二十八日

会場 宮城県美術館 県民ギャラリー2

主催 伊藤 トオル

仙台市内の無数の日常風景を一万枚の写真で記録することを目的として二〇〇一年から続くプロジェクト「仙台コレクション」。二十三回目の写真展。大判サイズのカラードリントも含め、約百点を六つのテーマに分けてこれまでになく規模な展示を試みた。

○写真展「懐かしのしおがま」

会期 四月三十日～六月十六日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩釜市）

主催 塩竈市杉村惇美術館

塩竈に生まれ育った故・馬場惣寿氏が昭和二十年から四十年頃にかけて撮影した家族や町並み、お祭り行事などの塩竈のなつかしく興味尽きない写真を展示した。また塩釜東映映画劇場から提供された映画ポスターも会場内で展示した。（撮影・馬場惣寿氏 写真修復・和賀耐互氏 ポスター提供・高橋昭夫氏）

○第九回「美里フォトクラブ・涌谷フォト合同写真展」

会期 六月十八日～七月七日

会場 JR小牛田駅（美里町）

主催 美里フォトクラブ・涌谷フォト

両会の親睦を深めるために企画。鉄道や風景、祭りなどを写した四十五点を展示した。

七月―九月の動き

○写真展「めぐり逢う感動！を夢み」

会期 七月二日～七日

会場 東北電力グリーンプラザ（仙台市青葉区）

主催 宮城読売写真クラブ

会員二十三名が撮影した東北各地の風景や青葉まつりなど

を写した五十点を展示した。

○写真展「閩を編む」

会期 七月六日～八月二十五日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩釜市）

主催 塩竈市杉村惇美術館

写真家阿部明子氏と、美術家の是恒さくら氏による企画展。複数の写真をデジタル処理で重ねた作品や捕鯨を刺繍で表現した作品などが並んだ。

○写真展「震災を見つめて 福島・宮城」

会期 七月二十三日～二十八日

会場 SARP 仙台アーティストランプレイス（仙台市

青葉区）

日本リアリズム写真集団所属の藤田篤男さん・本郷浩さんによる写真展。震災がまだ終わっていないことを知ってもらうために、震災の被害の大きい地区に約八年間足を運び撮りためた八十点を展示した。

○「広瀬川の光」展

会期 七月三十日～八月四日

会場 晩翠画廊（仙台市青葉区）

広瀬川の多彩な表情をとらえた約三十点が展示された。撮影者の大沼さんは「川を通じて自然の価値を見直すきっかけになれば」と話した。

○写真展「一炊の夢物語2018」

会期 八月三日～二十八日

会場 がぎゅうペーカーリー（角田市）

写真愛好家川名正男さん（角田市）が撮影した、自宅裏の小田川に飛来するカワセミをとらえた写真を展示。カワセミが一生を終える瞬間など貴重な場面が並ぶ。

○「写団みちのく写真展」

会期 八月二十八日～九月一日

会場 緒絶の館（大崎市）

主催 写団みちのく

会員が独自の視点でとらえた写真のほか、「伝統の祭り」をテーマにした作品計八十五点を展示。全作品に付された撮影時のエピソード等のコメントも楽しめる。

○写真展「白と黒の虚像Ⅱ」

会期 九月十一日～十六日

会場 イズミティ21市民ギャラリー

笹崎正明さん（仙台市泉区）による写真展。赤外線フィルムで撮影したビル群や日本海など、コントラストの強い写真が四十点並んだ。

○第四回美里フォトクラブ写真展「ザ・田んぼ」

会期 九月十日～二十九日

会場 近代文学館（美里町）

世界農業遺産に指定された大崎耕土などの県北の田園のほか、地域のイベントなどを写した百八十点を展示。

○写真展「ニッポンのこころ 遠野郷の邑楽」

会期 九月二十八日、二十九日、十月四～六日

会場 アートギャラリー杜（仙台市泉区）

民話の里として知られる遠野市。日常に見られる信仰心を撮った三十三点を展示した。

十月～十二月の動き

○「井上浩輝 写真展」

会期 十月十七日～三十日

会場 藤崎百貨店（仙台市青葉区）

代表作「Fox Chase」ほか、北海道美瑛町を中心に動物や風景を写真した二十四点を展示。

◎黒川郡大和町升沢のくらし〈ななりわい〉が結ぶ山・村・人

―移転集落の風景を記憶の窓として―

会期 十月二十五日～二〇二〇年一月五日

会場 せんだいメディアアテック七階ラウンジ

黒川郡大和町升沢地区を撮影したフィルム写真のデジタル化と目録作成を行うプロジェクト。未公開分を含むフィルムをデジタル化し、各写真に資料情報と手代木氏の「記憶の言葉」を付して資料目録を作成した。二〇一六年よりせんだい

メディアアテークと協力して活動を行う。

今回の展示では、プロジェクトの企画者で升沢の民俗調査に参加していた小田嶋利江氏が、手代木信成氏の撮影した約三千枚のフィルムの中から、村の人々の暮らしや自然の風景の写真約三百点を選び、各写真にまつわる「記録者の言葉」と「土地の人から聞いた言葉」を添えて紹介。

○令和元年度「やまもとフォトコンテスト」

会場 つばめの杜ひだまりホール（山元町）

主催 山元町教育委員会

山元町の魅力を発掘する狙いのコンテスト。カメラ部門特選には、被災した農地に植えられた霧の中のひまわりを幻想的に撮影した石田直哉さん（秋田県美郷町）の「始動」が選ばれた。

○第三十五回「河北写真展」

会期 十一月二十六日～十二月一日

会場 東北電力グリーンプラザ（仙台市青葉区）

主催 河北新報社

千三百八十七点の応募から、「東北の風景」「東北の暮らし」「東北のスポーツ」「震災からの復興」の四部門に入選した九十六点を展示した。

○写真展「彩りの南極」

会期 十一月十八日～十二月十三日

会場 北四カフェ・ギャラリー グラニーズ

元南極観測隊の石井洋子さん（南三陸町）が撮影した朝焼けやペンギンなど、色彩豊かで生き生きとした写真を展示した。

◎「ふたりの写真家／佐々木徳朗×佐々木隆二」展

会期 十二月三日～八日

会場 SARP 仙台アーティストランプレイス（仙台市青葉区）

主催 せんだいメディアアテーク

「写真と記憶」をテーマに兄弟それぞれの活動に迫る写真展。故郷、宮城県気仙沼市水梨区を撮影した計七十枚を展示。佐々木徳朗氏は、昭和の時代に記録した農作業風景や婚礼行事の写真、佐々木隆二氏は幼少期の記憶を元に太平洋戦争に出征した人を取材して展示。山や田に囲まれた農家育ちの兄弟が写真を撮る思考やアプローチの対照的な展示が魅力的だった。七日には二人のトークイベントも開催され満席となった。

その他

○プロジェクト「仙台コレクション」

変化してゆく仙台の街並みを次世代につなぐために、街のあるがままを、一万枚の写真で記録しようという試み。「見

た人それぞれが自由に感じてもらいたい」というフラットな視点から、地元の写真家らにより撮影された作品の数は七千枚に及んでいる。

○松島モデル大撮影会

主催 朝日新聞社

全日本写真連盟南東北ブロック

六月に約二百名が集まり開かれた撮影会。最優秀賞には寒河江秀典さん（山形市）による「舞台裏の恋」が選ばれた。

○大内四郎氏ご逝去

芸術協会の写真部創設など、名実ともに宮城の写真界を牽引されてきた県芸術協会の名誉会員大内四郎氏が御逝去された。（九十六歳）

おわりに

写真の歴史を紐解けば、「歴史のレンズ」に写し出された光景は、社会に潜む矛盾や問題、危険に満ちた戦争や災害、フロンティア、など幾星霜を経て厘星数々の人類の行いの積み重ねであり「歴史のレンズ」は滔々と自身を映し出してきた。しかし十年、そのデータ量は爆発的な拡大を見せる。

一つは写真と地理が結びついた「グーグル・ストリート・ビュー」などによる位置情報と画像のサービスである。かつ

て人々は見たことも無かった世界の果てを畏れ、冒険し克服してきたが、現在では、もはや地球上のどのようなエリアにもこの網は張り巡らされている。

そしてもう一つは「顔認証」によるサービスである。様々な経済活動や、セキュリティサービスも「肖像写真」の延長上にあるといえるだろう。

様々な「写真画像」は人間の個人情報と結びついて驚くべきスピードで世界を駆け抜ける。現在は人類の活動を「写真画像」が支えている時代なのである。

そして二〇二〇年からは日本でも5G（第五世代移動通信）サービスが、本格的に始まろうとしている。4G（第四世代）までが、携帯電話やスマートフォンなど個人が使うサービス中心だったが、5Gは産業界での用途が大きな比重を持つと想定されている。いわゆるIoT（Internet of Things）はメーターや器具など様々なモノをネットワークとつなげ測定を自動化したり得られたデータを処理して新たなサービスを実現しようとするものだが、5GはこのIoTを拡張してデジタルトランスフォーメーションによる産業革命を支える基盤となる。しかし、防犯カメラやドローンによる「無限のセキュリティ」は社会的なインフラとして大きく役立つ一方で、悪意ある画像操作などによって誤った情報が拡散していけば、メキシコの小さな町で起きたフェイクニュースによるえん罪

リンチ事件の様な現代の魔女狩りが起きる危険性は十分にある。

かつて、ラズロ・モホリィナギは、「これからの時代、文字が書けない人と同様に、カメラの使い方を知らない人のことも文盲と呼ぶようになるだろう。」と言ったが、誤ったカメラの使い方は、社会や文明をも滅ぼしてしまう危険性も同時に持つてしまうことも認識していなければならないだろう。

清

水

有

(せんだいメディアアテーク企画事業係長・写真史)



写真展「SENDAI COLLECTION VOL23」 会場 宮城県美術館 県民ギャラリー2



写真展「懐かしのしおがま」 会場 塩竈市杉村淳美術館



黒川郡大和町升沢のくらし 〈なりわい〉が結ぶ山・村・人 ―移転集落の風景を記憶の窓として―
会場 センダイメディアテーク



「ふたりの写真家／佐々木徳朗 × 佐々木隆二」展
会場 SARP：仙台アーティストランプレイス・スペース B

文芸

概観

東日本大震災からすでに九年の歳月が流れた。かつての面影を失った復興途上の町々は「止まってしまった時間」を内部に抱え、変質してしまった。九年という時間を経て語り始めることができるようになった人や未だ言葉を発し得ない人など、震災の深い傷はいまだ癒されていない。

平成から令和へ元号が変わった。新元号を祝う祭りのような時は瞬く間に過ぎ、現実には容赦ない事実を突きつける。事故後の原発の廃炉にかかる時間が四十年、あるいは五十年という曖昧で気の遠くなる行程表が示され、積み上がった黒いフレコンバッグを見ると、復興などどこにあるのかと疑問になる。オリンピックの建設工事は、東北の復興を後回しにする。福島県を聖火のスタート地点とし、いくつかの競技を東北開催とする。はなやかな話題の後ろに厳しい現実が覆い隠される。

震災に触れた文学について「読み手の側に受け止める態勢ができてきたのかもしれない」「被災地に生きる作家だから震災を書くことが自然」と熊谷達也は言う。書き手も読み手

も時間のなかで変わってきたという。時間は記憶を希釈する。確かに薄皮を剥ぐように、時間の向こうに遠ざかっていくものがあり、その逆で新たな痛みを生じさせる事柄もある。

台風十九号（十月）による丸森や吉田川流域の災害も、東日本大震災同様のトラウマを多くの人々の心に残した。

八月から九月にかけて被災地石巻市、牡鹿半島、松島湾エリアを舞台として開催された「第二回リボン・アート・フェスティバル2019」で、詩人吉増剛造が創作現場を公開する「詩の家」に約二ヶ月滞在した。鯨の解体に触発され動き出した吉増は、震災を悼む詩を滞在したホテルの窓に残した。

十一月十二日、宮城県芸術選奨に文芸部門で、詩集『赤い内壁』の須藤洋平が選ばれた。現代詩の最前線を走る若手で中原中也賞、詩歌文学館賞など、こころに突き刺さる修辞はすでに高い評価を得ている。また、第三十回歷程新鋭賞にこころの暗部をシュールに書いた詩集『嘘の天ぷら』の佐々木貴子を選ばれた。

また、第十九回「俳句四季」全国大会の大賞を「みちのくの涙痕として滝凍る」の大森藍（仙台市）が受賞した。

仙台文学館「ことばの祭典」六月二十二日。短歌の部ことばの祭典賞「二千人の集落あとも荒れ果てて我がものがおに鏡ひかりぬ」金野友治（仙台市）、小池光館長賞「ありがとうと広告裏に記されしリューマチの母の曲がりたる文字」林静江（仙台市）、俳句の部ことばの祭典賞「瓦礫をたどる魂ひとつ箱眼鏡」平山北舟（仙台市）、小池光館長賞「亡父の日記炭ナイミナイ虫干しす」畠山みな子（仙台市）、川柳の部ことばの祭典賞「向かい合い今日の幸せ確かめる」村上誼晃（仙台市）、小池光館長賞「鏡には仏頂面のおじいさん」鈴木武志（仙台市）。

宮城県の高校生が「第三十四回全国高等学校文芸コンクール」で入賞を果たした。詩 優良賞・小説 優秀賞 星奈菜子（仙台三桜）、詩 優良賞 堀主樹（名取）、詩 優良賞 鈴木琴巳（名取）、小説 優良賞 金川恵都（宮城二）、俳句 優良賞 菊地洸美（仙台百合学園）、俳句 優良賞 高山芽吹（仙台百合学園）。

宮城県芸術祭参加文芸祭公募（十月二十八日、東京エレクトロンホール宮城六〇二会議室）の主な入賞者は以下の通り。

一般部門

最優秀賞 詩 西城健一（気仙沼市）、短歌 山内東一（大和町）、俳句 田村恵子（仙台市）、川柳 尾方久子（仙台市）、エッセー 高橋千賀子（栗原市）、詩 優秀賞・宮城県詩

人会会長賞 木村麻衣（仙台市）、短歌 優秀賞・宮城県歌人協会賞 志賀努（仙台市）、俳句 優秀賞・宮城県俳句協会賞 斎藤洋子（気仙沼市）、川柳 優秀賞・宮城県川柳連盟賞 田村富夫（仙台市）。

ジュニア部門

詩 優秀賞・宮城県詩人会会長賞 中村天結（長町中）、短歌 最優秀賞 若生夕楓（長町中）、優秀賞・宮城県歌人協会賞 丹野蒼士（岩沼西中）、俳句 最優秀賞 近藤快成（長町中）、優秀賞・宮城県俳句協会賞 茂木麻緒（長町中）、川柳 最優秀賞 杉野紗南（角田小）、優秀賞・宮城県川柳連盟賞 仁多見煌人（北仙台小）。

宮城県芸術祭授賞式は十一月二十八日、ホテルメトロポリタン仙台で行われた。宮城県芸術協会会員の文芸賞受賞者は以下の通り。宮城県芸術祭賞 短歌 佐藤成晃（仙台市）、宮城県知事賞 詩 渡部俊慧（仙台市）、短歌 佐野督郎（仙台市）、俳句 平山北舟（仙台市）、川柳 西恵美子（白石市）、河北新報社賞 俳句 石母田星人（仙台市）、公益財団法人宮城県文化振興財団賞 俳句 高橋彩子（涌谷町）、宮城県芸術祭奨励賞 川柳 島文庫（仙台市）。

宮城県芸術協会主催の文学散歩は十月二日・三日、芸術祭参加行事として実施された。一般参加者を含む四十一名の参加で秋田県の文学者ゆかりの地を歩いた。美郷町の六郷湧水

群をスタートに、秋田文学資料館、菅江真澄資料センター、旧奈良家住宅、秋田県立美術館、横手市の増田まんが美術館、羽後町の西馬音内盆踊り会館など一泊二日の充実した旅だった。

新聞関係の選者は、河北新報歌壇は佐藤通雅、花山多佳子、同俳壇は高野ムツオ、西山睦、同柳壇は雫石隆子、朝日新聞宮城版みちのく歌壇は梶原さい子、同俳壇は渡辺誠一郎、同柳壇は木田比呂朗、読売新聞宮城版よみうり文芸歌壇は秋山佐和子、同俳壇は能村研三、同柳壇は千葉朱浪、毎日新聞宮城版文園歌壇は金沢孝一、同俳壇は鈴木八洲彦、同柳壇は新藤孝廣がそれぞれ担当した。

各部門

詩

第二十回白鳥省吾賞（栗原市主催）表彰式が二月二十四日に行われた。一般の部最優秀賞はみうらひろこ（福島県相馬市）、小中学校の部最優秀賞は菅原琉太（栗原市立金成小）。十月二十日、第六十回晩翠わかば賞に登米市立横山小・奥田梨智の「あいたいよ パパ」、晩翠あおば賞に仙台市立上杉山中・大久保観の「時速一〇〇km」が選ばれた。

宮城県詩人会詩祭2019「災後―ことばの現在」が、十一月二十四日、仙台文学館で開かれた。詩人の藤井貞和と

倉橋健一が対話を重ね、阪神淡路大震災と東日本大震災、この二つの災後の詩の発信力の違いは、ツイッターに象徴される「いま起きていることをその場からリアルタイムのあることば」として発信し続けるメディアの革新によるところに生まれた。現在の現代詩は内向化し現実をどう表現するかに欠けている。と同時に、現代詩の本気の読者がいないことも大きな問題であると指摘するなど、意義のある論議が展開された。

詩集 汐海治美『犬について 私語れるところ 十の断片』『詩集 ビートルズの向こうに』、石川かおり詩画集『物語と詩のかげら』、佐藤達男『旅人』、千田基嗣『迷宮 寓話集Ⅱ』『迷宮 寓話集Ⅲ』、佐藤円『さとうのつめあわせ』、清岳こう『眠る男』、前原正治『緑の歌』、やまうちあつし『思い出す』、前沢ひとみ『約束』、『宮城の現代詩2019』詩誌「月下」「回生」「霧笛」「ひびき」「風花」「仙台演劇研究会通信ACT」「a's」「とんてんかん」「ココア共和国」「白鳥省吾研究会会報」「よそ見通勤」「想音窟だより」「ササヤンカの村」「風の靴を穿いて」「小さな家の設計図」「THROUGH THE WIND」

小説・散文

第二回「仙台短編文学賞」が決定、三月十三日に仙台文学

館で授賞式が行われた。選考委員は熊谷達也。大賞には綾部卓悦（東京都）の「ビショップの射線」が選ばれた。選考委員は、「被災地とされる土地での、異邦人的および境界人的な存在であることの居心地の悪さをテーマに選んだところが新しい」と評した。

河北新報社賞「梅と糸瓜と、福寿草」斎藤隆（山形市）、仙台市長賞「西日の里」高橋叶（仙台市）、プレスアート賞「風音（kazaoto）ーピアノ五重奏曲第二番 イ長調ー」やまやしげる（大阪府）、東北学院大学賞「長次郎の夢」田中エリザバス（仙台市）、同奨励賞「落日と鬼灯」水無月恒（登米市）。

第十回「子どもノンフィクション文学賞」（北九州市主催）で選考委員特別賞（那須正幹賞）に仙台二華中の中三、井崎英里「晴れ時々 かえる くえりとぴょんきちの物語」。

小説・エッセイ 牛島富美二「続・文豪の謎を歩くー詩、短歌、俳句に即して」、伊坂幸太郎「シーソーモンスター」「クジラアタマの王様」、佐伯一麦「山海記」、熊谷達也「エスケープ・トレイン」「我は景祐」、瀬名秀明「魔法を召し上かれ」「小説ブラック・ジャック」、伊集院静「女と男の絶妙な話」「一度きりの人生だから大人の男の遊び方2」」「一人で生きる大人の流儀9」「大人のカタチを語ろう」「一生に一度旅

してみたいゴルフコース 世界の名門22コース」、郷内心瞳「拝み屋異聞 田舎怪異百物語」「拝み屋怪談 壊れた母様の家」「拝み屋備忘録 怪談首なし御殿」、「五日市憲法」の起草者で栗原市生まれの千葉卓三郎の青春を追った労作、大谷正紀「胡桃の木の下で 小説千葉卓三郎青春譜」、辺見庸「純粹な幸福」、恩田陸「歩道橋シネマ」「祝祭と予感」、佐藤三昭童話集「かざぶね」

文芸誌「仙台文学」「波動」「新生」（東北新生園） 随筆中心の「みちのくふだん記」詩と随想の「みちのく春秋」

短歌

第六十七回「宮城県短歌大会」（宮城県歌人協会・河北新報社主催）が六月七日仙台文学館で開催され、河北新報社賞に「故里に置き去りにせし恋ひとつ訃報を知りてひと日くれゆく」の小柴知子（仙台市）、宮城県歌人協会賞は「春風にこころの軽くなりたるや忘れ物コーナーに横たはる杖」の秋葉祐美子（仙台市）。六月十五日、第二十回「原阿佐緒賞」に「青びかる寒風浴びし干しサンマ荷ほどきすれば汐の匂ひす」富澤秀子（仙台市）。

第三十三回「落合直文全国短歌大会」（落合直文顕彰会主催）が九月二十九日、サンマリン気仙沼ホテル観洋で開かれ、「流されし服に似た柄また選ぶあれから八年ひまわりの咲く」を

詠んだ鈴木啓子（気仙沼市）が最優秀賞。

第四十七回「東北短歌大会」（河北新報社、日本歌人クラブ、宮城県歌人協会主催）が十月五日、秋田拠点センターアルヴェで開かれた。日本歌人クラブ賞に「若者を吸いとるごとくに」「こまち」発つなごり雪降る秋田の駅に」の沼澤修（仙台市）。中川佐和子賞特選三位、田口啓子（仙台市）、現代短歌社賞特選一位、沼澤修（仙台市）。

十月二十日、第八回「河野裕子短歌賞」が発表され、「青春の歌」の部で京都女子学園長賞に仙台二華中の千葉日菜乃が選ばれた。

第三十回「宮城県短歌賞」（宮城県歌人協会主催）が、十一月二十四日、東京エレクトロンホール宮城六〇二会議室で開かれ、宮城県短歌賞は白石則子（石巻市）。

原阿佐緒記念館に阿佐緒と親交の深かった歌人扇畑利枝さんの歌碑が、七月二十五日東北アララギ会によって建立された。

椽の木短歌会主催で茂庭台学区小中学生短歌コンクールが開催されたことを新しい活



扇畑さんの作品が刻まれた歌碑
（河北新報社提供）

動として記録しておきたい。

歌集 佐藤紘子『凜と立ちたる』、山茶花短歌会合同歌集『山茶花』第七集、大友圓吉『冬天』、桜井千恵子『風の鶴』、原田夏子『残灯』、中川嘉一『野の歩み』、名取あい子『記憶の空』歌誌「群山」「收穫」「登米短歌」「波濤みやぎ」「麻刈」「北杜歌人」「杜の都短歌」

俳句

一月七日、第四十三回「宮城県俳句賞」決定。準賞に二作。「底」宮崎哲（仙台市）、「麦稈帽」堀之内久子（利府町）。

四月二十九日、東京エレクトロンホール宮城で第四十九回「宮城県俳句大会」（宮城県俳句協会・河北新報社主催）が開催され、河北新報社賞に「河口より潮の差し来る春シヨール」の中村春（仙台市）。六月二十四日、登米市登米公民館で第六十八回「登米芭蕉祭俳句大会」が開かれ、席題の部宮城県俳句協会賞に「青風風のせり出す能舞台」の砂金元子（大崎市）。六月二十九日、第三十一回多賀城跡あやめまつりの「あやめ俳句大会」の表彰式が多賀城文化センターであり、特選第一席に「花菖蒲風を捉えて解れけり」の阿部五一（多賀城市）。

十月六日、第十四回「大崎市俳句大会」が大崎市沼部公民

館で開催された。宮城県知事賞に「まだ少し濡れている空曼珠沙華」土屋遊螢（石巻市）。十月十三日、第二十六回「壺の碑全国俳句大会」が多賀城市文化センターで開かれ、兼題の部多賀城市観光協会長賞に「銀河濃しシールカンスの動かぬ目」川原友記子（仙台市）。席代の部は台風十九号接近のため大会が中止となったため該当者なし。十一月十日、第六十五回「松島芭蕉祭並びに全国俳句大会」が、松島町文化観光交流館で開催された。招聘選者は岩淵喜代子（「にんに」代表）、横澤放川（「森の座」代表）。嘱目の部特選第一席松島町長賞に「翁忌の島に日の斑の遊びをり」鈴木三山（角田市）、「芭蕉忌へ参ず魚臭の帽子脱ぎ」土屋遊螢（石巻市）。

仙台文学館で俳句と写真のコラボ、高野ムツオ×佐々木隆二「語り継ぐいのちの俳句」展が三月一日から三月二十七日まで開かれた。同展はほぼ同時期に、北上市の日本現代詩歌文学館、東京都荒川区のゆいの森あらかわ、福島市のコラッセふくしまで開催された。

句集 嶺岸さとし『天地』、相内をさむ『黒潮の沖』、蓬田紀枝子『黒き蝶』、大竹寛子『蠟梅』、永野シン『桜蕊』、合同句集『漚』泉流抄第三十集、『きたごち合同句集第三輯』、『波宮城支部二十七周年記念誌』、『俳句饗宴七七〇号記念アンソロジー』

俳誌「きたごち」「滝」「小熊座」「漚」（終刊）「俳句饗宴」（終刊）「む」「宮城野」「飛行船」「ほそ道」「花野」「柳絮」「荒星」「むじな」

川柳

第八回東北川柳大賞に仁多見千絵（仙台市）が選ばれた。

第四十六回「宮城県川柳大会」と併催で、第三十七回「東北川柳連盟仙台大会」が七月十四日エル・パーク仙台で開かれた。宮城県川柳連盟賞に「聴こえます風の言葉も水の言葉も」を詠んだ西恵美子（白石市）、東北川柳連盟大賞に「花びらのいちまいずつにある笑くぼ」を詠んだ高瀬霜石（弘前市）が選ばれた。

第五十回「仙台市民川柳大会」（仙台市民川柳会主催）が八月六日、青葉区のエル・パーク仙台で開かれた。仙台市民川柳会賞は「夕市で明日の鱗ひとつ買う」を詠んだ鎌田京子（仙台市）、全日本川柳協会賞は西恵美子（白石市）、県芸術協会賞は織田順子（南相馬市）が選ばれた。特別課題では、「青い海泥の付箋がついてます」の飯田ふく江（岩沼市）が仙台市長賞に選ばれた。

第六十八回「東北川柳大会」が九月十五日東京エレクトロンホール宮城で開かれ、河北新報社賞に「ジャズメンも詩人も樹下を行く秋だ」を詠んだ大石一粋（秋田・五城目町）、

川柳宮城野社賞は、渡辺松風（秋田・五城目町）が選ばれた。
第四十六回「河北川柳投句者大会」が、十一月十日河北新報
社で開かれ、「新スーツ纏って春へ第一歩」を詠んだ太田良
喜（大河原町）が河北新報社賞に選ばれた。

句集 山田純一川柳句集『わくら葉の賦』、仁多見千絵『音
のない時間』、『汐（第Ⅱ集）汐の会合同句集』
柳誌「川柳宮城野」「川柳杜人」

玉^{たま} 田^だ 尊^{たか} 英^{ひで}
（宮城県芸術協会文芸部部長）

洋楽

A 洋楽部門の動向

●仙台市は二千席規模の音楽ホールを建設する計画を進め、一月に建設候補地九箇所のうち、民有地をのぞく七箇所を公表した。内訳は西公園（市民プール跡、市民図書館跡、お花見広場）、錦町公園、青葉山公園、せんだい青葉山交流広場、勾当台公園。どれも市中心部の公園や広場である。ただ、この案に対して仙台市の「杜の都の環境を作る審議会」は「公園は空き地ではない」との異論を述べており、候補地選びは難航しそうだ。

一方、宮城県もまた、新しい県民会館の建設計画を進め、九月には宮城野区の仙台医療センター跡地が建設予定地となることが発表された。大ホールは二千～二千三百席規模のことなので、市と県の計画がそれぞれ進めば、二千席規模の新しい音楽ホールが仙台に二つ誕生することとなる。

仙台に二つの音楽ホールを建設して、そもそも採算がとれるのかどうかは微妙な問題であり、二重行政の弊害を指摘する意見もある。

しかし二〇一九年に入り、県と市の方角性の違いは明確に

なりつつある。仙台市が「クラシックを中心とする本格派の音楽ホール」、「生音源に対する音響を重視した高機能、多機能ホール」を指すのに対し、宮城県はポピュラー音楽のコンサートや演劇の上演にも対応できる劇場型の施設、「全国から人を呼べる総合エンターテインメント拠点」を指すとのことなので、少なくともジャンル上・用途上の棲み分けはできそうな形勢だ。

B 行事の開催状況

●第七回の仙台国際音楽コンクール（仙台市など主催）が日立システムズホール仙台を会場にして開催された（ピアノ部門五月二十五日～六月九日、ヴァイオリン部門六月十五日～六月三十日）。部門は従来通り、ピアノ部門・ヴァイオリン部門の二つ。三十九の国・地域より両部門をあわせて四百六十七名（ピアノ部門三百三十一名、ヴァイオリン部門百三十六名）の応募があった。過去最多の応募者数であり、このコンクールが若手の登竜門として国際的にも十分に認知されつつあるのがわかる。ピアノ部門の予選には予備審査を

通った三十七名が出場(辞退者六名をのぞく)。予選、セミファイナルを経てファイナルは六月六・七・八日に行われた。審査の結果、一位はチェ・ホンロク(韓国)、二位はバロン・フェンウィク(米国)、三位はダリア・パルホームenco(ロシア)、四位は佐藤元洋(日本)、五位は平間今日志郎(日本)、六位はキム・ジュンヒョン(韓国)となった。

ヴァイオリン部門の予選には予備審査を通った三十六名が出場(辞退者五名をのぞく)。セミファイナルでは協奏曲のほかに、コンサートマスターとしてオーケストラの中でソロを担当する課題が加わったが、これは合奏の能力を重視するこのコンクールならではの新機軸と言える。ファイナルは六月二十七・二十八・二十九日に行われ、審査の結果、一位は該当者なし、最高位である二位がシャノン・リー(米国、カナダ)、三位が友滝真由(日本)、四位が北田千尋(日本)、五位がイリアス・ダビッド・モンカド(ドイツ)、六位が荒井里桜(日本)、コー・ドンフィ(韓国)の二人となった。一位なしは今回が初めてだった。

●第十四回となる仙台北クラシック音楽フェスティバル(仙台市、公益財団法人仙台市市民文化事業団、公益財団法人仙台北フィルハーモニー管弦楽団、株式会社仙台北新報社、株式会社宮城テレビ放送、仙台市交通局)が十月二日から四日まで、仙台市内の四会場(日立システムズホール仙台、仙台銀行ホー

ル イズミティ21、エル・パーク仙台、太白区文化センター)で開催された。八十九のホール公演に先立ち、関連企画として八月から十月にかけて「街なかコンサート」(宮城野区文化センター パトナホール、戦災復興記念館)と「地下鉄駅コンサート」(仙台駅、旭ヶ丘駅)が行われ、秋のクラシック音楽の一大イベントを盛り上げた。

また、七月二十八日から二十九日にかけては小山実稚恵が企画・出演する体験型イベント「第五回こどもの夢ひろば」ボレロ(実行委員会、仙台市、公益財団法人仙台市市民文化事業団、仙台北新報社など)が行われた。コンサートを中心にまとめられた十八のコンテンツが親子連れによるこぼれ、これも盛況だった。

●二〇一九年の仙台北フィルハーモニー管弦楽団の活動は実りの多いものだった。九回にわたる定期演奏会では、ハイドンからコルンゴルト、細川俊夫まで、さまざまなレパートリーが取り上げられ、客演の指揮者・ソリストの顔ぶれは多彩だった。このまま県内においてクラシック音楽のファン層が順調に広がっていくことを期待したい。

●今年も仙台オペラ協会の公演が九月に行われた。演目は『メリー・ウィドウ』。オペレッタの名作を日本語で上演し、好評を博した。

●このほかに、二〇一九年には数多くの演奏会が行われた。

六年目を迎えた「ミュージック フロム パトナ」(仙台ひとまち交流財団)は四回の演奏会(四・七・十一・翌二〇年二月)のうち三回を年内に実施。関連講座としてオープンゼミナールを行うなど、今年度もクラシック音楽ファンの裾野拡大に向けた試みを積極的に展開した。

三月には小山実稚恵(ピアノ)が復興支援コンサート(NHK仙台放送局一階特設ステージ、NHK仙台放送局主催)を開催。キャサリン・ジェンキンス(メゾ・ソプラノ)による復興祈念チャリティコンサート(日立システムズホール仙台、日立システムズ(東京)など主催)には、宮城第一高等学校、仙台二華中学校・高等学校の生徒らが参加して盛り上げた。

そのほかにも三月には仙台フィルハーモニー管弦楽団と山形交響楽団の若手メンバー「コンサートA」による演奏会(イズミティ21小ホール、実行委員会主催)、十月には外山啓介のピアノ・リサイタル(日立システムズホール仙台、東北放送主催)。十一月には仙台日伊協会創立四十周年創作オペラ「UNOウーノ」(仙台市戦災復興記念館、仙台日伊協会主催)、砂川涼子(ソプラノ)と水戸博之指揮仙台フィルハーモニー管弦楽団によるジルベスター・ガラ・コンサート(東北大学川内萩ホール、東北大学・東北放送・河北新報社主催)が行われ、好評を博した。

仙台以外では、バルセロナ在住の鈴木羊子がゆかりのある大崎市で開いたピアノ・リサイタル(陸前古川教会、実行委員会主催)が話題を呼んだ。

●二〇一九年の杜の都信用金庫「県民ロビーコンサート」(宮城県庁一階県民ロビー、宮城県環境生活部消費生活・文化課主催)にはマリンバ奏者三人組「スリー・マレッツ」(一月)、宮城教育大学の学生によるピアノ連弾(二月)、仙台フィルハーモニー管弦楽団(四月)、仙台二華中学校・高等学校女性合唱団(五月)、名取市在住のピアニスト・倉島研(六月)、仙台市の金管アンサンブル団体「金管n重奏」(七月)、仙台オペラ協会(八月)、ビッグバンド「Hello!Orchestra」(九月)、女声合唱団「I(アイ)」(十月)、名取交響吹奏楽団(十一月)、「ハーモニカWind四季」(十一月)、大正琴演奏団体「白鳥の里アンサンブル」(十二月)が出演。いずれも盛況だった。県議会ラウンジコンサート(宮城県議会庁舎一階ラウンジ、宮城県議会事務局総務課主催)には旧古川女子高校(現古川黎明高等学校)の卒業生による女性二重唱とピアノのグループ「ル・レーヴ」(二月)、オカリナ奏者水戸ふぢ(六月)、オカリナとギター演奏「うりふたつ」(九月)、声楽とピアノ演奏「Loose Music」(十一月)が出演し、好評を博した。

●第六十二回全日本吹奏楽コンクール東北大会では、今年も宮城県勢が健闘した。小学校の部では仙台市立榴岡小学校

が金賞を獲得。中学Aの部では仙台市立向陽台中学校、中学小編成の部では仙台市立上杉山中学校がともに金賞となり、全国大会への切符を手にした。高校Aの部では聖ウルスラ学院英智高等学校が金賞を受賞し、東北代表となったほか、多賀城高等学校と泉館山高等学校が金賞を得た。高校小編成の部では、仙台城南高等学校が金賞となり、全国大会への出場権を獲得した。大学の部では東北福祉大学、一般・職場の部では泉シンフォニックウインドオーケストラと名取交響吹奏楽団が金賞を受賞。名取交響吹奏楽団が全国大会への進出を決めた。

さらに全国大会である第六十七回全日本吹奏楽コンクール（全日本吹奏楽連盟、朝日新聞社主催）では仙台市立向陽台中学校が金賞、高校の部では聖ウルスラ学院英智高等学校が銀賞を受けた。職場・一般の部では名取交響吹奏楽団が後半の部の金賞に輝いた。

第七十二回全日本合唱コンクール東北大会では、むしろ大学以上のカテゴリーにおいて、宮城県勢の活躍が目立った。東北福祉大学混声合唱団が大学（混声）の部で金賞を得たほか、職場・一般（同声）の部で合唱団 Palinka が金賞、職場・一般（混声）の部でグリーンウッド・ハーモニーが金賞を受賞。このうちグリーンウッド・ハーモニーは、東北代表として第七十二回全日本合唱コンクール全国大会にも出場し、銀

賞を受けた。

C 各種受賞など

三月に仙台フィルハーモニー管弦楽団レジデント・コンダクターの高関健がサントリー音楽賞、十二月には宮城県多賀城市出身のヴァイオリニスト郷戸廉が文化庁芸術祭大賞を受賞したほか、県芸術選奨では仙台フィルハーモニー管弦楽団コンサートマスターの西本幸弘（ヴァイオリン）が新人賞を受賞した。

太^{おお}田^た峰^{みね}夫^お
（宮城学院女子大学音楽学科准教授）

邦楽・芸能

古典芸能

平成三十一・令和元年の古典芸能の公演について、「雅楽」
「能楽（能・狂言）」「歌舞伎」「文楽」の順に振り返る。

雅楽

四月十九日と二十日の両日、塩竈市の志波彦神社・鹽竈神社境内で「しおがまさま神々の花灯り」が開催された。神社の職員により、神楽「一森の舞」と「悠久の舞」、舞楽「抜頭（右方）」が演奏された。同神社では十月十二日と十三日に「しおがまさま神々の月灯り」を開催予定であったが、台風のため十月二十六日に延期となった。演奏曲は舞楽「抜頭」と神楽「悠久の舞」。

八月十二日の夜に大崎八幡宮の境内で恒例の「御鎮座記念祭」が開催された。大崎八幡宮職員と伶楽舎により、今様「白薄様」、神楽舞「青葉の舞」、管絃「皇聲急」、「老君子」、御神楽「其駒―人長舞」などが奉奏された。翌十三日には第九回東日本大震災復興祈念「雅楽の夕に」、が開催され、「拾翠

楽」、「越天楽」、「早鬢多々良」、「青葉の舞」、「合歓塩」、「抜頭」他の曲が演奏された。恒例となった「越天楽」の唱歌と「入りそめて」の歌のワークショップも行われた。

能楽

能楽は今年も活発に活動が行われた。

一月十三日に仙台市能楽振興協会主催による「第十五回謡曲大会」が福祉プラザふれあいホールで開催された。

二月十日に白石市の碧水園で、「碧水園能 喜多流公演」が行われ、友枝真也による仕舞「忠度」、破石晋照らによる和泉流狂言「因幡堂」、佐々木多門のシテによる能「東岸居士」が上演された。

三月二日に東京エレクトロンホール宮城で「笑いの芸術 野村万作・萬斎狂言公演」が行われた。石田幸雄の解説で狂言「鈍太郎」と「武悪」が上演された。また公演に先立ち、二月十八日には、石田幸雄を講師としてプレセミナーが東京エレクトロンホール宮城の会議室で開催された。

五月十八日に「第二十二回青葉能」が電力ホールで開催さ

れ、人間国宝の友枝昭世のシテによる喜多流能「三輪（神遊）」、人間国宝の野村万作のシテによる和泉流狂言「末広かり」、佐々木多門のシテによる「嵐山」が上演された。

六月八日に白石市の碧水園能楽堂で「能・狂言鑑賞会」が開催され、小島英明の解説の後、仕舞「杜若」、野村萬斎らによる狂言「舟渡賀」、小島英明のシテによる「隅田川」が上演された。

九月十四日に登米薪能が登米市登米町の伝統芸能伝承館「森舞台」で行われた。登米謡曲会の会員により、仕舞と狂言「柿山伏」、能「羽衣」が上演された。

十月六日に「第十一回瑞鳳殿秋の能楽」が感仙殿前の広場の特設舞台で行われ、喜多流・宝生流・金春流の仕舞、幸流の独鼓、観世流の舞囃子など全部で十三番が上演された。

十一月十日に仙台市能楽振興協会の主宰による「令和元年囃子と仕舞の会」が能—BOXで開催され、仕舞、小鼓の独調、居囃子、舞囃子など計十八番が上演された。

十一月十二日に仙台市民会館小ホールで「第十回能への誘い 喜多流」が開催され、佐藤章雄と佐藤寛泰により、昼の部（一部）では能「敦盛」が、夜の部（二部）では能「巴」が半能形式で上演された。

第三十八回仙台市民能楽講座は、十二月一日に日立システムズホール仙台のシアターホールで行われ、武田孝史のシテ

による宝生流能「通小町」と和泉流狂言「舟渡賀」などが上演された。

東京在住の観世流能楽師八田達弥と森田流笛方寺井宏明による「能楽の心と癒やしプロジェクト」は三月十日に名取市関上の湊神社で舞囃子「高砂」を奉納、同日午後には関上中央集会所で能「羽衣」の上演と能楽ワークショップを行った。また翌十一日には石巻市の日和山に鎮座する鹿島御児神社の境内で、太鼓の大川典良も加わり、能「羽衣」を奉納上演した。

大藏彌太郎による「古川なごみ狂言」は十一月十六日に大崎市古川駅前前の「クラフト木村」にて開催された。平成二十四年に始まり、八年度で第四十回を数えることとなった。

仙台市卸町にある能—BOXで開催されている「能のおけいこ体験講座」では、観世流（四月～六月）が「橋弁慶」と「竹生島」の謡、喜多流（四月～六月）が「高砂」の謡と仕舞、宝生流（四月～六月）が「羽衣」の謡と仕舞、



外国人のための能楽講座「Enjoying the Noh!」
（於：せんだい演劇工房 能—BOX）

金春流(四く七月)が「櫻川綱ノ段」(和吟)「生田キリ」(強吟)の仕舞と謡、金剛流(四く七月)が「加茂」の謡と仕舞で講座を行った。また、六月九日と七月七日には、「Enjoying the Noh! A Workshop for Beginners」と題した外国人のための能楽講座が開催された。

夏休みの定番となった山中辻晶による「こどものための能講座」は七月二十三日から八月十一日まで能—BOXで開催され、一回一時間の稽古を六回受けた後に、発表会で、稽古で覚えた謡と仕舞を舞台で披露した。小さい頃から身近に古典芸能に親しむ機会として今後も活発な活動を期待したい。

白石市の碧水園能楽堂では、三月十七日に、講座生発表会が開催され、子ども能楽教室の講座生が、仕舞「老松」「玄象」「鶴亀」「竹生島」「鞍馬天狗」「嵐山」を披露した。他にも、子ども日本舞踊教室、高砂を謡う会、三味線講座、尺八講座、琴講座の受講生が一年の練習成果を披露した。また五



「こどものための能講座」
(於：せんだい演劇工房 能—BOX)

月十九日からは新年度の「子ども能楽教室」が開講され、観世流シテ方能楽師の小島英明を講師に二歳から小学校六年生までの十五人が参加している。七月二十一日には「第二十七回白石市伝統芸能フェスティバル」が開催され、碧水園能楽堂の舞台で、謡や仕舞の発表に加えて、日本舞踊・琴・長唄・詩吟などが披露された。

歌舞伎

三月三日に電力ホールで「中村七之助特別舞踊公演 二〇一九」が二回公演の形で開催された。中村七之助と中村鶴松の芸談が始まり、鶴松による「汐汲」と七之助の四役早替りによる「於染久松色読販より 隅田川千種濡事」が上演された。

四月二十三日に東京エレクトロンホール宮城において「市川海老蔵 古典への誘い」が昼夜二公演の形で開催され、能楽一調「笠之段」、歌舞伎十八番の内「矢の根」、お目見得「口上」、歌舞伎十八番の内「嫩(うわなり)」が上演された。「嫩」は、平成二十五年に海老蔵がシンガポール公演を行った時に舞踊劇として復活させたものである。

七月十一日に宮城県文化振興財団主催による松竹大歌舞伎公演が東京エレクトロンホール宮城で行われた。二代目松本白鸚と十代目松本幸四郎の襲名口上に始まり、「双蝶々曲輪

日記「引窓」と「色彩間苺豆 かさね」が上演された。昼の部と夜の部の二公演。一昨年まで千円だったC席が昨年千五百円となり、今年は二千円となった。様々な事情による値上げであろうとは思いますが、公益財団の事業として、歌舞伎を見たことのない人が気軽に見に行ける価格設定がなくなってしまうことは大変に残念である。

文楽

毎年秋に行われる「人形浄瑠璃 文楽」の公演は、十月十七日に電力ホールで開催された。昼の部は『生写朝顔話』より「明石船別れの段」「笑い楽の段」「宿屋の段」「大井川の段」が、夜の部は「ひらかな盛衰記」より「松右衛門内の段」と「逆櫓の段」、「日高川入相花王」より「渡し場の段」が上演された。昼夜で演目が異なり、毎年、仙台上に居ながらに文楽の名作が間近で楽しめる貴重な公演で、文楽の魅力を十分に味わうことができる名作揃いの公演であった。

その他

平成三十一年度の文化庁「文化芸術による子供の育成事業（巡回公演事業）」として、一般社団法人義太夫協会による公演「義太夫節を聴いてみよう！」が十月二十五日に栗原市立栗駒中学校で開催され、『増補大江山』より「戻り橋の段」

他が上演された。十一月二十八日と二十九日には、気仙沼市立九条小学校と仙台市立幸町小学校で日本講談協会による公演が行われ、「しばらく地蔵」他が上演された。また太鼓芸能集団鼓童による太鼓公演が、十二月三日から六日までの四日間、塩竈市立月見ヶ丘小学校、東松島立鳴瀬桜華小学校、石巻市立大原小学校、仙台市立将監中央小学校で実施された。



「義太夫節を聴いてみよう！」
(於：栗原市立栗駒中学校)

小

塩

(宮城教育大学 教授)

さとみ

民俗芸能

民俗芸能は年中行事で演じられるだけでなく、舞台公演や地域おこしのイベントなどでも演じられる。本稿では平成三十一・令和元年の民俗芸能公演や大会などについて概観し、紙面の許す範囲でそれ以外の活動を報告する。

二月三日に栗原市栗駒さんさんドリームで「第三十九回尾松地区神楽鑑賞会」が開催され、栗原神楽、桜田神楽、清水田神楽、東北まぐら神楽、宝領神楽が出演、また招待神楽として中野神楽と駒堂神楽が、友情出演として雄鋭神社獅子舞が参加した。

二月九日に仙台市教育委員会主催「第三十二回民俗芸能のつどい」が日立システムズホール仙台（仙台市青年文化センター）シアターホールで開催された。「未来に伝え



「第32回民俗芸能のつどい」上谷刈の鹿踊・剣舞
(於：日立システムズホール仙台、写真提供：仙台市教育委員会)

る技とこころ」と題して、秋保神社神楽保存会、上谷刈の鹿踊・剣舞保存会、長袋の田植踊保存会、ゲストとして山屋田植踊保存会が出演した。

二月二十四日に栗原市志波姫公民館において「第四十回志波姫神楽鑑賞会」が開催され、登米市の嵯峨立神楽と赤谷神楽、栗原市の城生野神楽、鶯沢神楽、館下神楽、そして志波姫地区の三団体が出演した。

四月二十九日に一関市立厳美中学校体育館で「第四十九回岩手県南宮城県北神楽大会」が開催され、岩手県南と宮城県北の十団体が出演し、栗原市の鶯沢神楽が優勝、登米市の赤谷神楽が第三位、登米市の岡谷地神楽が奨励賞を獲得した。

同じく四月二十九日に平泉毛越寺において開催された源義経公没後八百三十年特別企画「義経は永久に…」で栗原市の栗原神楽が新たに台本を作成した「衣川の戦い 義経主従の最期」を奉納した。

六月九日に登米市石越体育センターで「第十五回神楽共演石越大会」が開催され、登米市の長下田神楽による「豊里舞（翁舞）」、栗原市の館下神楽「法童丸亡き父との対面の場」、など十一団体が神楽を披露した。

六月十六日に栗原市一迫の山王史跡公園あやめ園で「第三十四回みちのく鹿踊大会」が開催され、栗原市の早川流真坂鹿踊保存会、登米市の行山流佐沼鹿踊伝承会、仙台市川前

の鹿踊・剣舞保存会など、宮城・岩手・山形の六団体の鹿踊が披露された。

六月三十日に栗原市一迫の山王史跡公園あやめ園で「第三十二回あやめ祭り神楽大会」が開催され、栗原市の東北まぐら神楽「石堂丸 父を尋ねて高野山」、栗原神楽「法然・蓮生坊 童子拾い上げの場」、登米市の赤谷神楽保存会「牛若・金売りの吉次兄弟 鏡ヶ宿の場」など、宮城県北・岩手県南の十団体が神楽を披露した。

七月八日に「第十五回登米市民俗芸能大会」が登米市錦織公民館（東和勤労青少年ホーム）で開催された。迫町の山ノ神神楽「八幡舞」、中田町の巻おいとこ踊、東和町の飯土井神楽「くずし舞」、豊里町の上町法印神楽「日本尊武」など登米市内の十八の民俗芸能伝承団体が出演、また岩手県立北上翔南高等学校の鬼剣舞部も特別出演した。

七月二十日に石巻市河北総合センターで「第四十二回石巻地方神楽大会」が開催され、和渕法印神楽「日本武尊」、飯野川法印神楽「所望分」、大室南部神楽「田村三代」など八団体が参加した。

七月二十一日に「第四十二回みちのく神楽大会」が栗原市築館体育センター（築館中学校南側）で開かれた。栗原市一迫の川北神楽保存会「安倍保名、石川悪エ門二度合戦の場」、栗原市築館の城生野神楽「素盞鳴命 乱行の巻」、栗原市栗

駒の栗原神楽「八島合戦」など宮城県北と岩手県南の十一団体が参加した。

七月二十八日に女川駅前広場で七回目となる「復活！獅子振り披露会」が開催された。主催は女川町獅子振り復興協議会。熊野神社氏子総代会、寺間伝承行事保存会など町内の九団体に加え、東日本大震災以降復興支援として石巻地方で獅子舞を披露してきた酒田市の亀ヶ崎八幡神社獅子舞保存会が特別出演した。

八月十一日に「第九回三陸海の盆」が岩手県の田野畑村のアズビィホールで開催された。宮城県からは気仙沼市の崎浜大漁唄込保存会が参加して演奏を披露した。

九月七日に「第五十九回宮城岩手選抜神楽大会」が栗原市の若柳妙見北辰神社で開催された。栗原市築館の城生野神楽による奉納神楽「お山掛け」に始まり、宮城県北と岩手県南の十一団体が出場した。優勝は「田村二代」を演じた岩手県一関市の達古袋神楽、二位は「弁慶、母と対面の場」を演じた栗原市栗駒の中野神楽であった。

八月三十日に栗原市栗駒のみちのく伝創館で「第六十九回東北神楽大会」が開催され、岩手県南と宮城県北の神楽団体が参加した。

十月六日に「第六回みちのく招福まつりinしばた」が柴田町槻木生涯学習センターで開催され、地元の柴田町内外の大

黒舞を踊る十二団体が参加した。

十月十九日に栗原市若柳の平野神社で「第四十二回平野神社奉納神楽大会」が開催された。登米市石越の赤谷神楽による「安倍保名捕らわれの場」、栗原市築館の城生野神楽による「弁慶の勧進帳」、栗原市栗駒の栗原神楽による「衣川の戦い、義経主従の最期」、栗原市鶯沢の鶯沢神楽による「御所の五郎丸陣屋巡り」、登米市石越の長下田神楽による「熊谷直実、敦盛首取りの場」など計十団体が参加した。

十月二十六日と十一月三日に、仙台市の榴岡公園で「れきみん秋祭り二〇一九」がありがとう四十年」が開催された。

第一部（十月二十六日）は、上谷刈の鹿踊剣舞、神流青麻神楽、生出森八幡神楽（太白区）、雄勝法印神楽（石巻市）、早池峰岳神楽（岩手県花巻市）が出演、第二部（十一月三日）は、大沢の田植踊（泉区）、秋保・長袋の田植踊（太白区）、川前の鹿踊剣舞（太白区）などが出演した。



「れきみん秋祭り 2019」での秋保・長袋の田植踊
(写真提供：仙台市教育委員会)

十月二十日に五回目となる「こればりの里神楽伝承まつり」が栗原市築館の旧富野小学校体育館で開催された。築館小学校薬師太鼓クラブに始まり、登米市石越の長下田神楽「牛若丸金売吉次 鏡ヶ宿の場」、栗原市栗駒の栗原神楽「安倍保名捕われの場」、栗原市築館の城生野神楽「弁慶の勧進帳」などが上演された。子ども達による「鶏舞」も城生野神楽鶏舞クラブ、一関市立萩荘小学校、中野神楽教室の三団体が参加した。

十二月一日に南三陸町のベイサイドアリーナ文化交流ホールで、「第十六回こどもたちの郷土芸能発表会」が開催され、日頃の練習の成果を披露した。また長野県から信州高山赤和伎楽会、三重県から南町神事講師市神楽保存会が特別出演した。

十二月七日に岩手県平泉町の平泉文化遺産センターふれあいホールで「南部神楽鑑賞会」が開催され、宮城県からは栗原市栗駒の中野神楽と栗原市築館の城生野神楽が出演した。

平成三十一年度の文化庁「伝統文化親子教室事業」には、仙台市の「荒町すずめっこ すずめ踊り親子教室」、「天地芦鼓連 仙台伝統文化『すずめ踊り』教室」、石巻市の「桃生小学校日高見はねこ会 はねこ踊り教室」、気仙沼市の「早稲谷鹿踊保存会 早稲谷鹿踊親子教室」、登米市の「横山火

布施獅子舞保存会 横山火伏獅子舞教室」、東松島市「矢本
道地神楽保存会 親子ふれあいふるさと事業」などが採択さ
れた。

六月一日と二日に東北絆まつりが福島県福島市で開催され
た。東日本大震災の年に始まった東北六魂祭の後継行事で、
東北各県の祭り（青森ねぶた祭り・秋田竿燈まつり・盛岡さ
んさ踊り・山形花笠まつり・福島わらじまつり・仙台七夕ま
つり）のパレードに加えて、福島県各地の民俗芸能も披露さ
れた。

小^お

塩^{しお}

さとみ

（宮城教育大学 教授）

三曲

三曲の演奏活動は昨年に比べてさらに活発化している。昨年減少が心配だった小・中学校への三曲鑑賞や体験授業も昨年の倍近く増え、「子供の邦楽コンサート」の盛況と相まって共に将来の布石として心強さを感じさせる。

特筆されるのは宮城県芸術協会の開会を盛り上げるためにメディアアークで催した「結いゝ次代へ」において三曲部門が大活躍したことである。佐藤暁山理事が司会をしながら朗読や揮毫のパフォーマンス尺八を吹奏するという活躍。

尺八五重奏「吉備路」は従来の尺八のイメージを覆すリズムカルなジャズを思わせる展開に拍手が湧き起こった。

定禅寺ストリートから立ち寄った一般市民の方が多く見受けられる中、伝統音楽の三曲にも変わった形の演奏を紹介できた。その意味では和楽創作トリオの岩沼に拠点を置く上原真佐輝氏の活躍も注目。彼は山田流箏曲が本業であるが出身の東京芸大の仲間等とジャンルを超えた演奏を披露している。オーボエ奏者の鈴木繁氏と箏、三絃を交えたカルメンなど新鮮であった。また、都山流尺八の大友憧山氏はモンゴルの歌姫やクラシックピアノ奏者等とそれぞれの楽器の特色を生かした音楽の楽しみを引き出している。

こうした従来の枠に捉われない音楽会が新たな道を切り開

いていくのかも知れない。期待して注目していきたい。

一月

十一日 三曲鑑賞授業 榴岡小学校

六年生百三十六名 越後谷恵美 氏家桂子 郷内伶斉

二十五日 三曲鑑賞授業 泉松陵小学校

六年生五十八名 橘寿好 高橋岡義里 佐藤真佐染

二月

一日 三曲鑑賞授業 若林小学校

六年生七十名 宮澤寒山 伊勢雅之園 千葉由美子

二日 第十一回 禅的尺八コンサート

戦災復興記念ホール 千五百円 主催 郡川記念サムライ

会 津軽錦風流尺八を吹く会 代表 高橋聴雪

十四日 三曲鑑賞・体験授業 西中田小学校

六年生百二名 宮澤寒山 田村亮山 宮澤朴山 田村雅楽

徽 曾根美登利 橘幸菊 吉崎真理

十七日 仙台山田流箏曲演奏会

イズミティ小ホール 主催 仙台山田流

三月

七日 三曲鑑賞授業 仙台市立南光台小学校

六年生百三十三名対象 鶴巻春雲 鶴巻雲山 菊地雲龍

十六日 宮城仙台会箏曲演奏会

楽楽楽ホール 主催 仙台宮城会 代表 渡辺悦子

三十日 たけくま和楽団らいぶⅩⅢ

仙台ブラザホール 上原真佐輝 岡本慎太郎

三十一日 第七回子供の邦楽コンサート

仙台三曲協会主催 福祉ブラザふれあいホール

小・中・高の計四十三名出演 全十七曲

四月

二十一日 等の祭典 沢井箏曲院創立四十周年記念コンサート

ト 東北支部公演

楽楽楽ホール 沢井箏曲院東北支部長 菊池文恵

五月

十九日 松浦井山 開軒二十周年記念演奏会

田尻文化センター 入場料二千元 主催 松浦境山会

七月

八日 三曲鑑賞・体験授業 松森小学校

六年生八十四名 橘寿好 高橋岡義里 狩野博山

十九日 三曲鑑賞・体験授業 作並小学校

四〇六年生十四名 橘寿好 阿部佐貴昭 佐藤真佐染

八月

二十五日 第四十七回仙台竹友会尺八演奏会

戦災復興記念ホール 会長 田口俊童

九月

十六日 澤村松嘉会長就任 第五十四回生田流箏曲演奏会

戦災復興記念ホール 二千元 主催 国風音楽奨励会

二十二日 第五十六回宮城県芸術祭テーマイベント

「結い〱次代へ」オープニング 仙台メディアテーク 尺

八五重奏「吉備路」宮澤寒山 佐藤皖山 大友憧山 庄子爲

山 平澤懂玲

二十三日 和楽創作トリオetcライブin仙台

ルフラン 上原真佐輝 田口拓 山本英利子 鈴木繁

二十七日 三曲鑑賞・体験授業 仙台市立鶴谷東小学校

四年生と六年生九十八名対象 宮澤寒山 狩野博山 小林

幸子 小林恵利子 橘幸菊

十月

十二日 藤原道山・菊聖公一邦楽スペシャルin仙台

戦災復興記念ホール 三千元

二十日 第六十三回 仙台三曲協会定期演奏会

仙台市民会館大ホール 二千元 会長 渡辺悦子 全十七

曲

二十七日 第三十四回都山流尺八演奏会

日立シアターホール 宮城県支部長 宮澤寒山

十一月

六日 第二十八回宮城県高校日本音楽定期演奏会

多賀城文化センター小ホール 宮城県高校箏曲連盟

二十三日 箏・尺八によるコンサート 杜に吹く風

楽楽ホール 二千円 代表 関野由美子

二十三日 第三十九回日本の調べ演奏会

イズミティ小ホール 操春会 代表 鶴巻春雲

十二月

九日 箏曲コンサート

東北福祉大学けやきホール 主催 水野箏曲学院仙台スタ

ジオ 代表 山田一邦 二千円

十四日 イブニングコンサート

オリープ 三千五百円 大友憧山 イリナ 高塚美奈子

宮^{みや}

澤^{ざわ}

寒^{かん}

山^{ざん}

(仙台三曲協会理事)



第7回子供の邦楽コンサート 福祉プラザふれあいホール



宮城県芸術祭「結い〜次代へ」尺八5重奏「吉備路」 仙台メディアテーク



沢井箏曲院 40 周年記念「箏の祭典」 楽楽楽ホール



鶴谷東小学校三曲鑑賞授業



西中田小学校三曲鑑賞授業



若林小学校三曲鑑賞授業

長 唄

初めての「チラシ」作り

宮城県芸術祭の長唄演奏会を昭和五十二年から開催している。当時は十数曲を超える演奏であった。時代の流れとは云え、観客は年々減少という傾向にあり、大変残念に思っていた。

「江戸長唄」のおもしろさを知っていたくにはどうしたらよいか、運営委員で話し合いを重ね、まずは宣伝を！と考えた。本年は新しい試みとして、たくさんの方の目に触れるように、「チラシ」を作り配ることにした。

各学校・各公の施設・各業種などに御協力をいただきお願いに巡った。今後もしろいろ工夫と知恵を出し合い、興味をもっと頂けるよう努力を続けていきたい。



第五十六回宮城県芸術祭 オープニング

令和元年九月二十二日（日） せんだいメディアアテークにおいて、杵屋和加喜久と稀音家六城遊による長唄「秋の色種」と生け花実演とのコラボで行われた。その他のテーマイベントもあり、会場は満席で大盛況であった。



第56回宮城県芸術祭 オープニング

第五十六回宮城県芸術祭 長唄演奏会

令和元年十月十三日（日） トークネットホール 仙台・小ホール（仙台市民会館）において開催された。

演奏番組

- | | |
|----------|-----|
| 一、君が代松竹梅 | 杵家会 |
| 一、汐汲 | 杵家会 |
| 一、都風流 | 杵屋 |
| 一、綱館 | 杵家会 |
| 一、角兵衛 | 稀音家 |

演奏会は、台風十九号東日本直撃の次の日。台風通過の危うい天候の中、例年を上回る観客に感動した。チラシの成果があったものと思われる。

これまで練習を重ねてきた出演者二十五名中、残念ながら、三名が洪水のため欠席となった。



第 56 回宮城県芸術祭長唄演奏会

社中の活動

○杵家会東北支部

家元の古希祝・二世七唄師十三回忌の記念演奏会は、平成三十一年四月三十日（火・祝）国立小劇場において開催された。東北支部からは二十二名参加し「君が代松竹梅」を演奏した。全国から集まった会員は、稽古を重ねて晴れがましい気持ちを抱きながら舞台に臨み、盛会裡に幕が降りた。当日は平成天皇御退位の日、忘れられない演奏会となった。

杵^{きね} 家^{いえ} 弥^や 登^と 鈴^{すず}

（宮城県芸術協会邦楽部 長唄運営委員）



二世杵家七唄十三回忌六世杵家弥七古記念演奏会

民謡

音頭といえは「ドドンガドン」が象徴的に思われるが、近年新しいアプローチでの音頭が出てきている。日本に音頭は数知れないほどあるが全て「ドドンガドン」が当てはまるのかと言うと、そうでもない。民謡または伝承音頭といえは、伊勢音頭、秋田音頭等々がある。その土地で伝わり長い年月脈々と伝わった音頭には「ドドンガドン」が入るものとはほとんどなく、その土地土地で歌、リズム形態は異なっているものが多い。いわゆる曲名に音頭と入っていても音頭形式でないものもあれば、音頭と入っていても音頭形式のものもあるのだ。この話を冒頭に書いたのには理由がある。今年（二〇二〇年）東京オリンピックの年である。一九六四年（昭和三十九年）十月十日に行われた東京オリンピックから実に五十六年ぶりのオリンピックが開催される。前回のオリンピック前年に東京五輪音頭が作られた。最初にレコーディングをしたのが民謡出身の三橋美智也、のちに三波春夫が歌い全国的に有名となったが、これがまさしく「ドドンガドン」である。「ドドンガドン」のルーツ的なものは「東京音頭」である。昭和八年発表のこの曲の元歌は「丸の内音頭」、民謡の「鹿児島おはら節」の三味線前奏をそのまま取り入れ、歌詞は丸の内音頭を入れて、時代を超えた超ロングヒットと

なった。前出の三曲の音頭には歌い手、作者に強い思い入れのエピソードがあるが、その紹介はまたにしたい。さて、話は東京五輪音頭に戻るが、二〇二〇東京五輪音頭という曲がある。冒頭紹介した新しいアプローチの音頭であり、あまり「ドドンガドン」が感じられない。民謡のように土着性もなく、かといって鼓動を揺らす力もなく、はたして新しいアプローチの音頭は後世に残るのか、しばしの静観といったところだ。しかし、一九六三年の東京五輪音頭を聴くと、心が打たれるのは私だけだろうか。復興九年目、県民が心から浮かれ、楽しく民謡、そして音頭を聞ける日々を願いたい。

□公演・発表会・民謡の会

令和元年民謡の会、そして被災地、復興住宅地域、各施設へのボランティア活動、チャリティーコンサート等の活動を紹介する。

民謡森鈴会

【由来】平成七年三月発足。会員四十名、年齢構成三十歳～八十歳在籍。民謡を通して、地域交流の輪を広げ、会員相互親睦図ると共に民謡保存、伝承を目的に活動。特に福祉慰問等を行い、地域貢献を行っている。

【活動】歌い始め、総会新年会を初めとし、ウェルパークコ

ンサート、毎月、老人福祉施設慰問、六月には森鈴会の発表会（毎年六月第四日曜日）を行う。（代表 大槻 森鈴）

春日寿千代会

【由来・目的】昭和六十一年寿千代会を発足。民謡舞踊の習得と普及を通して会員相互の親睦を図ると共に、健康で豊かな生きがいづくり、共に支えあう社会作りを踊りを通して地域へ貢献することを目的として活動している。

【主な活動】二月三日新年初舞の会。十一月二十四日復興祈願民謡舞踊まつり（本吉はまなすホール）、十一月十七日復興チャリティー鹿折地区舞踊まつり（鹿折ふれあいセンター）。介護施設、敬老会訪問十二カ所、四十回。復興住宅団地への訪問四カ所。一人でも多くの人達に民謡・民舞の楽しさを体験していただけるよう、修練を重ねて普及伝承に努めていきたい。（会主 春日 寿千代）



角田市民民謡保存会

【由来】昭和三十一年、角田市内の民謡愛好者が相集い発足した。現在、六代目の会長として活動しています。会員の親

睦と郷土民謡の保存普及を兼ねた稽古を月二回行っている。特に地元民用の「仙南長持唄」は発足当時より歌い継がれています。現在十五名。

【活動】令和元年の活動・各公民館行事の参画・角田市ウェルパークロビーコンサート、郷土資料館「蔵のコンサート」文化協会の発表会の出演（代表 渡辺 安博）

東北民謡研究会

【由来】発足平成二十五年三月三十一日。会員八十名、小学六年生から八十歳まで幅広く在籍。民謡を愛し、民謡の奥深さと、幅広い歌唱力を研究する。代表者鈴木高光。

【活動】年二回のおさらい会の開催（三月、十一月）及び各種ボランティア活動。池田 多津子（名誉顧問）

新派藤本流

お囃子つくし会「三味線・尺八・太鼓・唄」

【由来】昭和三十八年に創会。民謡唄の指導は基より三味線、尺八、太鼓と統一した指導をすることにより「民謡」が本来持っている魅力を余すところなく伝え、日本人の心の豊かさから生まれた民謡音楽の本当の姿を統一化した形で伝えようと発足。

創会して五十六年、細棹三味線本来の音を追求し、後世に残す活動を今後も継続する。

【活動目的】民謡・端唄を通して、生活道徳など広い観点で活動し、日本人として日本の民謡を歌い継げるようにすることと、三味線音楽の普及を行う。現在の会員数 宮城県内六十名

【主な活動】年八回の全体研修活動の実施。「端唄と民謡三味線について」「全国民謡西東日本編」「三味線、尺八の技術向上研修会」。会員による被災地及び介護施設等への訪問。

【今後に向けて】

- ・民謡及び三味線音楽の普及、若年層への浸透。
 - ・小中学校への民謡三味線等の指導、実技活動。
 - ・復興の手助けとなる活動及び県民の更なる元氣、活気が出る活動施策。
- (会主 二代目 藤本 和夫)

民謡靖嶺会

【由来】会主は昭和五十四年八月、師匠（佐藤桃靖氏）から師範を允許される。会の活動は平成六年四月から始まり、平成十三年師匠から引き継ぎ本格的に活動を開始する。現在八教室（教室は週一回、月一〜二回開催）

小学生一人、二十〜三十歳代五人、四十〜五十歳代十人、六十歳代以上五十二人。

【活動目的】民謡の保存・普及・発掘活動に取り組む。高齢者の健康維持、介護予防生きがい作り。

【主な活動】新年会・民謡舞踊競演会の開催。

地区敬老会に十一会場十四回訪問。福祉施設への訪問十回訪問。三月二十日地区文化祭（おらほのとつておき2019）、十一月二十四日復興祈願民謡舞踊まつり（本吉はまなすホール）、将来に向け、民謡普及活動として五会派交流会の実施、民謡の社会的地位、価値の向上と民謡による効用（認知症予防、肺機能強化等々）による健康寿命の延伸につなげたい。

(会主 阿部 勝造)

民謡コンクール

県内各地で実施されているコンクール、特に他県からの参加者も観光客誘致の面でも貢献していると感じる、代表的な全国大会をご紹介します。

◎ 十二月二十二日（土）

「第四十回NHK東北民謡コンクール宮城県大会」

【主催】NHK仙台放送局

【会場】NHK仙台放送局 T1スタジオ

【開催目的】東北の豊かな風土と温かい人情を唄い伝える民謡の祭典。宮城県大会「ジュニア部門」と「大賞部門」二部

門で実施。

【結果】ジュニア部門（小学四年生以上、十九歳未満）には十二名、大賞部門（十九歳以上）には九百八十五人が出場した。
「ジュニア部門」 優秀賞・荒瑞加（曲目）夏の山唄 「大賞部門」 優秀賞・白鳥拓人（曲目）宮城馬喰節・平たか子（曲目）宮城馬喰節

◎ 二月十七日（日）

「第四十回NHK東北民謡コンクール優勝大会」

【主催】NHK仙台放送局

【会場】多賀城市民会館

【結果】大会は「ジュニア部門」六名「大賞部門」十三名と、名実ともに東北一を競う二部門で実施。東北六県の各県大会で選出された大賞部門十三人がのどを競った。

【大賞部門】大賞・白鳥拓人（曲目）宮城馬喰節、優秀賞・片平正（曲目）会津めでた・飯沢幸子（曲目）山形木挽唄

【ジュニア部門】ジュニア大賞・荒瑞加（曲目）夏の山唄

◎ 七月十四日（日）

「第十三回夏の山唄全国大会」

【主催】仙北民謡協会 十九団体

【会場】登米市米山体育館

【開催目的】昔から農家の日課である朝草刈の行き来に唄われた「夏の山唄」を正しく後世に継承し、大会を通して地域

文化の振興と民謡民舞の活性化を図る目的として開催。

【成果】出場者百六十二名参加 「一般」 優勝・鈴木明美・準優勝・鈴木怜菜 「熟年」 優勝・相原啓子・準優勝・堀井良子 「年少」 優勝・桜井陽与里・準優勝・萩原瑚博
衣川 喜仁

（夏の山唄全国大会実行委員長）

◎ 九月二十九日（日）

「第二十六回につぼんのおどり全国大会」

【主催】日本新舞踊民謡協会

【会場】仙台市シルバースター

【開催目的】平成二年七月演歌舞踊みちのく会として発足。舞踊と音楽文化の活性化と芸術性向上を目指して、平成六年二月十九日・二十日の二日間で第一回東北演歌舞踊大会を開催。平成十八年民謡舞踊部門を新設し、につぼんのおどり全国大会として今日に至る。



【成果】参加者八十一名（五十三曲）、こども未来賞大会（幼児・小学六年生）十七曲（二十四名）、新舞踊民舞賞大会（中学生以上）三十六曲（五十七名）参加し、観客三百名。写真は銀賞入賞「米節」金田しずく（小学二年）

山根 繭幹

（山根流家元）

◎ 十一月三日（日・祝）

【第十回稲上げ唄全国大会】

【主催】稲上げ唄全国大会実行委員会（栗原市民謡有志）

【後援】栗原市、栗原市教育委員会、新みやぎ農業協同組合

【会場】この花さくや姫プラザ（栗原市志波姫）

【開催目的】昔は刈り取った稲を、一旦棒がけかハセがけにして乾燥させ、それを馬の背に載せて家の作業場まで運んで脱穀しました。農作業の機械化が進み、その光景を見ることができなくなってしまった現在、「稲上げ唄」を正しく後世に継承するとともに、大会を通して地域文化の振興と民謡会の活性化を図るため開催。

【成果】県内、秋田県、岩手県、福島県、山形県、栃木県等

「熟年の部優勝」遠藤勝雄（東松島市）「少年少女の部優勝」スカーレット美奈（一関市）

高橋 隆雄
（稲上げ唄全国大会実行委員長）

◎ 十一月二十四日（日）

【第三十六回さんさ時雨全国大会】

【主催】宮城県民謡道連合会

【共催】第三十六回さんさ時雨実行委員会

【後援】宮城県 山元町 山元町教育委員会 河北新報社

東北放送（公益財団法人）日本民謡協会

【会場】宮城県亶理郡山元中央公民館

【開催目的】民謡「さんさ時雨」は格調高い祝い唄として全国的に知られる宮城県を代表する民謡。この民謡を正しく継承、普及させ、先人から歌い継がれて来た唄を次世代に引き継ぐことが当会の開催目的である。

【成果】近年は個性を生かしつつ、正しい唄の継承が浸透している。出場者数 百四十七名 東北六県、東京都・北海道、その他全国からの参加。「一般の部」優勝・伊藤慶一（黒川郡）準優勝・藤沢和子（塩釜市）「熟年の部」優勝・作間京子（亶理郡）準優勝・鈴木憲明（栗原市）「年少の部」優勝・大河原増菜（亶理郡）準優勝・板橋ひなの（亶理郡）

二代目 藤本 和夫
（宮城県民謡道連合会 事務局長）

◎ 十一月九日（土）・十日（日）

【第三十五回 秋の山唄全国大会】

【主催】 涌谷町・涌谷町観光物産協会

【共催】 遠田商工会

【会場】 宮城県涌谷町勤労福祉センター

【開催目的】 五穀豊穡の守り神として信仰を集める笹岳山を唄った民謡「秋の山唄」。郷土の民謡を正しく継承すると共に、民謡を通じた人づくりを行い、文化の振興および地域の活性化を図ることを目的とする。

【成果】 百名を超える参加者で、東北、関東地方からも参加。優勝者は鈴木怜菜（塩釜市）

写真は優勝者と崑峯寺住職の皆様

こんぽうじ



今野 香湧
（香湧会会主）

最初の「音頭」の話もそうですが、民謡が時代とともに言葉も変化してきた。風俗歌、俚謡、俗謡、民謡。令和になって、どのように変化していくかだが、古いものを大事に、基本に忠実にいきたいと思う。

二代目 藤 本 和 夫
（民謡・端唄 三味線演奏家 作曲家）

演劇

この一年を振り返って、意外だったのは、公演の数が減っていることである。統計的な比較をしていないので、あくまで印象に止まるが、前年に比べて公演の数は少なくなっている。これが何を意味するものなのか、現状ではわからない。しかし、この傾向が翌年も続くようであれば、本県の演劇は、量的に衰退していることになる。

一方で、井伏銀太郎、渡部ギユウ、白鳥英一、渡部三妙子といった長年、活動が続いている演劇人が積極的に作品を作り続けており、野々下孝、大河原準介、横山真、芝原弘、菊池佳南のような東京から拠点を移した演劇人の水準の高い作品が刺激となって、質は一段と向上している。

実際、本年は、三団体が海外公演を行い、高い評価を受けている。

昨年一月にエル・パーク仙台東スタジオホールで公演したシェイクスピア・カンパニーの『アイヌ・オセロ』（脚本：下館和巳・渡邊欣嗣、演出：秋辺デボ・下館和巳）が八月七日～十日、タラ劇場（ロンドン）で公演。また、劇団「TM」の詩劇『BENIBANA』（戯曲：森山明子、演出：三木弘和）

が八月二十一日～二十六日、フィンランドのヴァンター市とポリ市で公演を行い、仙台シアターラボ シア・トリエ合同公演 Fukushima Meets Miyagi Folklore Project #3 『BA BEL』（原作：旧約聖書、テキスト：大信ペリカン、構成・演出：野々下孝）が、十一月一日、第七回禮唐国際公演芸術祭（韓国）で上演されている。

地元での活動に於いては、井伏銀太郎のグループが突出している。

一月に、日本劇作家大会2019大分大会で『イーハトーヴの雪』『前夜』を上演。五月に Gin's Bar 公演 劇魂伝承色彩シリーズ Act.10 『Verte 一秒間に四文字で伝えられない想い』クオータースタジオ。井伏銀太郎の戯曲を演出：井伏銀太郎、出演：吉田弘希・鈴木結の teamA と演出：西澤由美子、出演：武藤修平・フラッシュ智恵子の teamB で上演。六月には、多賀城市民会館小ホールで Requiem（レクイエム）三部作『前夜』『海月と花火』『ニライカナイの風』を上演。七月には、宮澤賢治イーハトーブ館（花巻）、風のスタジオ（盛岡）、クオータースタジオで『イーハトーヴの雪＊

組曲』を上演。八月には『短編劇 夏コレクション』をクオースタスタジオで上演。十月には、色彩シリーズ Act.13『ROSE 一人の夜、二人の朝』（作：井伏銀太郎）をクオースタスタジオで、演出：井伏銀太郎、出演：中田綾・竜村龍平のチームA、演出：井伏銀太郎、出演：有賀友梨・高橋聡汰のチームB、演出：竹本和央、出演：春木舞・五淨壇のチームCの三チームで上演。十一月には、いしのまき演劇祭で『イーハトーヴの雪』『前夜』を上演。十二月にはクオースタスタジオで、『前夜』『海月と花火』『ニライカナイの風』『桜ひとひら』『第二章 祈りの環』（新作、西澤由美子の一人芝居）『Tea for Pot 25日のあなた』（新作、有賀友梨の一人芝居）を上演している。

これだけの活動を行う原動力として、レパートリーを持った劇団という昔ながらのスタイルを維持していることがあるように思う。公演毎のプロデュース制が主流になっているが、集団の力を見直す時期に来ているのかもしれない。

毎年、募集していた「せんだい短編戯曲賞」が隔年開催となり、休止となった一年の間に仙台市民文化事業団が新たな演劇祭の開催を目指し、公演の制作を行っている。劇都・仙台演劇祭（仮）プレイベントメインステージ『ナイゲン』（演出：丹野久美子）三月十六日・十七日、エル・パーク仙台ギャラリーホール。アガリスクエンターテイメントの富坂

友の戯曲を公募した高校生で上演。劇都仙台ミュージカルシアター公演『おかえり、ケヤキ食堂』（脚本・演出：渡部三妙子）十二月七日・八日、日立システムズホール仙台シアターホール。仙台市民文化事業団が主催。公募で集まった市民五十四名で結成し二〇一八年十月に始動した劇都仙台ミュージカルシアターの初公演。

『せんだい卸町アートマルシェ2019』（第三回）は、十月十一日～十四日、せんだい演劇工房 10BOXで開催。劇団短距離男道ミサイルがせんだい短編戯曲賞の受賞作家九人の作品を上演するという企画が秀逸であった。他に仙台や東京から十四作品が集結している。台風の直撃により、一部の上演が中止となってしまったが、今後の継続が期待される。また、第四回いしのまき演劇祭は、石巻市の各所で、十一月二日～十二月一日、開催。地元石巻の劇団に仙台や東京の劇団も加わり、八団体の公演が行われた。この二つのフェスティバルは、それぞれ三回目、四回目となり、しつかり、地元に着定してきているように思う。

また、新たな動きとして、インプロ仙台PAGE☆ANT『即興パフォーマンズライブ』はギャラリー・スケーナ（宮城野区榴岡）を会場に、二月二十三日、五月二十五日、七月二十七日、十二月七日と定期的に公演を続けている。「お笑いや演劇とも違う台本がない即興のお芝居」という謳い文句

で観客を集めている。演劇の新しい楽しみ方かもしれない。
以下で、この一年を振り返りたい。

一月

A Ladybird Theater Company 第十六回公演『千年ホタル』
(作・演出：箱崎貴司) 十一日～十三日、せんだい演劇工房
10-BOX box-1。

劇団ぎくろう『みちのりのまじわり』(作・演出：横山真)
十八日～二十日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。北海道
芸術高校仙台サテライトキャンパスの在校生、卒業生が結成
した劇団の旗揚げ公演。

ミュージカル『おー、サバンナ!』二十七日、つばめの杜
ひだまりホール(山元町)。亘理町と山元町の子供が中心と
なって作られた作品。

SEND A I 座プロジェクト『楽屋』(作：清水邦夫、演出：
樋渡宏嗣) 三十一日～二月三日、エル・パーク仙台スタジオ
ホール。清水邦夫の名作を絵永けい・上島奈津子・永澤真美・
熊谷有夏の椿組、佐々木久美子・熊谷由海・佐藤舞子・千葉
里子の桜組のダブルキャストで上演。

二月

OH 夢来 第二十三回ミュージカル公演『めるへん★』

いきんぐ→Vol.4 アイ・ラブ・ピノッキオ!』(脚本・演出：
渡部三妙子、音楽：橋元成朋、振付：小澤寿子) 二日・三日、
エル・パーク仙台ギャラリーホール。

AZ9 シロニア・アクターズ第二十六回公演『かわさき空
中食堂 ハッピー・オポコンベ』(作：クマガイコウキ、演出：
渡部ギユウ) 十日・十一日、えぞこホール大ホール。川崎町
を舞台に書き下ろされたオリジナル脚本を小学四年生～六年
生の子供達が熱演。

SEND A I 座☆プロジェクト東北物語 Vol.10 ～ 酒蔵
のある街、旅公演 ～ 渡部ギユウ独り十五役芝居『税務署長
の冒険』(原作：宮澤賢治、構成・演出：高橋菜穂子) 十四
日～十六日、森民酒造本家、二十二日・二十三日、六本木ス
トラップスペース(東京)、三月二日・三日、靴ダイニング
藍(村田町)、三月十六日・十七日、庄内町文化創造館響ホー
ル(山形県)。東日本大震災後の二〇一四年にスタートした『東
北物語』シリーズで特に評判の良かった宮澤賢治の短編『税
務署長の冒険』を新演出で上演。

東北学院大学演劇部二〇一八年度卒業公演『幸せのつくり
かた』(作・演出：学院花子) 十五日・十六日、東北学院大
学土樋キャンパス九十周年記念館四階第一音楽室。

塩釜夢ミュージカル『時の旅人』(作・演出：丹野久美子)
十六日・十七日、塩釜市遊ホール。出演者を公募した市民

ミュージカル。

演劇ユニット箱庭第四回公演星新一舞台化企画『ぐう星』
『北斗七星は見えているか』(原作:星新一、脚本:中島翔平、
演出:貴山ユウヒ)二十三日・二十四日、アーツスペース・リュ
ミエール。福島から仙台に拠点を移した劇団の公演。

仙台シアターラボ シア・トリエ合同公演 Fukushima
Meets Miyagi Folklore Project #2『みちわたる』(作・演
出:大信ペリカン)二十三日・二十四日、正眼寺(福島市)。
合同公演第二弾。

『マイぬよみ芝居』あの日からのみちのく怪談』(原作『渚
にて あの日からのへみちのく怪談』)二十四日、宮城野区
文化センターパトナホール。出演:芝原弘、菊池佳南、富樫
かずみ、横山大地、かじみなみ。

劇団「高砂もりあげ隊」第十回公演『みちのく恋の鶴巻』
二十四日、高砂市民センター。

三月

Team HacClose Vol.6『咲嘩スール Suck a Doll』(作・
演出:武田らひ)二日・三日、エル・パーク仙台スタジオホール。
アクターズ仙台公演『Over The Flowers』(作:藤川みち
る、演出:竹本和央)二日・三日、クオータースタジオ。

第六回せんだい短編戯曲賞大賞作品『わたしのヒーロー』

リーディング上演(作:ピンク地底人3号、演出:文月奈緒
子)と授賞式。十日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1

市民ミュージカル』とびだす100通りのありがとう』(作・
演出:寺本建雄)十日、旧野蒜駅。

演劇集団AZ第四回公演『駄弁りんぐ若人たちの物語』
十五日・十七日、クオータースタジオ。『くらいクライ』『み
てくれたまくれ』(作・演出:川口朋子)『アネオト』(作:
中野莉嘉、演出:川口朋子)『へのへのもへじ』(演出:構成:
宮本一輝)の短編オムニバス公演。

利府町民劇団ありのみ第二十三回公演『宿場町利府街道伝
人情時代劇 第三話 椿屋の女房』(作・演出:伊澤美樹)十六日・
十七日、利府町公民館三階文化ホール。

AZoo第五回公演『おとしたもの』(作・演出:渡辺陽)
十六日・十七日、えぞこホール平土間ホール。AZ9 シェニア・
アクターズの卒業生が結成した劇団。

劇団短距離男道ミサイル三十発目『父さん、晩年っていう
のかい、これは。』涙なみだの最終ツアー』これで見
納め太宰三部作完結編(原作:太宰治『晩年』、脚本・演出:
澤野正樹)六日・十日、『劇』小劇場(東京)、十三日・十四
日、G/P/T(名古屋市)、十九日・二十一日、スタジオ開墾(若
林区卸町)。

劇団ひとりっこ『朗読劇いのち愛づる姫』(作:中村桂子、

山崎陽子、演出：伊藤み弥）二十一日、宮城野区文化センター三階和室一。出演：武内典子、絵永けい、長谷野勇希、横山真、郷内宣子。

マントル70kg旗揚げ公演『あなたに相應しいファンファーレ』（作：大賀理司）二十三日・二十四日、せんだい演劇工房 10-BOX box-3。

名取こづもミュージカル第十回公演『big the musical』二十三日・二十四日、名取市文化会館。

劇団かげろう旗揚げ公演『プラス・マイナス』（作・演出：菊地陽哉）三十日・三十一日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。

四月

劇団ヤミ鍋13.5公演『うやぎ』（脚本：廣田和斗、演出：平塚祐里）六日・七日、クオータースタジオ。

東北物語II番外編『安吾をよみ、語る。』七日、純喫茶星港夜。『桜の森の満開の下』（作：坂口安吾、演出：渡部ギョウ）『白痴』（作：坂口安吾、演出：高橋菜穂子）

五月

演劇ユニット石川組第一回公演『隣の人々 静かな駅』（演出：横山真）十日・十二日、せんだい演劇工房 10-BOX

box-1。石川裕人の作品を絵永けい、宿利左紀子、片倉久美子、長谷野勇希の出演で上演。

演劇企画集団LondonPANDAリーディング公演『青葉繁れる』vol.2（原作：井上ひさし、構成・演出：大河原準介）十日、川西フレンドリープラザ（山形県、十一日・十二日、アトスペース YOUTO（青葉区片平）。昨年上演した作品をキャストに女性も加えて再演。出演：東谷英人、飯沼由和、村田青葉、菊池佳南。

言言第五回公演『東京裁判』（作：野木萌葱、演出：飯沼由和）二十四日・二十六日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。第一回公演で上演した作品をキャストを入れ替えて五年ぶりに再演。出演：戸石みつる、樋渡宏嗣、原西忠佑、山澤和幸、飯沼由和。

六月

仙台シアターラボ シア・トリエ合同公演 Fukushima Meets Miyagi Folklore Project #3『BABE1』（原作：旧約聖書、テキスト：大信ペリカン、構成・演出：野々下孝）十五日・十六日、秋保の杜 佐々木美術館。出演：野々下孝、渡邊悠生、宮本一輝、蒼井彩乃、佐藤隆太、千石すみれ。仙台で活動する仙台シアターラボと福島で活動するシア・トリエの合同公演。この作品は、十一月一日、第七回禮唐国際公

演芸術祭（韓国）でも上演している。

劇団三カ年計画 Vol.6『失念』（作・演出：なかじょうのぶ）十五日、吉野作造記念館企画展示室。二十二日、風の沢ミュージアムレジデンス棟。十月二十九日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。

重力／Note『LOVE JUNKIES』（原作：アルフォン・リンギス『信頼』、翻訳：工藤順、演出：舞台美術：鹿島将介）十八日～二十三日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。七月五日～七日、枝光本町商店街アイアンシアター（北九州市）、七月十六日・十七日、いわてアートサポートセンター風のスタジオ。小濱昭博の独人芝居。

劇団どんちょうの会第六十四回公演『ナツヤスミ語辞典』（作：成井豊、演出：三浦勝則）二十一日・二十二日、登米祝祭劇場小ホール。

七月

最強の一人芝居 フェスティバル 東北版『INDEPENDENT:SEND19』四日～六日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。上演作品は、『やさしくしないで』（出演：メ梨ライヒ、脚本・演出：大河原準介）、『マドレ』（出演：渋谷裕子、脚本・演出：西海石みかさ）、『38℃の夜』（出演：しゅー、脚本：長門美歩、演出：志賀彩美）、『なまはげシラノ』

（出演・脚本・演出：進藤則夫）、『鯨鳴り』（出演・脚本・演出：武田らこ）、『露出さん』（出演・脚本・演出：遊々亭つばさ、原作：春風亭百栄）、『ミヤコワスレナイ』招聘作品 from 福島（出演：笹川未希、構成演出プラン：澤野正樹）の七作品。

YONEZAWA GYU OFFICE 東北物語 stage II 第4弾『土神ときつね』（作：宮澤賢治、構成・演出：高橋菜穂子、作曲・楽師：山本純）十一日～十四日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。二十六日～二十八日、六本木ストラップスペース（東京）。八月一日・二日、荏銀タクト鶴岡小ホール。三十一日～九月一日、ウイングフィールド（大阪）。出演：渡部ギユウ・原西忠佑・菊池佳南。

劇団ひとりっこ第六回定期公演『花いちもんめ』（作：宮本研、演出：武内典子）十四日・十五日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター。

白鳥英一役者生活三十周年第一弾『Stories ～他愛ない話のオムニバス～ナツヤスミ』十九日～二十一日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。『ドアイラク・キ』（作・演出：芦口十三）出演：斎藤大典、鎌田麻椰、『コワカレ』（作・演出：平塚祐里）出演：白鳥英一、廣田和斗、『家族代行』（作・演出：芦口十三）出演：山下美由紀、白鳥英一、『鱗と毛皮とこだけの話—おいでよ浅虫—』（作：鱗）出演：更紗、『コップの底の太陽』（作・演出：生田 恵）出演：白鳥英一、瀧

原弘子、『十二夜!』（リーディング）（原作：W・シェイクスピア、脚本・演出：芦口十三）

仙台シアターラボ公演『山椒魚』（原作：井伏鱒二、脚本：土路生真隆、構成・演出：野々下孝）二十八日、川西町フレンドリープラザ（山形県）、三十日、せんだい演劇工房 10-BOX box-2。出演：横山真、野々下孝。

八月

東北学院大学演劇部『タイトルはご自由に。』（作：大竹竜平、演出：遠藤聖弥）九日・十日、東北学院大学泉キャンパスコミュニティセンター二階多目的ホール。第五回せんだい短編戯曲賞大賞受賞作品の上演。

劇団やんま 第五回公演『石川裕人追悼『旅立ち』（作・演出：藤原貢）十日・十一日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター。

九月

Team HacClose vol.7『A library』（演出：武田らゐ）七日・八日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。初代三遊亭圓朝「死神」、岸田國士「命を遊ぶ男ふたり」を上演。

ドリーム☆キッズ第十七回公演『ほし☆きらり！私のいちばん星』（脚本・演出：渡部三妙子）七日・八日、登米祝祭劇場。

登米市などの小中学生でつくるミュージカル。

A Ladybird Theater Company 第十七回公演『兵共が夢の跡〜幕末刃風伝・蝉時雨の章〜』（作・演出：箱崎貴司）十三日・十五日、宮城野区文化センターパトナシアター。新選組三部作完結編。

劇団航海記第十四回公演『スヴァールバルデッカマエテ』（作・演出：渡邊意志）十四日・十五日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。

みちる cafe『人魚の骨』（作：藤川みちる、演出：海空）『現実（うつせみ）』（作・演出：諸戸祐生）『死に至らぬ病』（作・演出：出演：藤川みちる）二十一日・二十三日、クオータースタジオ。

十月

仙台シニア劇団まんざら第九回定期公演『煙が目にしみる』（脚本：堤泰之、演出：大石和彦）四日・六日、宮城野区文化センターパトナシアター。

ミュージカル劇団ウインド・カンパニー第十五回公演『ミュージカルロマン十の契り〜幻の赤い月〜』『グラン・レビューレビューアラカルト!』五日・六日、仙台市福祉プラザふれあいホール。仙台の宝塚を目指す劇団の公演。

いわぬま市民劇団ウィープ第十九回定期公演『エンゼル仮

一面』(作：高野蓮、演出：いく) 十九日・二十日、岩沼市民会館 中ホール

SENDA座プロジェクト『罌』(原作：ロベール・トマ、翻訳：宮島春彦、演出：樋渡宏嗣) 二十三日～二十七日、エル・パーク仙台東スタジオホール。フランスのミステリー。

ミュージカル『おとぎの森へ!』二十七日、つばめの杜ひだまりホール(山元町)。山元町の子供が中心となって作られた作品。

十一月

劇団麦第百六回公演『蠅取り紙〜山田家の5人兄妹〜』(作：飯島早苗・鈴木裕美、演出：熊谷盛) 二日・三日、エル・パーク仙台東スタジオホール。

劇団ヤミ鍋第十四回公演『TINYEND』(作：演出：平塚祐里) 九日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター。

Team HacClose vol.8『熱闘!! 飛龍小学校☆パワード』(作：西田シャトナー、演出：三島イチロー) 十六日・十七日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。

劇団かげろう第二回公演『約三十の嘘』(作：土田英生、演出：菊地陽哉) 二十二日～二十四日、クオータースタジオ。三月に旗揚げ公演をした劇団。

鳥屋のこてん『アン—Anne—』(原作：ルーシー・M・モ

ングメリ、脚本・演出：芦口十三、ドラマトゥルク・生田恵) 十六日・十七日、旧観慶丸商店(いしのまき演劇祭)、二十二日～二十四日、せんだい演劇工房 10-BOX 別館能・BOX。昨年の作品の再演。役者と人形がコラボする音楽劇。劇団どんちようの会第六十五回公演『うたよみざる』(作：川村光夫、演出：三浦勝則) 二十二日・二十三日、登米祝祭劇場小ホール。

ナターシャ・プレシコフ旗揚げ公演『楽屋』(演出：高江智陽) 二十九日～十二月一日、せんだい演劇工房 10-BOX box-1。清水邦夫の名作を佐々木玲子・小笠原章江・蒼井彩乃・大内麻裕のトカレフ組、堺マキ・小笠原章江・蒼井彩乃・鈴木美羽のカラシニコフ組の一部ダブルキャストで上演。

十二月

劇団ざくろ『ゼンダ城の虜〜苦むす僕らが嬰兒の夜〜』一月に旗揚げ公演をした劇団。野田秀樹の名作を、演劇企画集団 LondonPANDA の大河原準介を演出に迎えて上演。

鈴^{すず}

鴨^{かも}

久^{ひさ}

善^{よし}

(演劇ジャーナリスト)

洋舞

天皇陛下生前即位により、年号が平成三十一年から令和元年に変わるといふ貴重で歴史に残る年を迎えました。益々活動の広がりを感じる時代を迎えた感覚をかみしめているところです。宮城県から活躍の場を広げ、若い芸術家として国内、海外のバレエカンパニーやダンスカンパニーで、プロとして活動しているダンサーが年々増えてきていることはとても喜ばしいことです。プロにつながる足掛かりの一つとして、国内での全国コンクールがあります。現在宮城県内では、三ヶ所の全国コンクールが開催されていますが、審査員は国内、海外で活躍された芸術家やディレクターで構成されています。スカラシップ受賞者は、海外でのバレエスクールやカンパニーの経験ができ、また他の受賞者は国内バレエカンパニーへの選択肢も増えることになります。それぞれに遠かった夢に到達するスピードも速まっている現在を確信せざるをえません。只、残念なことの一つが宮城県出身のダンサーが地元で舞台活動をする機会が少ない事実です。もう少し多くの舞台活動が提供できるチャンスを作ることが、我々の今後の課題となると思います。

県内の活動

○一月二十七日 大崎地方青年文化祭「ユースフェスティバルinおおさき2019」十八団体約二百人が参加し、ステージではソーランやダンスが披露された。大崎生涯学習センター

○二月二日～三日 パリエ・クラス・ドウ・バレエ 第十九回発表会 「コッペリア」全三幕（抜粋）「バレエ・コンサート」他 主宰 辻 真弓 仙台市太白区文化センター音楽楽ホール

○二月十七日 仙南青年フェスティバル2019 in ざおう 仙南地域の十団体がダンスなどのステージを発表。蔵王町ございんホール

○三月十六日～十七日 「TAP DANCE IS HAPPINESS」公演、小学生からシニアまで三十名余りが出演した。世界に響く舞台をと、アフリカ音楽の専門家が招いて開催。タップダンサー熊谷和徳と共演。せんだいメディアテーク一階オーブンスクエア

○四月二十日 フローラルバレエスタジオ 第十三回発表会

クラシック創作作品「Garden」「ユニオン・ジャック」

仙台国際センター大ホール 主宰 定永綾

○五月五日 ハイパーウィンド仙台 第六回公演 「コッペ

リア」 仙台フィルハーモニー管弦楽団の演奏に合わせ、仙

台市や山形市などの約四十人が出演。演出・振付は東京シテイ

バレエ団の石井清子さん。代表 峯岡比呂美 イズミティ21

○五月五日 橘バレエ学校仙台教室 第三十九回発表会

「ドン・キホーテ」第一幕より、小品集「バレエ・コンサート」

電力ホール

○五月十九日 おなじアホなら踊らにやそんそん！その9

ダンスパフォーマンス

「キセキ」「茶林」「海を見ていた午後」 せんだい演劇工房10

―BOX 振付者 櫻井由美、磯村真汐、引地由美

○七月七日 仙台ノイエタンツ研究所モダンバレエ公演

「大空の交響詩」「不協和音」「クレパス画の展覧会」 電力ホー

ル 主宰 千尋洋子

○七月十五日 ART23シアター 第二回公演 コンテ

ンポラリーダンス「臙臙―Rou Rou」 出演 林あざみ

桜井ことの ユニット代表 愛和気 能―BOX

○七月二十日 第八回ダンスフェスティバルin仙台 若林区

文化センターホール

○八月十二日 佐取純子モダンバレエスタジオ 創作舞踊公

演 「心の伏流水―拈華微笑」 日本舞踊家中川雅寛さん、本

田椋さんらも出演。 仙台市宮城野区文化センターパトナシ

アター

○九月十六日 「仙台大衆舞踊団2019―アバンギャルド」

ジャズやヒップホップなど二十曲以上のダンスを披露。イズ

ミティ21 Ra a―Ken代表 木村由美子

○九月二十二日 エトワールバレエ館 第二十四回 ガラ・

コンサート 「ヴァリアシオン作品集」「海賊より花園」「セ

ブンフェアリーからの贈り物」他 広瀬文化センターホール

代表 川村美佐子

○十月二十七日 第四十五回 なとり文化芸術祭 仙台ノイ

エタンツ研究所 振付千尋洋子「ちびっこ忍者」他五曲、裕

バレエアクト「エスメラルダのVa」他六曲、クレールバレ

エアトリエ 振付高橋厚子「ドン・キホーテよりディベルティ

スマン」三団体が個性豊かな作品を披露した。名取市文化会

館大ホール

○十一月三日 第四十九回たいわ町民文化祭 「ガチャガ

チャバンド」 まほろばホール 振付者 引地由美

○十一月三日 第三十八回 仙台市泉区民文化祭「ひらひら

ひら」他 振付者 平多浩子、平多真汐、平多由美

○十一月七日 Co. 山田うん2019年ツアー「話のない

物語」ダンス公演 日立システムズホール仙台シアターホー

ル

○十一月十五日 宮城県洋舞団体連合会 第五十回洋舞公演
石巻バレエ研究所、さくらモダンバレエスクール、佐取純子
モダンバレエスタジオ、仙台ノイエタンツ研究所、S o K i
Ballet International、藤井サト子バ
レエ研究所、仙台すずめ踊り伊達の舞の七団体が合同作品「遙
かなる道を行く」を発表。台本・演出 千尋洋子、祝舞六曲、
招待作品 太前裕太郎、第十四回ダンスコンペティション in
仙台2019 各部門第一位受賞作品六曲が披露された。東
京エレクトロンホール宮城大ホール

○十一月十七日 裕バレエアクト 第二十六回発表会 「コ
ンサート」「エスメラルダ」他 名取市文化会館大ホール

県外組織団体の公演

○二月二日 ロシア最古のバレエ学校、国立ワガノワ・バレ
エ・アカデミーによる公演「くるみ割り人形」二百八十周年
を記念し、約百人が来日。九歳から十九歳の生徒が、みずみ
ずしい踊りを披露した。イズミティ21

○三月九日〜二十四日 三陸国際芸術祭が開幕し、インドネ
シアのジャワ島に伝わる民族芸能ジャティランや現代ダンス
が上演された。

○三月十九日 世界的バレエダンサー、熊川哲也が芸術監督

を務めるKバレエカンパニーの「カルメン」仙台公演。オペ
ラの名作を熊川の演出振付でバレエ作品として描いたもの。
プリンシパルは宮尾俊太郎・中村祥子が演じた。人間のはか
なさ、人間の根源的な気持ちが詰まっている。表現力や演技
力が問われる名作を心から感じる公演だった。東京エレクト
ロンホール宮城

○六月二十七日 韓国のダンスチーム「SDG CREW」
公演 K・POPやLED TRON DANCEなど映像
や光と融合した息の合ったパフォーマンスに盛り上がりを見
せた。日韓友好を目的に駐仙台韓国総領事館が企画 ライブ
ホール仙台ギグス

○八月十七日 高校ダンスの強豪、世界大会で優勝経験のあ
る福岡大付属若葉高が東日本大震災の被災地に勇気を与えよ
うと岩手、宮城、福島の一県で踊りを披露してきた。今回は
部員三十七人と卒業生十二人が出演、山元町には八年連続出
演。協力した地域づくり団体代表 吉田和子 山元町立坂元
中学校

○九月二十八日 「変貌する美」英国王立音楽アカデミーの
エドナ・ステルン教授のピアノに合わせて、パリ・オペラ座
バレエ団エトワールを務めた世界的ダンサーのアニエス・ル
テステュさんが六曲をオムニバス形式で踊る。加えて、衣裳
デザイナーとしても才能を発揮し、指導など多彩な活動をす

る。他オペラ座のダンサーら五人がクラシックやコンテンポラリーを振り付けた。日本ツアーとして札幌、多賀城、岐阜で公演。多賀城市民会館大ホール

○十月六日 新作和楽劇「黒白の浦島」多賀・永遠の祈り。伝統芸能継承者が一堂に集結。中川雅寛、浅野祥、Atoma、佐取純子、他 多賀城市民会館大ホール

○十二月二十三日 「くるみ割り人形」キエフ・バレエ 新時代を担うきらめく若手ダンサーがクリスマスのファンタジーに新たな風をふきこむ。東京エレクトロンホール宮城

コンクール（県内）

○二月二十三日～二十四日 第十四回ダンスコンペティションin仙台2019、日立システムズホール仙台シアターホール「クラシック」百七十八曲「モダンダンス」九十一曲。いずれも全国対象。審査員長・山野博大。共催・宮城県洋舞団体連合会 会長・佐東悦子

○三月二十六日～二十八日 第十四回ALL NIPPON D.A.T.E. クラシックバレエコンペティションMIYAGI（通称・伊達コンペティション 全国対象）日立システムズホール仙台シアターホール。参加者二百四十六名 審査委員長・ローランド・ヤーネス（ミルウォーキーバレエスクール・MBIIカンパニーディレクター）実行委員長・

高橋厚子

○四月二日 第六回NBAジュニアバレエコンクール（全国対象）日立システムズホール仙台シアターホール。参加者二百五十三名 主催 NPO法人 NBAバレエ団
○七月二十日 第十二回日本高校ダンス部選手権 東北大会 東京エレクトロンホール宮城（全国大会は八月十五日～十六日 パシフィコ横浜）

団体（県内・県外）

★第十二回日本高校ダンス部選手権 東北大会 十三人以上で演技するビッグクラスで優勝 古川工 準優勝 仙台商二～十二人のスモールクラスで優勝 仙台城南 準優勝 明成が全国大会の切符を手にした。

★第十二回日本高校ダンス部選手権 バトル大会 東日本大会 三人一チームで交互に演技する「スリー・オン・スリー」仙台城南 第三位（十二月二十六日）板橋区立文化会館

★芸術祭賞 十二月二十六日 東京バレエ団は「東京バレエ団2019 勅使河原三郎／ベジャール／バランシン」の成果。地主薫バレエ団は公演「人魚姫」の成果で受賞した。

個人（県内）

★矢野文子さん 一九九〇年代スターダンサーズ・バレエ団

に所属し、自然素材風景と一体化した藍染めの衣装をまとい、仙台の野外ダンスの催しに数多く出演している。ヤノバレエスタジオ&アーツ 主宰

★下永小百合さん 日本バレエ協会東北支部バレエコンクール小学四～六年が対象第二部で第一位。エヴァ・エフドキモワ記念「エデュケーション・バレエ・コンペティション・プレパトリー」クラシック児童の部門第二位。将来の夢は海外でプロになること（カトルカールバレエスタジオ所属）

★吉田明花さん ALL NIPPON D. A. T. E. クラシックバレエコンペティションMIYAGI第一位。伯楽星カップゲーリンストックバレエコンペティション第一位。英国ロイヤルバレエスクール短期留学。全国ジュニアバレエコンクールジャパングランプリ第二位。フルスカラシップ賞でドイツの名門ジヨンクランコバレエス



Kバレエカンパニーにて
吉田明花



吉田明花ソロ

クール一年半留学。クラシックバレエに必要な恵まれたプロポジションのダンサーで、世界的バレエダンサー熊川哲也が芸術監督を務めるKバレエカンパニー所属、プロとして活躍している。（クレールバレエアトリエ出身）

★刈谷円香さん ALL NIPPON D. A. T. E. クラシックバレエコンペティションMIYAGI第一位。米国のコンテスト銀賞を受賞し奨学制度でドイツに留学後、スイスの名門チューリヒバレエ団に入団。現在、世界屈指のオランダのコンテンポラリーダンスカンパニー「ネザーランド・ダンス・シアター（NDT）」所属。感性と人間性を磨き表現の幅を広げたいと意欲をみせ、今季は欧米や台湾、日本と世界ツアーに参加し、プロとして活躍している。（エトワールバレエ館出身）

★鯨井謙太郎さん 文化や芸術の分野で優れた功績を挙げた個人の表彰で、県芸術選奨新人賞を受賞した。十一月十二日に県庁で受賞式が行われた。

個人（県外）

★第六十回 毎日芸術賞 一月二十五日 演出振付家で舞踊家の金森譲さんが舞台「Mirroring Memories」などで音楽I部門を受賞した。

★若手バレエダンサーの登竜門、第四十七回ローザンヌ国際

バレエコンクールの最終選考が、二月九日スイス西部ローザンヌで行われた。佐々木須弥奈さん（大阪市出身、スイス留学中）第三位に、脇塚優さん（大阪出身、ハンガリー留学中）第四位に、住山美桜さん（東京都出身、スイス留学中）第八位に入賞した。入賞者は世界の名門バレエ学校などで一年間の研修を受けられるほか、生活援助金も支給される。

一九七三年に第一回が開催された同コンクールは、世界的バレエダンサーの熊川哲也さんや吉田都さんから数多くの日本人プロダンサーを輩出してきたことでも知られている。審査委員を務めたバレリーナ吉田都さんは、日本人のダンサーは世界レベルをつかんでいる感じで素晴らしかった。本当に心強いと感動の言葉を述べていた。

★第六十九回芸術選奨 三月六日 文部科学大臣賞をバレエダンサーの小野絢子さんと舞踊家の篠原聖一さんが受賞した。

★若手バレエダンサーを対象にした国際コンクール「ユース・アメリカ・グランプリ（YAGP）」四月十九日米ニューヨークで発表された。九歳〜十一歳の男子部門で佐藤可惟さん（いわき市出身）第二位、ベルリンのバレエ学校の奨学金を得て一年間留学する。

洋舞界は若いダンサーの活躍する姿が年々頼もしく感じられる状況に、令和にそった先進的な舞台事業展開の活性化に

も努めたいものです。

（公益社団法人宮城県芸術協会 舞踊部長）
高橋厚子
たか はし あつ こ

日 舞

●宮城県の日本舞踊界の動向

本年度の（公社）日本舞踊協会宮城県支部の会員を中心とした舞踊家の活動のうち主な舞踊公演・舞踊会への出演は左記の通りであった。

◎（公社）日本舞踊協会宮城県支部六十周年記念の各流舞踊公演

◎若柳 政世・若柳 諒 主宰の「四十周年柳糸会」

◎新潟での国民文化祭「にいがた2019 日本舞踊の祭典」への参加

◎恒例の歳末たすけ合い各流舞踊大会

◎白石市で行われた若柳 梅京主宰のチャリティリサイタル
東京の舞踊会では

◎「東京水木会」に水木 歌泰が出演

◎「直派若柳流舞踊会」に若柳 梅京が出演

例年の事ながら各会員は、地道な日々の稽古で研鑽を積み、指導者は門弟への指導や各地での舞台出演など精力的に活動した。

内輪の開催で年鑑への記載は無いが各流儀の指導者は、それぞれの社中で技芸向上の為に内々の発表の場として、小ホールや公民館の和室、ホテルの宴会場などで正月の「踊り初め」や夏の「浴衣会」等を催している。他にも地域の行事、お祭りや敬老会などの催事へ積極的に参加出演し華やきを添え、地域に貢献すると共に日本舞踊の紹介に努めた。さらに伝統文化子供教室や外国人留学生を対象とした日本舞踊体験教室やワークショップを開催し、それぞれの場で活躍し地道な成果をあげている。

昨年度より宮城県芸術協会に入会した事も今後よい変化と効果をもたらすであろう。

●訃報

（公社）日本舞踊協会宮城県支部副支部長藤間 京緑師が九月五日逝去された。

京緑師は多くの門弟を育成し、長年（公社）日本舞踊協会宮城県支部役員として宮城県の舞踊界を牽引する指導者の一人だった。藤間流においても藤盛会東北支部の役員を歴任。

流儀の隆盛に寄与した。石巻市に昭和四十二年京緑会を設立。地元を心から愛し五十年以上の長きにわたり地域の文化、社会発展に尽力した。

京緑師の踊りには「華」があった。舞台上に登場すると、パツと花が咲いたような明るさと、江戸風の潔さ、存在感。そして繊細さがあつた。

いつも明るく、前向き、澆刺としていた京緑師であつたが、二十年程前から病を得て、病と闘い押し隠しながらの活躍だつた。

自らが主宰した「京緑会」は十八回開催し、昨年仙台電力ホールで催した「卒寿記念」が最後になつてしまつた。体調不調から「ご挨拶」のみの出演になつたが、楽屋で「次の会は踊るよ」と笑顔で話していた姿が忘れられない。

昭和五十八年には石巻市市制五十周年記念事業「カンタータ大いなる故郷石巻」の創作舞踊を振付けた。昭和六十二年の石巻川開き祭りでは「ザ・石巻パフォーマンス」を披露した。石巻の国際交流にも貢献し、石巻市と姉妹都市になつてゐるイタリアのチビタベッキア市、友好都市になつてゐる中国・温州市などで日本舞踊を披露した。

石巻市への数々の功績に平成十四年には市政功労賞を受賞してゐる。

特別養護老人ホームでの慰問にも取り組み、東日本大震災

後は石巻の文化復興のためチャリティー公演を開催するなど、日本舞踊を通じて地元にも多大なる貢献をした。

まだまだお元気に華のある舞台を見せて欲しかったし、豊富な経験で後進を導いて貰いたかつた。京緑師の芸と精神はご令嬢の藤間梶師と愛弟子に引き継がれていく事であろう。藤間京緑師のご冥福をお祈りすると共にこれまでのご功績に感謝申し上げます。

●日本舞踊を取り巻く危機的状況

日本舞踊を取り巻く環境は、益々拍車をかけて厳しく深刻になつてゐる。

急速な高齢化と少子化が進み『始める人』より『やめる人』が多い。子供や若手のお弟子さん、新規の入会希望者は貴重である。

そして、まず生活があつての文化である。オリンピックやインバウンドの恩恵は大都市ばかりで地方では好景気の実感乏しい。非正規雇用などによる所得格差、核家族化に共働きなど生活環境の多様化は、日本舞踊のような文化を嗜み、味わうには逆境の時代である。

世の中の方にとって日本舞踊は今や『別世界の異文化』になつてしまつた。社会の構造の大きな変化、生活習慣や価値観の変化、学校教育により、『誰もが知つていた身近な芸能』

が『敷居の高い近づきたい芸能』になってしまった。

私事だが、私の娘が小学校の新学期、担任になった先生に自己紹介で「歌舞伎が好きです」「日本舞踊を習っています」と言ったところ、先生は妻に「歌舞伎や日本舞踊は全くわからないので、これから勉強します」と仰ったそう。御多用の中、生徒の為に書籍やインターネットで勉強しよう、調べようとして下さった先生には有難く頭が下がる。と同時にやはり日本舞踊は一般に馴染みが薄いことを実感した。

なぜ日本の文化であるにも関わらず、日本舞踊が多く日本人から疎遠なものになってしまったのだろうか。

生活習慣や社会構造の劇的変化もあるが今まで日本の伝統芸能が学校教育で取り上げてこられなかったのも、日本舞踊に対する敷居を上げた原因だろう。音楽の授業でも西洋音楽は勉強し演奏するが、長唄、清元、常磐津、義太夫などは詳しく取り上げて来られなかった。

またメディアの影響力の大きい昨今、テレビでの舞踊・邦楽番組はNHK教育で深夜に一番組。舞台中継も同様である。テレビで触れる機会すら限定されている。

日本舞踊は昭和の高度成長期から急速に触れる機会、馴染む機会を無くしてしまった。

それでいて、芸術文化だ、人間国宝だ、と難しく近寄りがたいイメージになっている。

このような難しい環境の中で、宮城県の舞踊協会会員各位には、日本舞踊界を未来に残し継承していく為にはどうしたらよいか、より一層の取組みをお願いしたい。

知恵と実行力を駆使して『日本舞踊の文化を守り、伝えてゆく』為に協会宮城県支部として流派を越えての行動に期待したい。

●東京への一極集中

東京まで新幹線で一時間半の便利さは文化の東京一極集中に拍車を掛けている。

交通の利便性の進化は、利もあるが、地方から大都市へ、人、物、金を流出させてしまう諸刃の剣である。そして文化が入ってこなくなる。

どんどん東京が近く便利になり「東京へ見に行く」「東京へ習いに行く」「東京で買う」が当たり前になっている。

文化の東京集中への対策と県の文化向上を図る為の具体的な施策を図り、官民あげて早実行する事が急務である。

●県民会館・発表・活動の「場」の必要性

老朽化した県民会館の移転、建て直しが大きな話題になっている。舞踊協会会員から新県民会館が日本舞踊に適したホールになるよう要望した話を聞いた。『宮城県には歌舞伎

や日本舞踊に適した会館、ホールが無い』と見る側、演ずる側双方より言われている。是非とも宮城県に日本の伝統文化を上演するに相応しい、花道やセリなどの舞台機構を設備し、客席やロビーに華やぎのあるホールの建設を望みたい。東京への文化と消費の流出を止めるためにも『場』は必要である。新しい県民会館が県外からも足を運んで貰えるような日本舞踊の『発表の場』『シンボルとなる拠点』となり宮城県の舞踊文化発表の『場』となることを祈念する。

●宮城県内外での舞踊公演の動向

◎【東京都】直派若柳流舞踊会

令和元年五月四日

東京都 国立大劇場

清元 お祭り 若柳 梅京

流祖若柳寿慶五十回忌と前理事長若柳吉駒三回忌追善の舞踊会で若柳梅京が粋な芸者姿で「清元 お祭り」を踊る。山王様の祭礼にほろ酔い機嫌の芸者が若い者を手玉に取りながらの、引き物づくし、木遣り、所作ダテと華やかな舞台。

◎【仙台市】（公社）日本舞踊協会宮城県支部六十周年記念

各流舞踊公演

令和元年五月二十六日

仙台 電力ホール

清元 保名 特別出演 水木 佑歌

清元 船頭 水木 歌泰

長唄 春秋伊達模様 花柳 雅好 他

あやめ浴衣 藤間 寿和枝

雨の四季 水木 歌惣

俄獅子 若柳 梅京

地唄 浪花十二月 吉村 花照

他 計十九番

二年に一度の（公社）日本舞踊協会宮城県支部主催の各流舞踊公演が支部六十周年を記念し、東京から東京水木会理事 長 水木 佑歌を迎え、青葉繁る好季に盛大に開催された。

支部役員の見巧者を納得させる芸から若手の華やかな舞台まで、演目も変化に富み、それぞれの流儀の特徴を見せながらの公演だった。

長唄、清元、お囃子には現在活躍中の実力派を揃え、舞踊はもちろんのこ



各流舞踊公演 春秋伊達模様

と地方（じかた・舞踊の伴奏音楽）の演奏も聴き応えがあり、目にも耳にも楽しめた。

◎【白石市】第十回若柳梅京華舞台

令和元年九月二十八日

白石「碧水園」能楽堂

会主 若柳 梅京

地元白石はじめ県内各地は言うに及ばず海外でも活躍している若柳梅京が碧水園の能舞台で十回目のチャリテリサイタルを開催した。梅京は日頃から白石市の文化向上発展に参画し、地元小学生に継続的に日本舞踊を体験させるなど伝統文化の啓蒙活動にも力を入れている。それだけに会場は超満員。梅京の舞台を待ち焦がれる観客の熱気の中、今回は「長唄 新曲浦島」と「長唄 娘道成寺」の二題を披露。海を描写した立役の舞踊新曲浦島と様々な恋の姿を踊る女形舞踊の代表作の道成寺と性格の違う作品を見事に演じわけた。二曲の間にゲストとしてシャンソン界の重鎮かいやま由起が出演。感情豊かな歌声に酔った。



娘道成寺 若柳梅京

◎【新潟県】国民文化祭 日本舞踊の祭典

令和元年十一月十日

新潟県民会館 大ホール

長唄 春秋伊達模様 振付 水木 歌泰

日本舞踊協会宮城県支部

花柳 雅好

藤間 寿和枝

水木 歌惣

吉村 花照

水木 和歌那

水木 歌那夕

若柳 梅京

新潟県で開催された国民文化祭・日本舞踊の祭典において宮城県支部から花柳雅好

・藤間寿和枝・水木歌惣・吉村花照

・水木和歌那・水木歌那夕・若柳梅京

が代表して出演。

水木歌泰の振付により、三代藩主綱宗と三浦屋高尾太夫からはじまり宮城の誇る日本三景松島、瑞巖寺、灯籠流し、塩竈の藻塩焼。伊達政宗の心などを読み込んだ「常磐津 松島」を素踊



国民文化祭 春秋伊達模様

りで披露した。前割れのかつらに後見帯での宮城らしい演目、格調高い踊りは好評を博した。

◎【仙台市】 四十周年記念 柳糸会発表会

令和元年十一月十日

仙台 電力ホール

会主 若柳 政世

若柳 諒

長 唄 松の翁 特別出演 若柳 宗寿

鏡獅子 会主 若柳 諒

娘道成寺 若柳 喜世華

藤娘 若柳 政子

清 元 文売り 若柳 政青

鳥刺し 会主 若柳 政世 他計二十一番

正派若柳流の若柳政世・若柳諒親子が日本舞踊と長唄の演奏会「柳糸会四十周年記念発表会」を開催した。

会の収益の一部を東北の低肺患者のサークル「白鳥会」に寄付するチャリティ公演。

若柳政世は「杵屋勝澄弥」として



鳥刺し 若柳政世

長唄の指導者としても活躍。正派若柳流からは代表の若柳宗寿が、長唄杵勝会からは理事長で人間国宝の杵屋勝国が出演して花を添えた。今回三名の門弟が新師範・新名取となり披露された。会主はボランティアで子供に踊りと三味線を教えており、子供達の日頃のお稽古の成果発表に客席から惜しめない拍手が贈られた。

会主若柳諒は杵屋勝国の立三味線で鏡獅子を格調高く踊り、若柳政世は役の性根を見事に表現した素踊りで鳥刺しを軽妙洒脱に披露した。

◎【仙台市】 歳末たすけ合い

第五十七回各流舞踊大会

令和元年十二月一日

仙台 電力ホール

水木歌泰社中「松の緑」「汐汲」・藤

間京緑社中「六玉川」・吉村花照社中

「大漁唄い込み」「新相馬節」「福寿草」・

花柳登代尋社中「風雪」「山中」・藤間

勘そめ社中「蓬萊」「胡蝶の舞」

他計三十社中出演

二部構成での上演。慌ただしい師走



歳末たすけ合い 花柳登代尋社中

の休日に舞台も客席も和やかな雰囲気の中での上演。収益の一部が「NHK歳末たすけ合い」と「宮城県社会福祉基金」「仙台市社会福祉協議会」へ贈呈された。



歳末たすけ合い ごあいさつ

（日舞名取・歌舞伎大向弥生会副会長）
大須賀豊

茶道

平成三十一年四月、新しい元号「令和」が発表され、五月一日、新天皇陛下は「即位後朝見の儀」に臨まれ、新しい元号が始まった。

千利休が生まれた「大永」の元号から数えて四十九番目の元号である。利休没後四百三十年を迎える。利休の名言「一期一会」の精神は今も受け継がれている。

今年も各流派、伝統を守りつつ活動を行った。幼稚園児・小学生・中学生・高校生等を対象としたお茶会も行われた。お茶人口が減少している最近、若い人達に興味を持ってもらう事はとても大切である。

NHK連続テレビ小説「スカーレット」では、信楽焼の女流陶芸家を取り上げている。作陶の難しさが描かれており、何気なく使っている茶道具を、改めて見直す良い機会を得た。利休時代からの茶道具が、今も保存され、展示又は茶会で使われているのは、伝統文化を守っている茶道ならではの強みであろう。この文化を次世代へ受け継ぐのが私達の使命である。

第二十三回社の都大茶会

宮城県芸術協会茶道部（加入十二流派）と河北新報社との共催の「第二十三回社の都大茶会」が五月二十五日、二十三日の両日、勾当台公園にて開催された。

二十五日（土）は裏千家・表千家・煎茶道三彩流・大日本茶道学会・玉川遠州流・煎茶文雅静庵流・武者小路千家

二十六日（日）は表千家・江戸

千家・石州清水流・宗偏流・織田

流煎茶道・遠州流茶道

青空が広がり夏日となった両日、園内は大勢の人（両日で約八千五百人）で賑わい、中には親子連れや外国人観光客もあり、おいしい和菓子と抹茶を楽しむに味わっていた。



第二十三回社の都大茶会
(河北新報社提供)

第五十六回宮城県芸術祭茶会〜結いを感じて〜

十月十三日（日）二十日（日）二十七日（日）の三週にわ

たつて、輪王寺の半杓庵・隠寮・書院にて、十二流派により開催された。毎年の事ながら大勢の客で賑わった。

十月十三日(日)は、前日まで台風十九号が仙台を直撃、悪天候の中での開催であり、席主の先生方の御苦勞は計り知れなかった。

第十七回奉祝鹽竈神社観桜茶会

天皇陛下御即位元年五月三日(金)に鹽竈神社に於いて、五流派(表千家・裏千家・大日本茶道学会・玉川遠州流・織田流)により開催された。天皇陛下御即位元号ということも重なり、どの席も満席で、何席も待ちながらであったが楽しむことが出来た。

日台中高生茶会の場で交流(仙台白百合学園)

六月四日、台湾の国立台南家齊高級中学の生徒七十一名と教員が、日本の文化やマナーを学ぶ教育旅行の一環で、仙台白百合学園中・高校を訪れ、白百合学園高茶道部の生徒の手ほどきを受け、茶を点てる一連の所作を体験、交流を深めた。



日台中高生茶の湯で交流
(河北新報社提供)

伝統文化講演会(伊達の釜に触れる)

八月二十五日、茶道裏千家淡交会宮城青年部主催による講演会が、仙台迎賓館斎苑に於いて開催された。講師は江田蕙氏(天命鑄物師・伊達藩御用鑄物師二十三代目)であった。「茶の湯釜と金工―鑑賞・取扱い―」と題し、釜の取扱いの要点等を話して頂き、鑑賞では和銃釜をはじめ講師の作品が展示された。一般的に釜には手を触れないようにと言われているが、和銃釜は例外で会場で実際に手を触れることが出来た。

茶の湯文化にふれる市民講座

『山上宗二記』をよむ

九月十四日、表千家同門会宮城支部主催の講座が、仙台市福祉プラザに於いて開催された。講師は竹内順一氏(東京藝術大学名誉教授)である。①茶人としての宗二 ②『山上宗二記』の種類、一通りお話を頂いたあと、『山上宗二記』記載道具を映像により、御説明頂いた。大変貴重な講座であった。



茶の湯文化にふれる市民講座
『山上宗二記』をよむ

子ども茶会の開催（白石茶道子ども教室主催）

十一月十日、碧水園にて行われた。茶道子ども教室に通う小学生や幼稚園児二十七名が緊張した面持ちでお茶をたて、保護者ら約百七十人に振る舞った。子ども教室では五月から月二回、年齢や経験に応じて教えている。

表彰

平成三十年度

地域文化功労者文部科学大臣表彰

高橋威夫（威仙）Ⅱ芸術文化

令和元年度

宮城県芸術協会功績者表彰

針生宗江（表千家）、三浦香祥・三浦緑風（煎茶道三彩流）、阿部妙榮・大槻守哲・関口伸子・中川守京（武者小路千家）以上七名

宮城県文化の日表彰（教育文化功労賞）

朝比奈南樹（織田流煎茶道）

心よりお祝い申し上げます。



子ども茶会の開催
（河北新報社提供）

主な茶会と関連事項

二月	三日	月釜（表千家）	（緑水庵）
		佐々木宏子	
		玉川遠州流仙台支部初釜総会	
三月	三日	月釜（裏千家）	（瑞鳳寺）
		佐藤宗博	
		月釜（裏千家）	（輪王寺）
		富澤宗秀・大内宗久	
		月釜（表千家）	（緑水庵）
		松崎明子	
	十七日	月釜（裏千家）	（瑞鳳寺）
		岡崎宗豊	
四月	七日	月釜（裏千家）	（輪王寺）
		児玉宗睦・今野宗智	
		月釜（表千家）	（緑水庵）
		村上幸子	
	十四日	石州清水流道閑総会	（川内お家元邸）
	二十一日	月釜（裏千家）	（瑞鳳寺）
		星宗祥・菅野宗悠	
	二十九日	とよま茶会	（遠山之里外）

裏千家淡交会宮城青年部有志

裏千家宮城学校茶道登米高校茶華道部

裏千家伝統文化茶道親子教室

五月

三日

第十七回鹽竈神社觀桜茶会

(鹽竈神社境内)

表千家・裏千家・大日本茶道学会・玉川

遠州流・織田流・表千家宮城県青年部

五日

月釜(裏千家)

(輪王寺)

篠原宗由・佐藤宗智

月釜(表千家)

(緑水庵)

小柴久子

十二日

しばた茶会(裏千家)

(しばたの郷土館)

樋口宗正・近藤宗初・塚本宗喜

二十三日

月釜(裏千家)

(瑞鳳寺)

細谷宗多・小野宗恵

二十五日

第二十三回「杜の都大茶会」(1)

(勾当台公園)

裏千家・表千家

煎茶道三彩流・大日本茶道学会

玉川遠州流・煎茶文雅静庵流

二十六日

第二十三回「杜の都大茶会」(2)

(勾当台公園)

表千家・江戸千家

石州清水流・宗徧流

織田煎茶道・遠州流茶道

六月

二日

月釜(表千家)

(緑水庵)

松原ちづ子・秋田谷あつ子

五日

栄西忌(裏千家)

(瑞鳳寺)

裏千家淡交会宮城支部(濃茶)

梶原宗津(薄茶)

十六日

月釜(裏千家)

(瑞鳳寺)

猪股宗鶴・嵯峨宗育

大日本茶道学会仙台支部創立六十周年記念

式典・講演会

七月

七日

月釜(裏千家)

(輪王寺)

小野宗智

月釜(表千家)

(緑水庵)

松浦美菜子

十一日

第八回全国やきものフェア

(夢メッセみやぎ)

表千家

会員一同

大日本茶道学会

相澤仙静

十二日

江戸千家

伊藤宗圭

十三日

十四日 武者小路千家 安並妙美

十五日 裏千家 大和田宗嬌

二十一日 月釜（裏千家）（瑞鳳寺）

鎌田宗州

八月 四日 連坊チャリティ七夕茶会

江戸千家・連坊商興会

（連坊コミュニティセンター）

七夕茶会（表千家）（六幽庵）

石田邦子・首藤律

六・七日 仙台七夕茶会（裏千家）

（仙台市ガス局ショールーム）

裏千家淡交会宮城支部

宮城青年部・宮城学校茶道

二十五日 伝統文化講演会「伊達の釜に触れる」

（迎賓館齋苑）

裏千家淡交会宮城青年部

九月 一日 月釜（裏千家）（輪王寺）

佐藤宗秀

七日 仙台城南高等学校文化祭（玉川遠州流）

吉田晋荷

八日 一番町ストリート茶会（裏千家）

裏千家淡交会宮城青年部

一番町ストリート茶会（表千家）

表千家宮城県青年部

十四日 茶の湯文化にふれる市民講座

「山上宗二記」をよむ（表千家）

（仙台市福祉プラザ）

萩祭り（表千家）

表千家教授者会（唐澤）（仙台市野草園）

十五日 月釜（裏千家）（瑞鳳寺）

庄子宗美・鈴木宗良

玉川遠州流仙台支部六十五周年記念茶会

（仙庵・茂ヶ崎荘）

織田流明徳会献茶式

一番町ストリート茶会（表千家）

二十一日 萩祭り（織田流煎茶道）

（仙台市野草園）

二十七日 台原老人福祉センター祭茶会（遠州流）

十月 五日 鹽竈神社献茶式（裏千家）

池田宗容・大沼宗律

六日 月釜（表千家）（緑水庵）

山田せい子・早坂柳子

十三日 第五十六回宮城県芸術祭茶会（輪王寺）

裏千家 岡崎宗豊

石州清水流 清水道玄

煎茶道三彩流 星千丈

武者小路千家 若林守有

二十日 第五十六回宮城県芸術祭茶会 (輪王寺)

宗徧流 菅原宗玉

玉川遠州流 渡邊晋祥

大日本茶道学会 相澤仙静

織田流煎茶道 朝比奈南樹

二十七日 第五十六回宮城県芸術祭茶会 (輪王寺)

表千家 千葉宗正

江戸千家 郷古宗裕

遠州流茶道 高橋宗敬

煎茶文雅静庵流 有川静岳

十一月 三日 月釜 (裏千家) (輪王寺)

大和田宗嬌

月釜 (表千家) (緑水庵)

早坂教子

しばた茶会 (しばたの郷土館)

裏千家 高橋宗会・猪股宗鶴

玉川遠州流 伏見晋冲

泉区民文化祭茶会 (遠州流)

十日 煎茶道三彩流三世家元星悠丈追悼茶会

十七日 月釜 (裏千家) (瑞鳳寺)

佐藤宗寿

石州公忌二代道閑忌献茶式

二十一日 第五十六回宮城県芸術祭表彰式 (川内お家元邸)

(ホテルメトロポリタン仙台)

十二月 八日 宗徧流義士茶会 (輪王寺)

菅原宗玉

十四日 年納め茶会 (玉川遠州流) (青峰堂)

渡邊晋祥

十五日 宗旦忌・茶筌供養 (裏千家) (瑞鳳寺)

裏千家淡交会宮城支部 (濃茶)

川村宗津 (薄茶)

児玉宗睦 (裏千家宮城支部常任幹事)

華道

平成も三十一年の四月で終わり、新元号となった令和元年五月、風薫る杜の都でのいけばなイベントの先陣を切って、公益財団法人日本いけばな芸術協会が主催する「第七回 日本いけばな芸術東北展」が仙台市青葉区の百貨店「藤崎」にて開催された。

前回、第六回の日本いけばな芸術東北展が開催されたのは平成二十二年の六月で、それから九年が経つ。

その間にあの「東日本大震災」が平成二十三年三月十一日に起こり、多くの東北人が被災した事もあり、今回の開催も時期尚早ではないかと私自身も悩んだ。

しかし震災から八年が経ち復興途上ではあるものの、全国の方に東北の復興を華展という形でご報告したいという思いが勝ち、この華展を引き受けることにした。

私は副実行委員長という大役を任され、丹野霞園実行委員長のご指導の下、実行委員会を組織し華展に臨むこととなった。実行委員会には東北六県の協会会員の中から主だった先生方が選ばれた。

季節の花で会場を彩り、来場者の方に楽しんでもらいたい、

そう願った。と同時に、もう一つの大きなテーマを掲げることにした。

それは「東日本大震災」を経験した私達が日本中いや世界中から受けた「恩」を、今、日本中で頻発する自然災害の中で苦しんでいる被災者の方々に「ここまで来たよ」「ここまですべて復活することが出来たよ」と伝えることで、あきらめない、不屈の気持ちを届けることが出来るのではないかと考えたのだ。

そこで一つの企画を立てた。

会場の一角で「東日本大震災復興応援イベント 未来の花を咲かせましょう」を開催したのである。

これは東日本大震災で被災された花き生産者と、生産された花の消費者を代表した我々華道家とが、震災後の花き産業についてトークし、また生産者にご持参いただいた花を生けるデモンストレーションを行い、来場者にもご覧いただくという企画であった。

五月十七日には名取市にある「宮城野バラ工房 梶農園」の丹野岳洋さんをお迎えし、震災当時の農園の状況や、ここ

まで八年間の苦勞、これからの抱負などを本部役員で小原流の工藤亜美先生と草月流の丹野霞園実行委員長が伺った。その後、丹野さんが栽培されたバラをそれぞれのテーマを込めて生け上げていった。

二十日は福島県川俣町で近畿大学の協力を受けアンスリウム栽培に取り組む「ポリエステル媒地活用推進組合」から富永直樹氏をお迎えした。

まず震災前後のことや、近畿大学から協力を受けたきつかけ（風評被害の克服）やポリエステル媒地でのアンスリウム栽培方法等をお話しいただいた。

その後、池坊の遠藤信月先生と本原遠州流の朴澤一草先生が富永氏の持参されたアンスリウムを生けた。遠藤先生は福島在住なのだが、池坊の伝統的な生け方「立華」の他に、ポリエステル媒地活用推進組合との出演交渉の際に、川俣町の道の駅で購入した「川俣シルクストール」をペットボトルの器に巻いて花器に拘らなくても素敵な作品が仕上げられることを見せてくれた。これには観覧者も大変喜び、大好評であった。

二十一日には宮城県石巻市でガーベラの生産に取り組むJAいしのまきガーベラ部会 部長西條弘悦氏とJAいしのまき農業協同組合営業部 桃生営農センターから神山豊土氏をお迎えし龍生派の三浦景舟先生と私西村一観とでお話を

伺った。西條氏からは、震災時ガーベラを生産していたビニールハウスには津波の被害こそ無かったものの、鉄骨がゆがむなど揺れの大きさを感じたこと、出荷出来ずに枯れていく花をただ摘んで処分していく無念さ、その花を被災者に届け供養の花にしてもらったことなどを話して頂いた。

また神山氏は流通と販売につなげるために大切にしていることとして、とても素晴らしい品質のガーベラを少しでも高く売り、生産者に還元できるように頑張っていきたいと力強く語ってくれた。その後三浦先生と私がデモンストラクションをしたのだが普段生けている輸入物のガーベラと桃生で生産されたガーベラの茎の太さや花の大きさなどの品質の違いに驚き、またその多種多様さにも大変驚いたのである。生け手としてとても良い経験が出来た。

そして三回のイベントにお呼びしたそれぞれの生産者さんへ共通の質問を投げかけた。

「今現在、全国で被災され苦しんでいる生産者の方々に声を掛けるとしたら？」の問いに「花の力を信じて頑張っている！我々も全国の皆からあの時にもらった恩を少しずつでも返していきたい。」異なる場所で異なる花を作っている皆さんその様にお答えくださったのはとても印象的だった。それは我々華道家も同じで、いけばなの力を信じ、これから誇りを胸に花を生け、東北から全国へ笑顔を届けていきたい

いと思いを強くした瞬間であった。

会場でトークを聞きながらハンカチで涙をおさえるお客さんもいて、少しフラッシュバックを心配もしたが、デモンストレーションになると大輪の笑顔の花を咲かせていたので、「この企画に意味はあったのだ！」と安堵と共に非常に嬉しかったのを覚えている。

この様に全国で被災に苦しむ方々へいけばなを通して少しでも笑顔が届けられるよう、これから活動していきたい。さて昨年は平成三十一年と令和元年、二つの年号のある年であったが、宮城県の華道界について更に振り返っていききたい。

平成三十一年二月二日から五日まで一般社団法人宮城県華道連盟 第七十八回春のいけばな展「宮城のはるが花ひらく」がせんだいメディアテークにて開催された。連盟所属の九流派百四十名の会員が出品・デモンストレーションも行い、早春の宮城に一足早い春を届けた。

四月十三日から十五日には平成最後の県内華展として龍生派 宮城県支部がいけばな展「春・華やかに」をせんだいメディアテークで開催した。毎回感心させられるのが作品の素晴らしさにマッチした会場の構成である。ただ作品を飾るだけではなく空間構成も作品の一部とする、その飽くなき探究心は見る者を楽しませる。見習いたいものである。

令和元年六月一日・二日には宮城県知事公館を会場に小原流仙台支部がみんなの花展「花の響」Part 2「未来へつなぐ道」が開催された。宮城県知事公館という会場チョイスにまず驚かされた。私自身足を踏み入れたのは初めてであったが、大きな門をくぐり公館に入ると立派な洋室に所狭しと素敵な作品が並んでいた。また奥に進むと和室が有りそこにはしっとり落ち着いた作品が飾られていた。普段は結婚式などもするという公館ではあるが、今回の華展で初めて足を踏み入れた方も多かっただろう。庭の木々に季節も感じ充実した華展で有った。

六月七日から十二日までせんだいメディアテークで草月流の宮城県支部草月いけばな展「花回廊」が開催された。なんと言っても出色は草月流家元勅使河原茜氏の超大作で、青竹を裂いた物を何本も使い、そこにふんだんにヤマボウシやドウダンツツジなど初夏を思わせる花材を合わせ、一作で幅十メートルを超えるダイナミックな作品。宮城でここまでの大作を拝見したのは初めてではないだろうか？素晴らしかった。併設展として「初めてのチャレンジ 私の花 第一線でご活躍の男子いけばな展」が開催されていた。これについては意欲は買うが、もう少し修業と研鑽の時間を掛け、作品の質を高めた方が一般会員作品との釣り合いが取れ、良かったのではないかと正直思う。今後に期待である。

十月十二日から十五日までせんだいメディアアテークを会場に「九十年の歩みをあしたへ繋ぐ」池坊仙台支部いけばな池坊展が開催された。今回は池坊仙台支部の創立九十周年を記念した華展で、折り悪しく台風十九号の直撃を受け開催自体が危ぶまれたが、それにも負けずに会場内には会員諸氏の気合の入った立花、生花、自由花の作品が展示されていた。華道人の心意気を見た気がした。

十月十九日から二十一日までせんだいメディアアテークを会場に本原遠州流のいけばな本原遠州流「秋華彩」が開催された。前週開催の池坊展に引き続き、こちらの秋華彩も台風二十号の影響を受け、色々と大変であったろうことは想像に難くないが、それでも会場を埋める秋の花々は「秋華彩」の名にふさわしい立派な華展であった。

自然と向き合い、自然の力を借りて成り立ついけばなではあるが、時にその自然が厳しい牙を剥くこともまま有る。それにも負けず華道に取り組む華道家の精神こそが宝で有り、後世につなげていかねばならない大切な「想い」なのだといつも以上に感じた平成三十一年と令和元年の一年であった。

西に村一観
(一般社団法人宮城県華道連盟 常務理事)



ガーベラ生産者とのトーク



ガーベラを生ける三浦景舟先生



アンズリウムを生ける
朴澤一草先生



石巻桃生ガーベラ部会の皆さんと作品の前で記念撮影

朴澤一堂 本原遠州流



池坊 小原光華、雪江美子、加藤初音 3人席

小原流 及川光富、倉田豐燿、鬼川光牙 3人席



西村一観 清泉古流



メディア芸術

令和元年、現代芸術に関して大きな話題となり衆目を集めたのは二〇一九年八月一日から十月十四日まで開催された「あいちトリエンナーレ2019」だろう。残念ながら芸術祭として内容が評価されたことによるものではなく、過剰なクレームや脅迫から一部の企画展が展示中止に追い込まれ、その後は、参加作家の展示辞退などを経て、文化庁の補助金不交付へと展開し社会問題化したことによる（文化庁の補助金は二〇二〇年三月に減額のうえで交付が決定した）。本稿では、あいちトリエンナーレの運営についての評価や、問題となった企画「表現の不自由展」についての是非を取り上げたいのではない。「メディア芸術部門」としての記載意図は、一連の騒動に、SNSをはじめとした現在の情報メディア環境が著しく影響したからである。オープンから三日目以上記の企画展を展示中止に追い込んだクレームの電話、通称「電凸」。それらの多くは、実際の展示を見ずになされた。SNSに掲載された一部の展示写真や感想を頼りに、当初のクレームの電話はなされている。展示された表現について、肯定的であれ否定的であれ、どのような感想を持つことも自由

だが、「見ていない」にも関わらず、他者を否定の渦に巻き込んでいくという事態が発生したのである。新聞であれテレビであれ、どのようなメディアでも、各々の形式によって伝達する情報は絞られ、欠落が発生することは致し方ない。その上で、受け手側には、情報の欠如が発信側の恣意性によるものかどうかを判断していく必要がある。ただし、そうしたメディアの読み解きが現実に反映されることは難しいのも事実である。また、マスメディアに対してSNSは、個人運用であり、発信前に組織や集団によるチェック機能を持たないメディアである。それゆえ組織的な恣意性を廃し、即応性や告発性という強みを持つが、逆に情報の正確性や信頼性は低くならざるを得ない。Twitterなどは一度に書き込める文字数は限られ、動画にしても数分でしかない。しかし、そのような圧縮率の高い情報が、同時的かつ反復的に発信されることで、結果的に信頼を勝ち得てしまうのである。無論、発信後に間違いが指摘されて修正されることも頻繁にある。そうした修正や上書きの容易さもSNSの特徴だが、それは翻って、発信段階での正確性がさほど求められないことのあらわ

れである。いま、わたしたちには、これまでのようなマスメディアへの批評精神とともに、SNSについて、新たな倫理としてのメディアリテラシーが求められている。

他方、展覧会は現実空間に一回性をともなうて展開するために、情報の伝播する範囲や速度を比べればSNSよりも圧倒的に弱いメディアだと言えるだろう。しかしながら、展覧会は情報の圧縮率が低く、その量は多い。そして、展示されたモノや作品は、内包する情報に対して、受け手の多様な解釈の可能性を許容するのである。情報として捉えようと、そうした受容体験の質の部分をも、個々の展覧会が作り上げていくわけである。端的には、情報濃度が薄く速いインターネット・メディアに対して、展覧会は、高濃度で遅く、しかも唯一性を伴うメディアだとすることができよう。その理解があれば、SNSにおける炎上騒ぎと、観賞行為の間には距離が置かれるはずであるが、受信数の変動が即時的に見てとれるSNSでは、劇場的に多数性を獲得していくダイナミズムの前に、真偽の境界も揺らぐのである。類似した状況は、東日本大震災以降、時折言われるような「風評被害」という言葉にも象徴されている。こちらの言葉は主に経済面で用いられることが多いが、もはやインターネットが、新聞やテレビなど旧来のメディアを自らのコンテンツとして包括する地位を得たことによって、風評の拡散を抑制することは困難で

ある。今回のあいちトリエンナーレの事例からは、現在の情報環境が、展示のような表現系との連関において、負の影響力を発揮しうることを記憶すべきだろう。

*

県下では、二〇一九年八月三日から九月二十九日にかけて「リボンアート・フェスティバル2019」が開催された。二〇一七年に続き二回目となる今回は、全体を七つのエリアに分割し、そのエリアごとに担当のキュレーターがついてテーマを設け企画展を展開するという構成である。本稿では、個別の作品について触れるのではなく、「エリア」として設定している場所性について触れてみたい。なかでも興味深かったのは、今回新たに鮎川の市街地を加えた「鮎川エリア」と、「網地島エリア」である。鮎川エリアは、美術家の島袋道浩がキュレーションし「目をこらす 耳をこらす」をテーマとした。島袋自身を含め六作家が参加している(吉増剛造、野口里佳、石川竜一、青葉市子、Yotta(木崎公隆+山脇弘道)、島袋道浩)。網地島では、ワタリウム美術館を主宰する和多利恵津子と和多利浩一がキュレーターを務め、「ネクスト・ユートピア」をテーマとした。網地島には十三作家(バリー・マッギー、ロイス・ワインバーガー、石毛健太、BENZ、ジョン・ルーリー、フィリップ・パレノ、アラン、伊藤存+青木陵子、梅田哲也、真鍋大度、持田敦子、浅野忠信、小宮麻吏

奈）が参加している。リボーンのように野外も含めた多様な場所で行う展示企画は、場所の特性が先に立ち、作品はその場所性によって大部分が決定される。作家の意思と場所性の緊張関係が展示に活力を生むのである。単に、作家が自由に使える広い空間であるとか、展示のしやすい室内性などを優先するならば、場所との緊張関係は発生しない。同時に表現する側は、仮に自らの主題や手法を確立していても、作品が設置される場所に応じて新たな開発が求められ、その対応力が問われるのである。また無論のこと、場所性には物理的な空間の性質だけではなく、歴史性や政治性も含まれる。それからサイト・スペシフィシティと対峙して制作や展示をするには、一定以上の時間を要し、作家にも運営者にも根気が必要となるだろう。今回のリボーンでは、そういった過程の濃淡が明確に作品にあらわれていた。特に、鮎川エリアや網地島エリアは、新規性と同時に、場所の特性も多様で色濃いために、向き合い方の差異はより鮮明である。その意味で、エリアごとにキュレーションをおこなった今回の方法は、作品の個性性よりも、リボーンが展開する石巻市という場所性を際立たせるうえでの確であったと言えるだろう。

さて他に、海に近い場所でのアート・イベントとして、七ヶ浜町の菖蒲田海水浴場にて「SEVENBEACH Light Up FES 2019 ～光のミチヒキ～」(二〇一九年九月十三日から十六日)

がおこなわれた。波にブラックライトをあてて青白く照らし出す「NIGHT WAVE」というプロジェクトを中心に、アートの展示や音楽のライブイベントが組み合わされたものだ。七ヶ浜地域の住民による実行委員会によってこのイベントは組織されているが、そのなかで展示については「潮風と未完」と名付けられ、関本欣哉と濱田直樹によってキュレーションされた。このような複合的なフェスティバルの場合、主となる企画以外は脇役となりがちである。また特に、音楽の公演と美術の展示を同一会場で組みあわせる場合、美術は音楽のための空間演出となってしまうことが多い。今回は、それも踏まえた上で、砂浜、屋外、日没後という、いずれも展示には不利と言える要件をプラスに働かせようとする実験的な試みだったと言えるだろう。展示には、青野文昭、磯崎未菜、荒物屋(白鳥大樹、千葉大)、APE TOPE(関本欣哉、中里広太)、佐々瞬、タノタイガ、すがわらじゅんいち、喜多直人らが参加した。それぞれ経験豊富な表現者であり、いずれも場所性を意識した的確な展示が実現していたように思われる。またタイトルに「未完」を謳うことで、今後の継続性や更新性が、展示の側から企画全体に対して示されていることも評価したい。

アート・フェスティバルが一般化し、国内各地で頻繁に開催されている今日、アートは政治や経済のキャンペーンとし

て用いられかねない。それらへ及ぼす効果は副次的なものでしかないが、主客転倒は容易に起きうるのである。そういった事態を避け、自律的にあり続けるために、企画者や表現者が、場所性にアクセスする基礎的なプロセスが、あらためて見直されるべきだろう。価値観の均一化を加速するSNS時代であればこそ。

*

九月末に卸町に、「スタジオ開墾」(運営…協同組合 仙台卸商センター)がオープンした。遊休倉庫が、作品制作や展示のためのスタジオとして開かれたのである。このスタジオは、仙台市と協同組合 仙台卸商センターによる協働事業「とうほくあきんどでいん塾」(企画運営…長内綾子、松井健太郎 現: So-So-LAB)の「環」として実施したプロジェクトの成果である。現在はディレクターをギャラリー・ターンアラウンド主宰の関本欣哉が務めている。ここで二〇一九年十一月九日から二十四日にかけて「どよん展 蒲生—over the—」が開催された。どよん(パク・ドヨン)は、ソウルに在住するメディア・アクティビストである。どよんは、震災以降、毎年仙台を訪れ、変わりゆく蒲生地域を写真や映像で記録してきた。今回の展示は、そのおよそ九年分の画像を映像インスタレーションとしたものである。映像の支持体としてビニールが天井から二重に吊るされ、そこに複数のプロ

ジェクターで風景がパノラマ状に映し出される。ビニールであるため、透過や反射によって映像ははつきりとは見えない。また、その内容も、なにげない蒲生の風景である。それらの風景がスライドショーで映し出される。特にBGMがつけられているわけでもなく、素朴で、むしろぶっきらぼうな印象すら与える展示である。しかし、卸町の街路を走る車や風の音など、環境音がこの映像のBGMだと語る彼には、メディアへの確かな理解を下敷きとした明確な狙いがある。この展示で彼は、作家の恣意性をビニールという素材にとどめ、映像としての技法的な演出を抑制することで、いつでも行けるはずの場所でありながら、たどり着けない過去でもある「蒲生」を空間内に渾然とあらわした。また映像の傍には仮設の屋台が設けられ、会期中はどよん本人が滞在して自ら焙煎したコーヒーを提供していた。どよんは、オブジェクトとしての「作品」を観賞させようとするのではなく、あくまでも記録に触れる「状況」を作り出そうとしている。日本語が堪能な彼とコーヒーを飲みつつ、蒲生の汽水域の変化を見ながら、わずかも語らうことこそ、どよんがこの展示で意図したことである。そうした対話的な行為が、倉庫を改装したスタジオ開墾の環境と相まってあたかも焚き火を囲むように自然におこなわれていた。

塩竈市の杉村淳美術館では、二〇一九年七月六日から八月

二十五日にかけて「閩—いき—を編む」と題した展覧会が開催された。この展覧会は若手アーティストの支援プログラムとして、公募によって選出された二名の作家の作品展である。今回は、是恒さくらと阿部明子が展示した。両者とも、主題も表現手法も異なるが、共通することは「ナラティビティ」を視覚的にあらわそうとする意思である。是恒は、捕鯨について各国・各地を調査し、聞き得た「語り」をテキストや刺繍によって空間内に配置した。阿部は、家族の記憶や継承について、亡き父が興味を持っていた和算と組み合わせる表現した。ナラティビティへの意識は、「閩」を「編む」という企画のタイトルにも見てとれる。微かに知覚できるような領域や事象を注視し、その観測結果を幾重にも編み込むことで、何某かの形態に結実しようという姿勢は、マスメディアやインターネット空間で声高に語られる単純化した社会の表層を、同じように表現が反復することで衆目を集めようとするものとは異なり、無音無声の領域が複層する実社会のあり様に迫ろうとするものである。この展覧会では、そういった趣旨に対して、両者ともにメディアウム／メディアの選択と手法が的確であったように思われる。そして、展示場所である杉村淳美術館の場所性や空間への理解が、インスタレーションとしての成功をもたらしていた。

ギャラリー・ターンアラウンドでは、二〇一九年十月

二十三日から十一月三日にかけて、菊池聡太郎の個展「喫茶荒地」が開催された。建築を学んだ菊池の表現手法は、意外にもパステルなどによるドローイングが中心である。それらの平面作品が、主題を補足するような建築的構造物をともなう空間内に配置されている。菊池のドローイングは技巧的に卓越しているが、そこに留まらず、主題に「荒地」を選択した着想が興味深い。都市化と経済活動、あるいは災害にともなう生まれる空き地は、概ね荒地と認識される様態となる。そうした空間について、菊池は紋切り型の社会批判をおこなうのではなく、むしろ肯定的に荒地を捉え、慈しもうとしている。社会構造が生み出す荒地は、わたしたちの心理的な空間にも同じように発生しているのだ。そして、内外から荒地を忌避し排除することで、ディストピアはより拡大していくのである。菊池は荒地の存在を許容しながら、内外の荒地を、他者とともに見つめるという対話的経験をもたらそうとしている。それは「喫茶」という名称にも明らかだろう。会期中は、荒地の植物の代名詞である背高泡立草のお茶が振る舞われていた。今後、人口の減少とともに、国内においては否応なく荒地が増え続けることだろう。忌避ではなく、そうあることを認めて包摂していく先にしか解決策も見出せないのである。

*

最後にマンガ表現について。宮城で活動する漫画家のいがらしみきおが、二〇一九年に作家生活四十周年を迎え、それを記念して二つの作品が新刊として発表された。一つは『こうずんさん』（あきは詩書工房）である。この作品は、せんだいメディアアテークで、二〇一五年に開催された企画展「物語りのかたち」で発表した作品を書籍化したものである。展覧会では、架空の郷土資料館がメディアアテークのギャラリー内に設けられた。その資料館は、同一の展示室が、少しずつ様相を変え、徐々に荒廃しながら反復されていくものである。この宮城の何処かに建てられたであろう資料館の目玉の展示物が、いがらしによるマンガ『こうずんさん』である。庚申信仰を題材としたこの物語は、人物の造形や展開がわずかに変化しながら、展示にあわせて繰り返される。マンガにおけるコマの反復表現は、いがらしが初期から用いる手法であるが、それを拡大し、酒癖の悪い暴力的な男がたどる顛末が何度も繰り返されることで、自業自得についての教条的な物語が、前世を引きずった因果応報のような無限の螺旋としてあらわされるのである。『こうずんさん』は小部数の限定出版であるが、展示物として制作された作品が書籍化されるというプロセスは、書籍から映像や展示など他のメディアに展開していく通常のマンガの歩みとは逆であるところも興味深い。

もう一つの作品『あなたのアソコ見せてください』（太田出版）は、そのタイトルが示すように性についての物語である。神秘性も象徴性も影が薄くなり、性は形式化され、商品としてライトアップされている、これはそうして暗闇を排除した現在の社会における性の探究の物語だ。ジョルジュ・バタイユが説いた死とエロスの極限への思索は、人間にとって根源的な主題である。また、性にまつわる事象は人間社会の規範を形作るものであって、正面から性を主題にすることは社会を問うことでもあろう。しかし、そうした表現は年々難しくなっているのが実際である。その意味でも、この作品は挑戦的であり、いがらしの集大成と言い得るのではないだろうか。人間の性は未分化な境界性を伴うにもかかわらず、合理性に基づいた線引きや区分によって社会は整えられ、その範疇を出て枠組みの限界域を確認することは秩序への侵犯であるとみなされる。無論、性については無制限に開放すべきではない。しかし、ポルノグラフィばかりが過剰になり、平然と消費されている状況にあって、芸術表現として倫理の現在形を問うことは、文明社会が「人間的」であるために必要であることは言うまでもないだろう。SNSでの簡略化された情報として、あるいはフェスティバルの出し物として、芸術表現がますます「アート・コンテンツ」化してく中で、この作品は、むしろポピュラーな表現系であるマンガによつ

て、社会の思考停止、あるいは囲い込み状況について問いを
投げかけた「メディア芸術」である。

(せんだいメディアテーク主任学芸員)

清^し

水^{みず}

建^{けん}

人^と



磯崎未菜《広場のうた # 稲城場所 2017》(「潮風と未完」展より) 写真: Naoto Kita



荒物屋《砂、光、実験》（「潮風と未完」展より）



スタジオ開墾の様子 写真：小泉俊幸



どよん「蒲生ー over there」展示風景



どよん「蒲生ー over there」展示風景



阿部明子《レウムノビレ》(「関-いき-を編む」展より)



是恒さくら「関-いき-を編む」展示風景



菊池聡太郎「喫茶 荒地」展示風景 写真：小岩 勉



菊池聡太郎「喫茶 荒地」展示風景 写真：小岩 勉



いがらしみきお『こうずんさん』
(あきは詩書工房、2019年)



いがらしみきお『あなたのアソコ見せてください』
(太田出版、2019年) © いがらしみきお／太田出版

広域文化団体の 文化活動記録の

(公社) 宮城県芸術協会
宮城県文化協会連絡協議会
(公社) 日本舞踊協会宮城県支部
宮城県吹奏楽連盟
宮城県合唱連盟
宮城県おかあさん合唱連盟
仙台三曲協会
宮城県能楽振興協会
宮城県洋舞団体連合会
宮城県歌人協会
宮城県俳句協会
宮城県川柳連盟
宮城県詩人会
(一社) 宮城県華道連盟
宮城県民藝協会
(公財) 日本民謡協会宮城県連合会
全国民謡連盟宮城県連合会
宮城県民謡道連合会
宮城県写真連盟
宮城県文化財友の会

県内の文化団体のうち二十団体を掲載。
(令和元年十二月三十一日現在)

■凡 例

- ①…………… 所在地
②…………… 電話番号
③…………… 代表者
④…………… 構成員数
⑤…………… 構成員の資格
⑥…………… 創立年月
⑦…………… 定期刊行物

公益社団法人 宮城県芸術協会

所 千九八〇—〇八〇二 仙台市青葉区二日町十六—一

二日町東急ビル五—B

電 〇二二—二六一—七〇五五

代 理事長 雫石 隆子

数 二千二百二十六名

格 正会員になるためには会員二名以上の推薦を受け、理事

会の承認を得なければならない

創 昭和三十九年五月

刊 機関誌「はなやま」(年四回発行)

「宮城県文芸年鑑」(年一回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

1/29~3/10 宮城県芸術協会 絵画部門 カメイ美術館

現運営委員等の「現在と過去」Ⅲ期

2/3 みやぎミュージックフェスタ 蔵王町ふるさと文化会館

2018 in ぎょう

5/18~19 絵画部スケッチ研修会 岩手県遠野・宮古方面

5/25~26 第二十三回杜の都大茶会 勾当台公園

6/12~16 東北・北海道交流写真展 コラッセふくしま

10/5 県民との美術交流・ギャラリートーク せんだいメディアアテーク

10/11~12/22 2019 和風文化祭 台南市総合文センター他

11/11~12/19 書道部による県内小中学校 県内小中学校十二校

への講師派遣事業

12/2~8 第六回定禅寺フォトコンテスト展 東京エレクトロンホール宮城

12/13~19 第五十六回宮城県芸術祭絵 東京エレクトロンホール宮城

画展受賞者作品展

〈第五十五回宮城県芸術祭〉

2/17 第三十九回音楽コンクール予選 日立システムズホール仙台

3/17 第三十九回音楽コンクール本選 日立システムズホール仙台

〈第五十六回宮城県芸術祭〉

9/20 開会式 せんだいメディアアテーク

9/22 テーマイベント「結い〜次代へ〜」 せんだいメディアアテーク

9/20~25 華道展 せんだいメディアアテーク

9/20~25 書道展 せんだいメディアアテーク

9/27~10/2 工芸展 せんだいメディアアテーク

9/27~10/2 写真展・写真公募展 せんだいメディアアテーク

9/27~10/2 絵画展(公募の部) せんだいメディアアテーク

9/27~10/2 彫刻展・彫刻公募展 せんだいメディアアテーク

9/29 受賞者によるガラコンサート 日立システムズホール仙台

10/2~3 文学散歩 秋田・横手方面

10/4~9 絵画展 せんだいメディアアテーク

10／13 長唄演奏会

19／13・20・27 茶会

トークネットホール仙台
輪王寺

10／15 「宮城県文芸年鑑」発行

10／26 文芸祭

東京エレクトロンホール宮城

11／8 音楽会

日立システムズホール仙台

11／26 表彰式

ホテルメトロポリタン仙台

宮城県文化協会連絡協議会

⑨ 千九八七—〇五一— 登米市迫町佐沼字中江二丁目六一—

登米市まちづくり推進部市民協働課内

⑩ 〇二二〇—二二—二二七三

⑪ 会長 鈴木 敬一

⑫ 六十二文化協会（約三万五千名）

⑬ 市町村（合併前）を単位とした文化・芸術協会

⑭ 昭和五十三年六月

⑮ 会報「くぐなり」（年一回発行）

宮城県文化協会構成の運営の状況「心の華」（二年に一回発行）

開催月日 催 事 名

場 所

10／26・27 第二十三回みやぎ県民文化祭 白石市文化体育活動センター

12／5・6 第四十回宮城県文化協会 南三陸ホテル観洋（ホワイトキューブ）

運営研修会

本会は、宮城県内の文化（芸術）協会相互の連絡調整を図り、その発展を助長するとともに、文化芸術活動を通じて県民文化の振興と向上に寄与することを目的とする団体です。加盟団体は六十二を数え、県内を七つのブロックに分けた「地域文化協会連絡協議会」も組織しています。

本会は二つの大きな事業を行っています。一つは、加盟団体が一堂に会して作品やステージを発表する「みやぎ県民文化祭」を持ち回りで開催しています。今年度は白石市文化体育活動センター（ホワイトキューブ）で二十三回目の開催となり、県内各地から推薦された芸術文化関係者による舞台や、展示品の発表を行いました。

もう一つは、「文化協会運営研修会」で、今年度は「平成の文化活動 令和の文化活動と運営」をテーマとして各協会の事例報告や意見交換をし、交流を図りました。今年度は南三陸ホテル観洋に百五十八人の会員が集い、協会が抱える課

題や目標などを話し合いました。

(会長 鈴木 敬二)

公益社団法人日本舞踊協会宮城県支部

所 千九八一—〇一二 宮城県利府町利府字八幡崎一〇八
(水木歌泰方)

電 〇二二—三五六一二三三九 (水木歌泰方)

代 支部長 水木 歌泰

数 二百二十七名

格 公益社団法人日本舞踊協会会員であるとともに宮城県支部会員(扇の会会員含む)、師範名取・普通名取であること

創 昭和三十五年十一月

開催月日 催 事 名 場 所

5/26 (公社)日本舞踊協会宮城県支部 仙台電力ホール

六十周年記念各流舞踊公演

11/10 第三十四回国民文化祭・新潟県民会館大ホール
にいがた2019

日本舞踊の祭典

12/1 歳末たすけ合い

第五十七回各流舞踊大会

仙台電力ホール

宮城県支部に加盟している各流派は、それぞれ活発に活動を行った。

その他(公社)日本舞踊協会本部の指示による事業への協力並びに県下、関連団体との連絡提携及び地域交流の親睦を深めることに努めている。

(庶務 吉村 花照)

宮城県吹奏楽連盟

所 千九八一—〇九〇四 仙台市青葉区旭ヶ丘三—三四—

一〇 キヤピタル旭ヶ丘三〇二

電 〇二二—二七五—六七六一

代 会長 三塚 尚可

数 一万七百四十六名(三百四十五団体)

格 宮城県内の小学校、中学校、高等学校、大学、職場、一般の吹奏楽団体

創 昭和三十三年

刊 すいそうがく(全日本吹奏楽連盟発行)(年四回発行)

HP 「宮城県吹奏楽連盟」 www.ajba.or.jp/miyagi/

Facebook 「楽器BANK 宮城県吹奏楽連盟」

開催月日 催 事 名

場 所

1／12・13	全日本アンサンブルコンテスト	仙台銀行ホール
予選第五十二回宮城県大会	イズミティ21	
3／9	第九回六十二万石吹奏楽祭	仙台市広瀬文化センター
3／14	宮城県吹奏楽連盟創立六十周年記念吹奏楽団東日本大震災復興祈念演奏会	神奈川県
5／12	二〇一九年度吹奏楽コンクール課題曲講習会	横浜みなとみらいホール
5／18・19	第三十四回宮城県管打楽器ソロコンテスト予選	仙台市若林区文化センター
5／31	東京佼成ウインドオーケストラ仙台公演	仙台市立台原中学校
6／1	第三十四回宮城県管打楽器ソロコンテスト	東京エレクトロンホール宮城
8／1・4	全日本吹奏楽コンクール第六十二回宮城県大会	中新田パツハホール
9／16	第三十八回全日本小学校バンドフェスティバル宮城県大会	仙台銀行ホール
	第三十二回全日本マーチングコンテスト宮城県大会	イズミティ21
		カメイアリーナ仙台
		カメイアリーナ仙台

11／9 第二十六回みやぎスーパー 日立システムズホール仙台

バンド演奏会

12／22 第四十一回東北吹奏楽の日演奏会 東京エレクトロンホール宮城

令和元年も、復興に向けて加盟団体は精力的に活動を行った。

全国各地から東北吹奏楽連盟を通して今年も多くの義援金をいただいた。使途としては沿岸地域の事業の際に楽器修理士を派遣しての無料楽器修理活動にあてたり、五月に招聘した「東京佼成ウインドオーケストラ公演」に沿岸地域の中高団体が鑑賞するためのバス代補助や入場料金補助を行った。まだまだ地域によつては吹奏楽活動の復興に遠い現状であるが、全国や県内の皆様からの応援とご理解のおかげで加盟団体は非常に勇気づけられている。

また、前年度は本連盟創立六十周年の記念すべき年となり、記念事業の締めくくりとして全県から募った中高生による合同バンドを結成し、横浜みなとみらいホールで復興祈念演奏会を開催し、好評を博した。

さらに、平成二十七年九月に宮城県合唱連盟、仙台オペラ協会他の方々とともに立ち上げた「二千席規模の音楽ホールを！市民会議」の活動も継続して行ってきた。

詳細については「宮城県吹奏楽連盟ホームページ」と

「Facebook 宮城県吹奏楽連盟」をインターネットで検索していただきたい。

(事務局長 菊地 憲昭)

宮城県合唱連盟

所 千九八〇—〇〇〇一 仙台市青葉区中江二丁目二四—五
(事務局 八巻輝子方)

電 〇九〇—二九五七—二九七五

代 理事長 今井 邦男

数 千八百名

格 宮城県内の小学校・中学校・高等学校・大学・職場・一般の合唱団

創 昭和二十四年五月

刊 ハーモニー (全日本合唱連盟発行) (年四回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

1/14 第二十回男の合唱まつり in みやぎ 日立システムズホール仙台

第一部 (コンサート) コンサートホール

第二部 (懇親会) 交流ホール

2/9・10 第三十回宮城県合唱

アンサンブルコンテスト 仙台市広瀬文化センター

6/2 審査員：井坂 恵、なかにし あかね、北條 加奈
第七十一回宮城県合唱祭 多賀城市文化センター

講師：佐藤 瑛利子、宍戸 真市、

なかにし あかね、渡部 ギュウ

7/6 小学校部門課題曲講習会 仙台市宮城野区文化センター

パトナホール

講師：北條 加奈 (音楽家)

内容：合唱名曲シリーズ小学校版 No.1 (二〇一九・二〇二〇年度

全日本合唱コンクール小学校部門課題曲集) 講習

8/2・3 宮城県合唱講習会 仙台市太白区文化センター

展示ホール (8/2)

仙台市旭ヶ丘市民センター

大ホール (8/3)

講師：相澤 直人 (作曲家)

内容：NHK全国学校音楽コンクール中学の部

課題曲講習 合唱団のための講座

8/24・25 第七十一回全日本合唱コンクール 名取市文化会館

宮城県大会

審査員：北原 幸男、小山 和彦、堀 俊輔

第四十二回全日本おかあさん 金沢市

コーラス全国大会

女声合唱団 仙台 N F C

おかあさんコーラス賞 受賞

11/23・24 第七十二回全日本合唱コン 京都市

クール全国大会の結果

大学職場一般部門

混声合唱の部

グリーン・ウッド・ハーモニー 銀賞受賞

(事務局長 八巻 輝子)

宮城県おかあさん合唱連盟

所 千九八九―五五〇一 栗原市若柳字川北原畑一九―八

(事務局 長谷 幸子方)

電 〇二二八―三二―三〇九六 (事務局 長谷 幸子方)

代 理事長 今井 邦男

数 六百六十五名

格 宮城県内の当連盟に加入するおかあさん合唱団

創 昭和四十八年十月

刊 機関紙「うたごころ」(年二回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

2/21 平成三十一年度総会及び 東京エレクトロンホール宮城

第一回幹事会

5/9 第二回幹事会

6/16 第四十七回宮城県おかあさん合唱祭 東京エレクトロンホール宮城 多賀城市文化センター

9/10 合唱講習会 仙台市広瀬文化センター

毎月1回 定例理事会 仙台市市民活動

サポーターセンター ほか

一年に一度、全会員が一堂に会して発表し合う「宮城県おかあさん合唱祭」も四十七回を迎えました。各団は、このステージに立つことを大きな目標にして練習に励んでいます。

曲目は宗教曲やイタリア歌曲、ミュージカル、ポピュラーソング等、モーツァルトから米津玄師まで多彩です。

県内外から講師を招いて個々に講評をいただき、更なる向上を目指しています。

また、秋には国内有数の指導者を招いて「合唱講習会」を開催し、会員のレベルアップを図っています。(一般参加も可)翌年の合唱祭で発表する機会があり、各団ではなかなか味わえない大人数での合唱も体験できます。

各団は、それぞれの地域での活動も活発に行っています。自治体の記念式典や地域行事に花を添えたり、幼稚園や学校、病院や老人施設への訪問を行って、地域の活性化や文化の振興に一役買っています。

(事務局担当理事 長谷 幸子)

仙台三曲協会

⑧ 千九八二—〇〇一二 仙台市太白区長町南三一八—一

⑨ 〇二二—二四七—八五二八

⑩ 会長 渡辺 悦子

⑪ 六百五十名

⑫ 協会所属の各流派会員で教授資格の有する者並びに日本音楽を愛好する者

⑬ 昭和三十年十月

⑭ 仙台三曲協会三十年史（昭和六十二年九月発行）

⑮ 仙台三曲協会年史・続編一（平成三年十一月発行）

⑯ 仙台三曲協会年史・続編二（平成八年十一月発行）

⑰ 仙台三曲協会年史・続編三（平成十三年十一月発行）

⑱ 創立五十周年記念仙台三曲協会年史

⑲ （平成十八年十一月発行）

⑳ 仙台三曲協会年史・続編五（平成二十四年十一月発行）

開催月日 催 事 名 場 所

1／11 三曲鑑賞授業 仙台市立榴岡小学校

1／25 三曲鑑賞授業 仙台市立泉松陵小学校

2／1 三曲鑑賞授業 仙台市立若林小学校

2／14 三曲鑑賞授業 仙台市立西中田小学校

3／7 三曲鑑賞授業 仙台市立南光台小学校

3／31 第七回子供の邦楽コンサート 福祉プラザふれあいホール

7／8 三曲鑑賞授業 仙台市立松森小学校

7／19 三曲鑑賞授業 仙台市立作並小学校

9／27 三曲鑑賞授業 仙台市立鶴谷東小学校

10／20 第六十三回仙台三曲協会演奏会 仙台市民会館大ホール

（仙台三曲協合理事 宮澤 寒山）

宮城県能楽振興協会

① 千九八一—八〇〇二 仙台市泉区南光台南三丁目二—一九

（鈴木敏彦方）

② 〇二二—二五二—一四七〇（鈴木敏彦方）

③ 会長 鈴木 敏彦

④ 九百七十名

⑤ 謡曲・仕舞・囃子・狂言の指導者及びその指導者に師事している者

⑥ 昭和四十九年六月

開催月日		催 事 名	場 所
1 13	第十五回	仙台市能楽振興 協会謡曲大会 素謡 十五番、 独吟 一番	仙台市福祉プラザ
2 10		碧水園能 喜多流能「東岸居士」、 和泉流狂言「因幡堂」	白石市碧水園能楽堂
6 1		登米狂言 狂言「木六駄」、 仕舞「雲林院」、「小塩」	登米森舞台
6 8		観世流能「隅田川」、 和泉流狂言「舟渡髯」	白石市碧水園能楽堂
6 9/7/7		外国人向け能講座 く能を楽しもう、 金春流	能BOX
9 14		登米秋まつり新能 能「羽衣」、 狂言「柿山伏」	登米森舞台
10 6	第十回	瑞鳳殿秋の能楽 素謡 二番、 仕舞 八番、	瑞鳳殿特設舞台
○仙台市			
11 10	平成三十一年	舞囃子 一番 仕舞 一八番、 独調 二番 居囃子 一番、 舞囃子 一番	能BOX
11 12	第十回	能への誘い（喜多流） 能の解説と装束の着付け、 仕舞「経政」、「船弁慶」、 「実盛」、「兼平」	日立システムズホール仙台
11 29・30		半能「敦盛」・半能「巴」 外国人向け能講座 く能を楽しもう、 喜多流	能BOX
12 1	第三十八回	宝生流能「通小町」 和泉流狂言「舟渡髯」 仕舞「簾」、「巻絹」	日立システムズホール仙台
一 仙台市能楽振興協会は六月にホームページを開設し、活			

動状況の発信と能楽関係のコラムほかの情報開示を始めた。

二

能―BOXにおいて、能楽五流の講師による「能のおけいこ体験講座」が通年行事として行われていた。

「能のおけいこ体験講座」の拡張版として、「外国人向け能講座」―能を楽しもう―が金春流と喜多流において各二回開催された。これは留学生を含む在仙外国人を対象に二年越しで実現した。いずれはインバウンド事業へと試行錯誤が続くであろう。

三

「能への誘い」公演が第十回を迎え、小中学生四十四名が招待されていた。

○白石市

一

文化庁の伝統文化親子教室事業を活用し、「こども能楽教室」を実施していた。内容は謡と仕舞の稽古を続け、三月に講座の受講者で発表会を行うものである。

○登米市

一

毎年六月に、登米中学校三年生を対象に、謡・仕舞の所

作の体験学習及び能の鑑賞会を開催しており、今年も実施した。

二

一年を通じて、小中学校や高齢施設等で「出前狂言」を開催していた。

(会長 鈴木 敏彦)

宮城県洋舞団体連合会

所 千九八九―六一二七 大崎市古川旭一丁目一三―一〇

(佐東悦子方)

電 〇二二九―二二―八四八八 (佐東悦子方)

代 会長 佐東 悦子

数 六団体

格 宮城県内に在住し、洋舞活動をしている団体の主宰者及び指導者

刊 昭和四十五年十一月

洋舞公演十年の歩み (昭和五十五年四月発行)

洋舞公演二十年の歩み (平成三年三月発行)

洋舞公演三十年の歩み (平成十二年十月発行)

洋舞公演四十五年の歩み (平成二十八年三月発行)

開催月日 催 事 名

場 所

2／23 第十四回ダンスコンペティション

in 仙台 (モダンダンス部門) シアターホール

2／24 第十四回ダンスコンペティション

in 仙台 (クラシック部門) シアターホール

11／17 第五十回記念「洋舞公演」

東京エレクトロンホール宮城

今回の公演は、創立五十年の記念公演でした。

クラシック、モダンの研究所がひとつのテーマで、合同公演をいたしました。

一時間余りの作品で、各研究所の持場で作品を展開し、最後は六十人近い大群舞で幕を閉じました。千人近い観客の前で、見事演じ終了しました。

観客に感動を与え、大きな拍手が会場全体に響きわたり、五十回の成果を、見事に見せることが出来ました。

連合会の会員はこれから、果てしないはるかな舞踊の道を歩み続けることを、改めて心に刻むことが出来ました。

(副会長 千尋 洋子)

宮城県歌人協会

⑧ 千九八一—〇九二三 仙台市青葉区東勝山三丁目一五—二九
(岡本勝方)

⑨ 〇二二—三九三—六一八七 (岡本勝方)

⑩ 会長 岡本 勝

⑪ 団体加入 十六団体 (三百名) 個人会員 十名

⑫ 宮城県内の短歌結社等の団体に所属する者、又は宮城県内に在住し若しくは活動する歌人

⑬ 昭和二十四年四月

⑭ 宮城県歌人協会年報 (年一回発行)

開催月日 催 事 名

場 所

6／7 第六十七回宮城県短歌大会 仙台文学館

11／24 第三十回宮城県短歌賞・東京エレクトロンホール宮城

歌人の集い

当協会は、短歌を多くの方々に楽しんでいただき、短歌を志す人達を支援するために、平成二十九年十月から「短歌教室」を開講しています。お問い合わせは当協会まで。

(会長 岡本 勝)

宮城県俳句協会

⑧ 千九八五—〇〇七二 塩竈市小松崎十一—十九

(渡辺誠一郎方)

⑨ 〇二二—三六七—一二六三 (渡辺誠一郎方)

⑩ 会長 高野 ムツオ

⑪ 三百十三名

⑫ 宮城県在住者及び出身者で、本会の目的に賛同する者

⑬ 昭和二十九年六月

⑭ 宮城県俳句協会会報 (年三回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

1 / 15 新春賀詞交歓会 東京エレクトロンホール宮城

2 / 24 平成三十一年度・令和元年度 東京エレクトロンホール宮城

定時総会

4 / 29 第四十九回宮城県俳句大会 東京エレクトロンホール宮城

11 / 12 第六十五回松島芭蕉祭 瑞巖寺・松島町文化観光交流館

並びに全国俳句大会

第四十三回宮城県俳句賞は、準賞に宮崎 哲さん、堀之内 久子さんが受賞されました。

(幹事長 渡辺 誠一郎)

宮城県川柳連盟

⑧ 千九八〇—〇〇一一 仙台市青葉区上杉二丁目四—八

朝日プラザ上杉三—三 (川柳宮城野社内)

⑨ 〇二二—二二七—〇五七五

⑩ 理事長 雫石 隆子

⑪ 理事十八名・評議員二十一名

⑫ 加盟川柳吟社・句会 (計二十三) の代表など

⑬ 昭和四十八年九月

⑭ 連盟会報 (年一回発行)

連盟川柳大会報 (年一回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

4 / 19 第四十七回宮城県白石川柳

大会 (誌上大会)

(事務局長 堀之内 稔夫)

宮城県詩人会

⑧ 千九八〇—〇八〇一 仙台市青葉区木町通二—六—五三

あきはビル三階

⑨ 〇二二—三四一—八六一〇

④ 会長 竹内 英典

⑤ 数 五十六名

⑥ 宮城県在住または出身者及びそれに準ずる者で、詩作品の実作者及び研究者

⑦ 創 平成十七年三月

⑧ 宮城県詩人会会報(年二回発行)

アンソロジー『宮城の現代詩』(年一回発行)

開催月日 催 事 名

場 所

11/24 宮城県詩人会詩祭2019 仙台文学館

毎月第2 ポエトリーカフェみやぎ 宮城県詩人会事務局
日曜日 (自由に詩について語るカフェ) (あきはビル四階)

団体紹介文

当会は、詩を書く人、読む人、研究する人が相互に交流し、切磋琢磨できる場です。活動が仙台市に偏らないよう、詩祭(より多くのみなさまに詩に親しんでいただくための、朗読や講演、音楽などを取り入れた詩のイベント)を、これまで気仙沼市、塩竈市、蔵王町、栗原市など県内各地で開催するなど詩の裾野を広げる活動をしています。

(理事長 玉田 尊英)

一般社団法人宮城県華道連盟

⑨ 〒九八〇—〇〇一四 宮城県仙台市青葉区本町一丁目

⑩ 四一四十五 西村方

⑪ 〇二二—二二—〇八六〇 西村一観方

⑫ 理事長 朴澤 一堂

⑬ 数 二百七十名

⑭ 池坊、小原流、古流松藤会、静月流、清泉古流、仙昇池坊、

道風流、本原遠州流、龍生派

⑮ 全九流派

⑯ 華道教授者(諸流師範)の資格を有し、門下を育成する者

⑰ 創 昭和十二年三月

⑱ 刊 会報「はないづみ」 年一回発行

開催月日 催 事 名

場 所

6/8 研修旅行 山形県 酒田・鶴岡方面

12/17 福祉厚生 宮城県啓佑学園

福祉施設訪問 寄付金贈呈

〈いけばな展〉

2/25 (一社) 宮城県華道連盟 せんだいメディアアテーク

第七十八回 春のいけばな展 五階 a・b

宮城のはるが 花ひらく

連盟所属の九流派 会員百四十名が前・後期に分かれ作品を出品。デモンストラションも開催した。

4/13〜15 龍生派宮城県支部いけばな展 センダイメディアテーク

〜春・華やかに〜

五階

5/16〜21 第七回 日本いけばな芸術 藤崎本館七階催事場

東北展

出品流派数三十七流派のうち、連盟からは所属流派の内八流派が参加

入場者数

一万七千八百六十九名

6/1・2 小原流仙台支部 みんな 宮城県知事公館

の花展「花の響」Part2

〜未来へつなぐ道〜

10/12〜15 「九十年の歩みをあしたへ繋ぐ」 センダイメディアテーク

池坊仙台支部いけばな池坊展 五階

10/19〜21 本原遠州流 いけばな本原 センダイメディアテーク

遠州流 秋華彩 六階a

宮城県庁 挿花 宮城県庁ロビー 他

連盟所属の九流派が毎月

交代で担当

(事務局長 西村 一観)

宮城県民藝協会

⑧ 〒九八〇—〇八一 仙台市青葉区一番町二丁目四—一〇

(光原社内)

⑨ 〇二—二二三—六六七四(光原社方)

⑩ 会長 濱田 淑子

⑪ 五十名

⑫ 昭和四十三年一月

⑬ 「民芸みやぎ」(年一回発行)

開催月日 催事名 場所

1/30 東京民藝日帰り旅 日本民藝館

2/3 新年会 21_21デザインサイト

4/14 会津日帰り旅 東北福祉大芹沢銈介美術工芸館

4/20 米沢民藝館「みちのく三 会津美里町

大刺子展」見学 仙台メディアテーク

5/24 日本民藝協会全国大会 青森県弘前市

6/1 竹細工肥料ふりかご制作地見学 黒川郡大和町宮床

7/6 総会 仙台市太白区福聚院

8/10 藍染のれんぐ芹沢銈介作品よりく見学 東北福祉大芹沢銈介美術工芸館

「うちわを作ろう」ワークショップ

8 / 24 「モダンデザインが結ぶ夢」展見学 東北歴史博物館

10 / 4 柚木沙弥郎講演会DVD上映会 東北福祉大学東口キャンパス

10 / 25 沖縄の焼き物 松田共司展 仙台市青葉区光原社

見学と囲む会

11 / 17 民藝きものの会 宮城県知事公館

(事務局長 及川 陽一郎)

公益財団法人日本民謡協会宮城県連合会

所 千九八二―一〇二 仙台市太白区袋原六丁目七―二七

電 〇二二―二四一―八一七六

代 委員長 阿部 勝造

数 五百七十三名

格 公益財団法人日本民謡協会に入会していること

創 昭和二十五年六月二十四日

刊 公益財団法人日本民謡協会の会報 (年六回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

4 / 7 公益財団法人日本民謡協会 山元町公民館

少年少女宮城県大会

公益財団法人日本民謡協会

民謡民舞豊饗宮城県大会

5 / 26 公益財団法人日本民謡協会 青森県八戸市

8 / 18 公益財団法人日本民謡協会 気仙沼市本吉町

9 / 30 公益財団法人日本民謡協会 ホテルニュー水戸屋

東北地区指導者資格認定試験

(東北地区委員長 小野 春城)

全国民謡連盟宮城県連合会

所 千九八九―六一二二 大崎市古川桑針字谷地中一四

(及川政芳方)

電 〇二二九―二三一―〇九〇 (及川政芳方)

代 会長 及川 政芳 (桃城)

数 二百五十名

格 民謡の好きな方

創 昭和五十三年十月

刊 会報本部作成 (年一回発行)

(本部連合会常務取締役 及川 政芳 (桃城))

宮城県民謡道連合会

所	千九八〇—〇〇〇二	仙台市青葉区福沢町一—四三
電	〇二二—二二三—四四一一	(事務局)
代	会長 衣川 喜仁	
数	三十一名	
格	民謡指導者・プロ伴奏者・プロ歌手・各会の会主	
創	昭和五十五年七月	
開催月日	催 事 名	場 所

3 ／ 1	平成三十年定期総会	仙台市福沢市民センター
6 ／ 4	宮城県民謡道連合会研修会 「さんさしぐれ全国大会」 審査基準及び採点耳合わせ」 講師 青柳 照桃、衣川 喜仁	仙台市福沢市民センター
11 ／ 6	第三十六回さんさ時雨全国大会 実行委員会 第三十六回さんさ時雨全国大会 全体会議	仙台市福沢市民センター
11 ／ 24	第三十六回さんさ時雨全国大会 出場者百五十名	山元町中央公民館大ホール
	(事務局長 二代目 藤本 和夫)	

宮城県写真連盟

所	千九八三—〇八五二	仙台市宮城野区榴岡四丁目一—八
電	パルシテイ仙台南側一階(カラーデューブ榴岡内)	
電	〇二二—二五六—二二四一	(カラーデューブ榴岡内)
代	会長 永井 優	
数	二百三十六名 役員十一名	
格	県写真展に参加し、会費を納入した方	
創	昭和五十四年四月	
刊	会報 (年一回)	
開催月日	催 事 名	場 所

5 ／ 22	宮城県写真連盟総会	まるまつ成田店
7 ／ 15	役員会(令和元年宮城県 写真展打合せ)	まるまつ成田店
10 ／ 20	令和元年度・宮城県写真展 公開審査 審査員 日本カメラ編集長 佐々木 秀人	南光台コミュニティセンター内
R2:1 ／ 28	令和元年度宮城県写真展	宮城県美術館県民ギャラリー
2 ／ 2	同展表彰式	宮城県美術館県民ギャラリー
2 ／ 10	令和二年写真展の打合せ	まるまつ成田店

今県美術館の移転の話が話題になっています。当団体も長年美術館を使用させていただき、移転するのは心さみしい気がします。

県内の色々な活動の中で、写真の世界もアナログからデジタルの世界と変貌しましたが中には古いカメラで作品を作っている方もいます。時代の流れで、新しい技法で美しい作品を出してくる方の発表の場としての、役割を提供したいと思っています。

(事務局長 高橋 潤一)

宮城県文化財友の会

所 千九八四—〇〇四二 仙台市若林区大和町一丁目一六—二三

(遠藤方)

電 〇二二—二三九—一三二四

代 会長 遠藤 哲雄

数 八十四名

格 文化財保護に関心を持ち、文化財に関する認識を深めようとする者

創 昭和四十九年八月

刊 宮城県文化財友の会だより (年四回発行)

開催月日 催 事 名 場 所

5 / 12 令和元年度通常総会 ショーケースビル

仙台市若林区歴史散歩

(土樋・荒町)

6 / 2 山形県米沢市歴史散歩

9 / 1 登米市歴史散歩

林泉寺、米沢城址、
上杉神社、上杉博物館 他
興福寺六角堂、教育資料館、
登米市歴史博物館、
佐沼要害跡 他

10 / 20 陸前浜街道 (亘理・山元)

歴史散歩 亘理町郷土資料館、
唐船藩所跡 他

12 / 1 文化財公開研修会 (実地見学)

陸奥国分寺ガイダンス施設、
薬師堂、鐘楼、準胝観音堂、
七重塔跡 他
(会長 遠藤 哲雄)

宮城県における 文化行政の概要

消費生活・文化課、長寿社会政策課、障害福祉課、生涯学習課、文化財課、宮城県図書館、宮城県美術館、東北歴史博物館（公財）宮城県文化振興財団（公財）慶長遣欧使節船協会における令和元年度の概要を掲載。（一月から三月までに実施したものは令和二年に行われた。）

一 知事部局関連

(二) 消費生活・文化課

1 表彰

令和元年文化の日（教育文化功労）表彰受賞者

○笹氣 幸緒＝会社役員

○門間 翠葉（純子）＝書道家

○一般社団法人宮城県華道連盟

○朝比奈 南樹（キヨ子）＝茶道家

○遠藤 恭子＝声楽家

○桜井 千恵子（櫻井 千恵子）＝歌人

○庄子 幸一＝日本画家

○佐藤 佳世子＝箏・三絃演奏家

○水木 歌泰（眞壁 恭子）＝日本舞踊家

○山内 ジョージ（紀之）＝漫画家・絵本作家

2 文化行政の基礎づくり

県民ロビーコンサートの開催

県庁舎を県民により開かれたものとし、文化の香り高い交流の場にするため、各月の第四水曜日に県民ロビーにおいてコンサートを開催した。

開催日	出演者
四月二十四日	仙台フィルハーモニー管弦楽団 （オーケストラによるクラシック演奏）
五月二十二日	宮城県仙台二華中学校・高等学校音楽部 （女声合唱）
六月二十六日	倉島 研（ピアノ演奏）
七月二十四日	金管n重奏（金管楽器によるアンサンブル）
八月 七日	一般社団法人仙台オペラ協会（オペラ）
八月二十八日	井上 強嗣 （津軽三味線と民謡の弾き語り演奏）
九月二十五日	Hello!! Orchestra （ビックバンドによるジャズ演奏）
十月二十三日	女声アンサンブル「イー」（女声コーラス）
十一月 十三日	名取交響吹奏楽団アンサンブルメンバー （金管楽器によるアンサンブル）
十一月二十七日	ハーモニカ楽団ハーモニカ Wind 四季 （ハーモニカによる合奏）
十二月二十五日	白鳥の里アンサンブル（大正琴による演奏）
一月二十二日	ミュージックベルグループ Caracara （ミュージックベル演奏）
二月二十六日	宮城学院女子大学学芸学部音楽科（日本語で楽しむオペラ「フィガロの結婚」）

3 文化創造の風土づくり

みやぎ県民文化創造の祭典2019

みやぎらしい創造的な文化芸術圏の創出を目的として、平成九年度から開催。九月から十一月までを重点期間として、主催事業（七事業）、共催事業（十七事業）及び協賛事業（五十二事業）を県内各地で開催した。

〈主催事業〉

①舞台ワークショップ

普段は演劇やダンスなどの舞台芸術に触れる機会の少ない方々に、体で表現する楽しみやコミュニケーションの大切さを実感していただきながら、舞台芸術に親しんでいただくため、県内の劇団で活躍するアーティストなどを講師とした少人数・体験型のワークショップを開催した。

○公益財団法人仙台市市民文化事業団

・舞台スタッフ・ラボ2019

講師 石井忍 ほか

期間 八月二十五日～九月八日

会場 仙台市宮城野区文化センター（仙台市）

○えずこ芸術のまち創造実行委員会

・えずこ・えんげきワクワク学校2019

講師 鈴木拓朗、柏木陽

期間 八月七日～十月九日

会場 えずこホール（大河原町）、船岡保育所（柴田町）、

沼辺児童館（村田町）

・ISOPPの完全燃焼!!ヒップホップダンス体験教室

講師 ISOPP

期間 十月二日～四日

会場 角田小学校（角田市）、村田小学校（村田町）、

大河原南小学校（大河原町）

・ISOPPの完全燃焼!!ヒップホップダンス体験教室 Part2

講師 ISOPP

期間 九月四日～六日

会場 小斎小学校（丸森町）、槻木小学校（柴田町）、

横倉小学校（角田市）、船岡小学校（柴田町）

○名取市教育委員会

・ダンスミュージカル講座（那智が丘）

講師 朝日陽子

期間 八月五日～十月二十日

会場 名取市文化会館、関上公民館 MJ Art Studio（名

取市）

・ダンスミュージカル講座（名取が丘）

講師 伊勢千佳子

期間 七月二十五日～十一月十一日

会場 名取市文化会館、増田西公民館（名取市）

○多賀城市文化センター

・WAKU☆WAKU☆舞台スタッフ体験2019

講師 渡辺祥子、松崎太郎、梅内久仁生

期間 十一月十六日～十二月十四日

会場 多賀城市民会館（多賀城市）

②美術ワークショップ

県内で活躍する芸術家を講師に、ワークショップ等の少人数・体験型講習会を開催し、参加者自身が作品を製作・表現することを通じて、文化芸術活動への関心を高め、新たな美術愛好者層の拡大を図ることを目的として開催した。

◆市町村との共催事業

○蔵王町教育委員会

・加川広重アートプロジェクト

講師 加川広重

期間 七月二十五日～九月二十一日

会場 蔵王町ふるさと文化会館、ヨーグルト工房アート

レイユ（蔵王町）

○多賀城市立図書館

・フランスに触れる1日“Bienvenue en France!”

講師 貝山幸子

期間 九月八日

会場 多賀城市立図書館（多賀城市）

○宮城県白石高等学校七ヶ宿校

・漆で作品を作ろう

講師 佐藤建夫

期間 十月三十一日

会場 宮城県白石高等学校七ヶ宿校（七ヶ宿町）

○塩竈市杉村惇美術館

・マチエールで冬を描こう

講師 小野寺裕

期間 十二月十四日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

・flower art museum ～絵画の中の花を組む～

講師 大塚のぞみ

期間 十二月一日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

◆普及事業

・野菜ハンコで絵を描こう

講師 あるがあく

期間 八月十九日

会場 塩竈市清水沢東住宅集会所（塩竈市）

・描いた絵をプログラミングで動かそう

講師 峠の分校

期間 九月二十日

会場 manaby CREATORS(就労継続支援B型事業所)

(仙台市)

・GAMA 仮面(がま面)をつくろう

講師 小池アミイゴ

期間 九月二十一日

会場 塩竈みなと公園(塩竈市)

・ハコビをつくろう

講師 中島佑太

期間 十月二十日

会場 岩沼市玉浦西災害公営住宅(岩沼市)

・ダンスでクイズ

講師 段家亜希子

期間 十一月十一日・二十八日・十二月二日

会場 第一小学校、第二小学校、第三小学校(塩竈市)

・身体表現ワークショップ

講師 ATSUSHI

期間 十二月八日

会場 ふれあいエスプ塩竈(塩竈市)

・対話型鑑賞

講師 桜井真理恵、浅野友理子

期間 令和二年一月三十一日

会場 塩竈市立第二中学校(塩竈市)

・土地を食べる うつわをつくろう

講師 浅野友理子、アトリエ陶の泉

期間 令和二年二月十六日

会場 仙台市荒井東災害公営住宅集会所(仙台市)

・ダンボール風景画をつくろうー浜田・須賀編ー

講師 佐藤美里

期間 令和二年二月二十三日

会場 浜田漁港カキ焼き処駐車場特設会場(利府町)

・キラリと光るリフレクターを身につけよう

講師 小野寺志乃、小野寺美和

期間 令和二年二月二十四日・三月二十五日

会場 Fablab SENDAI-FLAT、放課後等デイサービス

モりのなかま am もりのなかま Wam(仙台市)

③音楽アウトリーチ

アーティストを講師に、生演奏を間近で体験できる少人数を対象としたアウトリーチを実施し、普段はなかなか触れることのできない楽器の面白さや音楽の魅力を伝え、音

楽愛好者層の拡大を図った。

また、地域の公共ホール等で、講師による芸術性の高いコンサートを開催した。

◆市町村等との共同事業

○大和町文化振興協会

・出演 叶千春（ヴァイオリン）、塚野淳一（チェロ）、杉本大（ピアノ）

期間 九月四日～十三日

会場 鶴巣小学校、落合小学校、吉岡小学校、小野小

学校、吉田小学校、宮床小学校（大和町）

○蔵王町教育委員会

・出演 XUXU（シュシュ）

期間 九月十一日～十三日

会場 宮小学校、円田小学校、平沢小学校、遠刈田小

学校、永野小学校（蔵王町）

○公益財団法人白石市文化体育振興財団

・出演 ドラムカフェジャパン

期間 九月十二日、十三日

会場 大平小学校、福岡小学校、第一小学校、福岡中

学校（白石市）

○えずこ芸術のまち創造実行委員会

・出演 加藤直明（トロンボーン）、中川賢一（ピアノ）

期間 十月七日、八日

会場 川崎小学校（川崎町）、桜小学校（角田市）、大

河原中学校（大河原町）

・出演 荒川洋（フルート）、中川賢一（ピアノ）

期間 二月十九日～二十一日

会場 北郷小学校（角田市）、筆甫小学校、耕野小学校、

大張小学校（丸森町）

○塩竈市遊ホール協会

・出演 天満敦子、勝呂真也

期間 十二月十二日、十三日

会場 第二小学校、玉川小学校、第一中学校（塩竈市）

○多賀城市文化センター

・出演 山形交響楽団団員

期間 十一月二十五日～一月二十八日

会場 山王保育園、市営鶴ヶ谷住宅、東小学校、多賀

城中学校（多賀城市）

○公益財団法人登米文化振興財団

・出演 東京パリアンサンブル

期間 十二月十二日～十四日

会場 東郷小学校、石越小学校、米山中学校、多機能

型事業所ひだまりポッケ、登米祝祭劇場（登米

市）

○加美町

- ・出演 ムジカノヴァ

期間 一月二十二日、二十三日

会場 東小野田小学校、おのだひがし園、賀美石小学校放課後児童クラブ、宮崎小学校放課後児童クラブ（加美町）

◆普及事業

- ・出演 長谷川康、東歩美

期間 八月二十八日

会場 玉川小学校（塩竈市）

- ・出演 杜の弦楽四重奏団

期間 九月十九日

会場 山下小学校（山元町）

- ・出演 櫻井希、西沢澄博、藤井明美

期間 九月二十七日

会場 大鷹沢小学校（白石市）

- ・出演 木村麻衣子、阿部玲子

期間 十月十七日

会場 大街道小学校（石巻市）

- ・出演 ムズィカ・ヴェルデ

期間 十一月六日

会場 古川西中学校（大崎市）

- ・出演 仙台サクソフオン四重奏

期間 十一月七日

会場 鹿原小学校（加美町）

- ・出演 イル・メロ

期間 十一月八日

会場 館腰小学校（名取市）

- ・出演 渡辺文江

期間 十一月十四日

会場 富谷中学校（富谷市）

- ・出演 仙台チェンバーアンサンブル

期間 十一月二十日

会場 富岡中学校（川崎町）

- ・出演 長谷川康、東歩美

期間 十一月二十八日

会場 栗原西中学校（栗原市）

- ・出演 田原さえ、小野綾子、千葉展子

期間 十一月二十八日

会場 鳴瀬小学校（加美町）

- ・出演 ほうねん座

期間 十二月四日

会場 横山小学校（登米市）

- ・出演 高見秀太郎、鈴木真衣、千葉展子

期間 十二月十六日

会場 湊小学校（石巻市）

・出演 高見秀太郎、鈴木真衣、千葉展子

期間 令和二年二月五日

会場 小泉小学校（気仙沼市）

④みやぎ芸術銀河作品展

令和元年度宮城県芸術選奨の受賞者の作品等を一堂に会し、受賞者の作品やこれまでの活動などを紹介し、芸術をより身近に感じられる機会を提供した。

期間 一月二十日～二十六日

会場 東京エレクトロンホール宮城五〇一・五〇二展

示室

⑤若手芸術家育成事業

県内高校生の文化芸術に係る表現力を育み、強化するとともに、宮城県の文化芸術の振興・発展に寄与することを目的に、講習会等を開催し、参加者同士の交流を深め、表現力等の向上を図った。

共催 宮城県高等学校文化連盟

期日 五月十二日～十二月二十六日

会場 宮城県内各地

4 文化活動の促進

(1) 令和元年度宮城県芸術選奨の顕彰

本県の芸術活動の奨励と振興のため、芸術各分野において、選考対象期間中（平成三十年四月一日から平成三十一年三月三十一日まで）に活発な創作活動を行い、優れた作品等を発表した者に対し、「令和元年度宮城県芸術選奨」及び「令和元年度宮城県芸術選奨新人賞」を贈った。

授賞式 十一月十二日 宮城県行政庁舎九階

第一会議室

(2) 文化芸術関係行事の後援、知事賞の贈呈等

後援行事 二百二十二件

知事賞交付 四十九件 七十九点

(3) 文化事業への助成

県内文化団体事業への補助（公財） 仙台フィルハー

モニー管弦楽団ほか）

(4) 文化振興基金の造成

民間と行政が一体となって文化活動の助成を図るため、文化振興基金を設置し、昭和六十二年度から基金の造成を図っている。

(5) 宮城県芸術年鑑の発行

(二) 長寿社会政策課

第二十七回宮城シニア美術展

高齢者の創作による作品（日本画・洋画・書・写真・工芸）の募集・展示を通して、高齢者の文化活動を促し、ふれあいと生きがいづくりを促進するとともに、第三十三回全国健康福祉祭ぎふ大会（ねんりんピック岐阜2020）への宮城県代表作品として選考することを目的に開催した。

出品 二百十八点

期日 十一月二十八日～十二月一日

会場 宮城県美術館 県民ギャラリー

主催 社会福祉法人宮城県社会福祉協議会

共催 宮城県・公益財団法人宮城県老人クラブ連合会

(三) 障害福祉課

1 とつておきの音楽祭

障害の有無にかかわらず参加できる音楽祭が開催された。仙台市内三十四箇所に設置されたステージに三百三十四団体・個人が参加した。

開催日 六月二日 会場 仙台市役所前市民広場ほか

主催 NPO法人とつておきの音楽祭

2 表彰

「第二十三回ピュア・ハーツアート展」（仙台市知的障害者芸術文化協会主催）の最優秀作品を「宮城県知事賞」として表彰を行った。（令和二年二月）

○安達和代（絵画）

3 障害者による芸術文化活動の支援

平成三十一年度宮城県障害者芸術文化活動支援事業
県内障害者の芸術文化活動の振興を図ることを目的に、宮城県障害者芸術文化活動支援センターを設置し、以下の事業を実施した。

(1) 相談・支援

芸術活動を行う障害者本人や家族、支援者等からの相談に応じ、支援を行った。

(2) 障害者芸術文化活動を支援する人材の育成支援

芸術文化活動の支援方法、著作権等の権利保護、障害特性への理解等に関する研修等を行った。

- ①十一月十四日（木）県北地域編
- ②十一月二十六日（火）県南地域編
- ③十二月五日（木）実践！「伝えるための1・2・3！」
- ④十二月十二日（木）実践！「作品展示の1・2・3！」
- ⑤二月五日（水）アートと著作権（基本編）

(3) 展示会開催

第二回 障害のある人と芸術文化活動の大見本市
「きいて、みて、しって、見本市。」

期日 令和二年二月二日(日)～五日(水)

会場 せんだいメディアテーク一階オープンスクエア

二 教育委員会関連

(一) 生涯学習課

1 表彰

令和元年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○寺崎の法印神楽保存会Ⅱ文化財保護(石巻市)

○渡邊 つる子Ⅱ芸術文化(工芸)(仙台市)

○中塚 仁Ⅱ芸術文化(書道)(仙台市)

2 文化芸術の振興

(1) 第五十六回宮城県芸術祭

(公社)宮城県芸術協会・宮城県・仙台市・宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・河北新報社・(公財)宮城県文化振興財団・(公財)仙台市市民文化事業団の八者が共催
九月二十日～三月八日(せんだいメディアテーク外)

書道、工芸、絵画、写真、華道、彫刻等の展示及び音楽コンクールが行われた。

(詳細は「広域文化団体の文化活動記録―(公社)宮城県芸術協会」に掲載。)

(2) 宮城県高等学校文化連盟事業

① 第二十六回宮城県高等学校総合文化祭

『WE WILL NOT HIDE ANYTHING』ありのま
ま自由に表現しよう!』をテーマとして、総合開会
式や部門別開催に二十二部門百校が参加した。

ア 総合開会式〔ステージ部門〕

十月十九日(美里町文化会館)

式典に続き、合唱、軽音楽、ダンス、弁論、吹
奏楽と全員合唱がステージ発表として行われた。

イ 総合開会式〔展示部門〕

十月十九日～二十日(美里町近代文学館、美里町
中央コミュニティセンター)

美術・工芸、書道、写真、新聞、工業部門によ
る展示発表が行われた。

ウ 部門別開催

○合唱〔第五回みやぎ高校合唱祭〕十一月三日(宮
城野区文化センター パトナホール)

○英語〔第七十二回宮城県高等学校英語弁論大会〕
九月十日(聖ウルスラ学院英智高等学校)

〔第六十六回宮城県高等学校英作文コンクール〕
十月三十一日(宮城県仙台三桜高等学校)

○吹奏楽〔第五回みやぎ高校吹奏楽祭〕十月十二日
(仙台銀行ホールイズミティ21)

○演劇〔第五十七回宮城県高等学校演劇コンクール

地区大会及び県中央大会〕十月三日～十一月十七
日(広瀬文化センター、他)

○囲碁〔第二十回宮城県高校囲碁九路盤大会〕十月

十八日(宮城県仙台第二高等学校)

○小倉百人一首かるた〔第二十八回宮城県高等学校
小倉百人一首かるた大会〕十月七日(志波彦神社
鹽竈神社)

○新聞〔第六回宮城県高等学校新聞コンクール〕

十一月十五日(美里町中央コミュニティセンター)
○郷土芸能〔第六回宮城県高等学校郷土芸能大会〕

十一月七日(名取市文化会館)

○器楽・管弦楽〔第四十二回宮城県高等学校音楽祭〕

十月十八日(日立システムズホール仙台)

○文芸〔第二十六回県高総文祭文芸部門交流会・研
修会〕十月三十日(東京エレクトロンホール宮城)

○放送〔第三十八回宮城県高等学校放送コンテスト
新人大会〕十月二十六日～十一月十三日(日立シ
ステムズホール仙台、他)

○ダンス〔第二十七回宮城県高等学校ダンスフェス
ティバル〕十月二十一日～二十三日(広瀬文化セ
ンター)

○工業〔第二十八回宮城県高等学校生徒活動成果発

表会)十一月十六日(宮城県古川工業高等学校)

○日本音楽〔第二十八回宮城県高等学校日本音楽定期演奏会〕十一月六日(多賀城市文化センター)

○写真〔第二十六回宮城県高等学校写真展〕十一月六日～十日(宮城県美術館県民ギャラリー)

○自然科学〔第七十二回宮城県高等学校生徒理科研究発表会〕十一月七日(東北大学工学部)

○軽音楽〔第十六回宮城県高等学校対抗バンド合戦新人大会〕十一月九日(デジタルアーツ仙台)

○将棋〔第三十六回宮城県高等学校将棋新人戦〕十一月三日(宮城県仙台第一高等学校)

○書道〔第六十八回宮城県高等学校書道展覧会〕十二月三日～八日(宮城県美術館県民ギャラリー)

○弁論〔第六回宮城県高等学校弁論大会〕十二月十四日(吉野作造記念館)

○商業「プログラミング研修会」十二月二十五日(東京IT会計専門学校仙台校)

○美術・工芸〔第七十二回宮城県高等学校美術展〕一月二十二日～二十六日(宮城県美術館県民ギャラリー)

② 第四十三回全国高等学校総合文化祭佐賀大会

七月二十七日～八月一日(佐賀県内九市四町)

総合開会式と十六部門(合唱、器楽・管弦楽、日本音楽、吟詠剣詩舞、郷土芸能、美術・工芸、書道、写真、放送、囲碁、将棋、弁論、小倉百人一首かるた、新聞、文芸、自然科学)に生徒百九十七名が本県代表として参加した。

③ 専門部事業

ア 演劇〔第三十回リーダー研修会〕七月十三日～十五日(宮城野区文化センター)、〔第二十八回総合研修会〕七月二十日(聖和学園高等学校)

イ 合唱〔第七十一回宮城県合唱祭〕六月二日(多賀城市文化センター)、〔令和元年度第一回発声講習会〕五月十九日(戦災復興記念館 記念ホール)、〔合唱講習会〕八月六日～八日(戦災復興記念館 展示ホール)、〔第八十六回NHK全国学校音楽コンクール宮城県大会〕八月十八日(多賀城市文化センター 大ホール)、〔第七十一回全日本合唱コンクール宮城県大会〕八月二十四日(名取市文化会館 大ホール)、〔令和元年度第二回発声講習会〕十二月十五日(名取市文化会館 中ホール)、〔令和元年度パート別発声講習会〕一月十三日(宮城県仙台三桜高等学校)

ウ 吹奏楽〔吹奏楽コンクール課題曲講習会〕五月十二

日 (若林区文化センター)、「第三十四回宮城県管打楽器ソロコンテスト」六月一日(中新田バッハホール)、「全日本吹奏楽コンクール第六十二回宮城県大会」八月一日(仙台銀行ホールイズミティ21)、「第八回高校生のための吹奏楽部運営講座」十一月三日(仙台第三高等学校)、「第四十一回東北吹奏楽の日演奏会」十二月二十二日(東京エレクトロンホール宮城)、「全日本アンサンブルコンテスト第五十三回宮城県大会」一月十九日(仙台銀行ホールイズミティ21)

エ 器楽・管弦楽〔マンドリン部技術講習会〕七月二十

日・十月十四日(東松島市コミュニティセンター)、「ギター部技術合奏講習会」十二月八日(聖和学園高等学校)、「管弦楽技術講習会」八月六日(尚絅学院高等学校)、「十月十四日(秀光中等教育学校)」、十二月十六日(宮城県宮城第一高等学校)

オ 美術・工芸〔各地区美術展〕※仙台地区七月三日、七日(宮城県美術館県民ギャラリー)

カ 放送〔令和元年度春季校内放送研修会〕五月十八日(仙台白百合学園高等学校)、「第六十六回NHK杯全国高校放送コンテスト宮城県大会」六月八日～十四日(多賀城市民会館、他)、「令和元年度夏季校内放送研修会」八月六日(仙台市立仙台南商業高等学校)、「令和

元年度冬季校内放送研修会」一月二十五日(宮城県仙台二華高等学校)

キ 囲碁〔第四十三回文部科学大臣杯全国高校囲碁選手権大会宮城県大会〕六月二十二日～二十四日(宮城県仙台第二高等学校、宮城県仙台第一高等学校)、「第三十三回東北高校選手権代表選抜戦」・〔第十回強化練習会〕七月十五日～十六日(宮城県仙台第二高等学校)、「第十一回強化練習会」十月十九日～二十日(宮城県仙台第二高等学校)、「第三十七回宮城県高校囲碁新人大会」一月二十六日(宮城県仙台第二高等学校)

ク 将棋〔第五十五回全国高校将棋選手権宮城県予選大会〕五月二十五日～二十六日(宮城県仙台第一高等学校)、「第三十二回全国高校将棋竜王戦宮城県予選」七月七日(宮城県仙台第一高等学校)

ケ 自然科学〔第一回生徒研修会〕六月三十日(仙台市若林区文化センター)、「第二回生徒研修会兼全国高総文祭最終選考会」十二月二十五日(仙台市戦災復興記念館)

コ 写真〔第二十八回写真技術講習会〕六月二十九日～三十日(仙台市立仙台工業高等学校)、「第十六回写真部夏季写真撮影大会」八月四日～六日(花山青少年自然の家)、「冬季写真撮影大会」十二月十四日～十五日

(石巻市立桜坂高等学校)

サ 小倉百人一首かるた〔第四十三回全国高総文祭小倉

百人一首かるた部門宮城県予選〕五月十五日(志波彦神社鹽竈神社)〔第四十一回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会宮城県予選〕六月五日(志波彦神社鹽竈神社)〔第十二回東北・北海道高等学校かるた選手権大会〕七月六日(志波彦神社鹽竈神社)〔第二十六回東北・北海道高等学校かるた新人大会〕十二月十四日(山形県総合運動公園内武道館)

シ 日本音楽〔平成三十一年度日本音楽研修会〕十一月六日(多賀城市文化センター)

ス ダンス〔全日本高校・大学ダンスフェスティバル〕八月六日(神戸文化ホール)〔ダンス技術リーダー講習会(一)〕七月十五日(宮城県宮城第一高等学校)〔ダンス技術リーダー講習会(二)〕十二月二十一日(宮城県宮城第一高等学校)

セ 軽音楽〔第二十五回宮城県高等学校対抗バンド合戦〕七月十五日(デジタルアーツ仙台)〔ハイスクールプレミアムライブ2019〕八月二日(仙台PIT)〔第五回宮城県高等学校対抗バンド合戦一年生大会〕十二月二十一日(デジタルアーツ仙台)〔北部地区技術講習会〕二月二日(宮城県古川黎明高等学校)〔顧問技

術講習会〕二月十日(ROCK ON Music School 本町教室)

ソ 文芸〔新人研修会・短歌〕十二月二十一日(大崎市図書館研修室)〔新人研修会・随筆〕二月一日(東京エレクトロンホール宮城 会議室)〔第十六回高校生文芸作品コンクール〕八月二十三日必着

タ マーチングバンド・バントワリング〔基礎技能講習会(打楽器)〕七月七日(宮城県宮城広瀬高等学校)〔第三十二回全日本マーチングコンテスト宮城県大会〕九月十六日(カメイアリーナ仙台)〔第三十八回マーチングバンド・バントワリング宮城県大会〕九月二十一日(セキスイハイムスーパーアリーナ)〔マーチング講習会〕二月九日(仙台市立仙台青陵中等教育学校)

チ 新聞〔前期研修会〕七月十三日(宮城県工業高等学校)〔後期研修会〕十月五日(仙台市南蒲生浄化センター)〔震災遺構仙台市立荒浜小学校、他〕

ツ 吟詠剣詩舞〔強化練習会〕四月十三・二十七・二十八日、五月十一・十五・二十三日、六月一・五・十九・二十三・三十日、七月三・六・七・十四・二十一・二十五日、九月五・十一・二十六日、十月三・九・十六・三十一日(宮城県古川黎明高等学校)

④ 支部事業

ア 仙台北・仙台南〔第三十回県高文連仙台北支部総合文化祭「ふれんどりとくく」〕十月二十四日（宮城野区文化センター）

イ 仙南〔第二十五回県高文連仙南支部総合文化祭〕十月十一日～二十二日（えずこホール、白石市中央公民館）〔専門部研修会〕八月～十一月（専門部毎各会場）
ウ 大崎〔第四十八回古川管内高校演劇祭〕五月十九日（大崎生涯学習センター）〔平成三十一年度古川管内高等学校美術クラブ連合展〕五月三十一日～六月三日（大崎市民ギャラリー）〔第二十七回県高文連大崎支部総合文化祭〕十月十九日～二十日（美里町文化会館、美里町中央コミュニティセンター、美里町近代文学館）〔平成三十一年度アンサンブルコンテスト大崎地区大会〕十二月十四日（大崎市岩出山文化会館）〔第十五回大崎吹奏楽祭〕二月二日（美里町文化会館）

エ 東部〔第二回東部地区高等学校美術展〕七月十三日～十四日（松島町文化観光交流館）〔第二回県高文連東部支部総合文化祭〕十月十七日～十一月十三日（塩竈市民交流センター、石巻専修大学、東松島市コミュニティセンター）

オ 栗原・登米〔第二十六回県高文連栗原・登米支部総

合文化祭〕六月二十二日～二十三日（栗原市若柳総合文化センター ドリームパル）

カ 本吉〔第十四回県高文連本吉支部総合文化祭〕七月六日～七日（気仙沼市はまなすホール、本吉公民館）〔第五十七回気仙沼・本吉地区高等学校美術展「けせもい展」〕九月十一日～十六日（リアス・アーク美術館）〔第二十七回気仙沼・本吉地区生徒科学発表会〕十二月二十一日（宮城県本吉響高等学校）〔本吉支部合同写真展〕二月二十二日～三月二十二日（気仙沼中央自動車学校）

⑤ 定通部事業

〔第四十七回宮城県高等学校定時制通信制生徒の集い〕八月三十一日（玉浦コミュニティセンター、いわぬまひつじ村）〔第六十七回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表宮城県大会〕十月五日（宮城野区文化センター）

⑥ その他

○機関紙『高文連ニュース第二十九号』発行

○宮城県高等学校文化連盟PR事業

十月二十八日～十一月七日（県庁一階ロビー・二階回廊）

○令和元年度宮城県高等学校文化連盟賞表彰式

二月十二日（ホテル白萩）

○年間集録『みやぎ高文連年報二十八号』刊行

(3) 文化庁事業

① 文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）

六月 十八日	大崎市立田尻小学校	（演劇）
六月 十九日	大崎市立沼部小学校	（演劇）
七月 三日	亙理町立亙理小学校	（オーケストラ）
七月 四日	塩竈市立玉川中学校	（オーケストラ）
七月 五日	石巻市立青葉中学校	（オーケストラ）
九月 二日	大崎市立岩出山小学校	（ミュージカル）
九月 三日	加美町立賀美石小学校	（ミュージカル）
九月 四日	大崎市立鹿島台中学校	（ミュージカル）
十月 一日	石巻市立貞山小学校	（ミュージカル）
十月 二日	大崎市立鳴子小学校	（ミュージカル）
十月 七日	気仙沼市立気仙沼中学校	（合唱）
十月 八日	角田市立北角田中学校	（オーケストラ）
十月 九日	気仙沼市立新月中学校	（合唱）
十月 十日	加美町立小野田中学校	（合唱）
十月 二十五日	栗原市立栗駒中学校	（伝統芸能）
十月 二十八日	登米市立米谷小学校	（演劇）
十月 三十日	大崎市立三本木中学校	（演劇）
十月 三十一日	柴田町立西住小学校	（演劇）

② 文化芸術による子供育成総合事業（芸術家の派遣事業）

十一月 一日	角田市立金津中学校	（演劇）
十一月 一日	角田市立西根小学校	（舞踏）
十一月 五日	塩竈市立第二中学校	（舞踏）
十一月 八日	利府町立青山小学校	（舞踏）
十一月 二十五日	角田市立横倉小学校	（演劇）
十一月 二十七日	利府町立しらかし台中学校	（演劇）
十一月 二十八日	気仙沼市立九条小学校	（大衆芸能）
十一月 二十八日	岩沼市立立岩沼南小学校	（オーケストラ）
※追加公演		
十二月 二日	気仙沼市立面瀬中学校	（演劇）
十二月 三日	塩竈市立月見ヶ丘小学校	（伝統芸能）
十二月 四日	東松島市立鳴瀬桜華小学校	（伝統芸能）
十二月 五日	石巻市立大原小学校	（伝統芸能）
六月四日～九月二十四日（三回）	大崎市立敷玉小学校	（伝統芸能）
六月二十日	大崎市立大貫小学校	（伝統芸能）
六月二十五日	石巻市立須江小学校	（美術）

七月十日～九月十七日（三回）

宮城県立支援学校小牛田高等学園（伝統芸能）

七月十日

加美町立宮崎中学校（音楽）

七月十三～十五日（三回）

宮城県仙台第三高等学校

七月十八日

宮城県田尻さくら高等学校

七月二十三～二十五日（三回）

宮城県東松島高等学校

九月五日

宮城県白石高等学校七ヶ宿校

九月六日～十月十一日（三回）

塩竈市立浦戸小学校・中学校

九月十七～十九日

西山学院高等学校

九月二十四～十二月十七日（三回）

角田市立枝野小学校

十月二十五日

涌谷町立麓岳白山小学校

十一月五日

石巻市立荻浜中学校

十一月五～六日（二回）

大衡村立大衡小学校（音楽）

十一月十五日

山元町立山下第二小学校（音楽）

十二月五日

宮城県田尻さくら高等学校

十二月六日～二十日（三回）

塩竈市立玉川中学校（美術）

十二月十六日～十八日（三回）

岩沼市立岩沼小学校（音楽）

十二月十六日～十八日（三回）

岩沼市立岩沼南小学校（音楽）

③ 文化芸術による子供育成総合事業（子供 夢・ア

ト・アカデミー）

十二月十九日 宮城県名取高等学校

堤 剛（音楽）

④ 文化芸術による子供育成総合事業（芸術家の派遣事

業）

〔東日本大震災復興支援対応〕

「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」みやぎ実

行委員会が委託を受けて、県内百二十会場に講師を派遣して事業を実施

(4) 宮城県巡回小劇場

① 音楽…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

(公財) 日本青少年文化センターと共催

十月八日～十一日 (八会場)

『ビバ！ムジカ！歓びの歌を歌おう』

鑑賞者数二千二百七人

② 演劇…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、

(公社) 日本児童演劇協会との共催

九月十一日～二十七日 (県内十会場)

プログラム

『人形劇「八郎」』

(小学生用) 人形劇団 プーク

鑑賞者数 二千二百五十一人

『SKY～あの空の向こうに～』

(中学生用) 演技集団 朗

鑑賞者数 六百五十七人

(5) 青少年劇場小公演

開催市町村教育委員会、(公財) 日本青少年文化センターの共催により、地域の児童生徒に優れた生の芸術を鑑賞する機会を提供した。

五月二十八日～十月十六日 (三十八公演)

『となりの国の打楽器と踊り …イ・チュヒ、チャ・チャンボ』

『三味線いろいろ …上原潤之助、新田昌弘』

『話の伝統芸能 落語 …桂 米多朗、柳家禽太夫』

『ヴァイオリンとチェロのコンサート …鍵富弦太郎』

鑑賞者数 四千百三十七人

(6) 宮城県地方音楽会…開催市町村教育委員会と共催

① アンサンブル公演 (令和元年度は無し)

② オークストラ公演

令和二年二月八日 七ヶ浜国際村

令和二年二月九日 気仙沼市民会館

令和二年二月十六日 大和町まほろばホール

令和二年二月二十四日 蔵王町ふるさと文化会館

(7) 優秀映画鑑賞推進事業…文化庁、国立映画アーカイブ、

開催町と共催

九月二十九日

加美町中新田文化会館 中新田バッハホール

(8) 国民文化祭派遣事業…新潟県

九月十五日～十一月三十日

『全日本健康マージャン交流大会』（村上市）

『小倉百人一首かるた競技かるた全国大会』（長岡市）

『合唱の祭典』（上越市）

『日本舞踊の祭典』（新潟市）

四事業・四団体 総数六十六名

(9) 地方青年文化祭

県内青年の文化活動の促進、青年相互の交流、地域文化の振興を目指すもの。（令和元年十一月～令和二年二月、各教育事務所毎、県内七地区）

(10) 第六十七回宮城県青年文化祭

六月二日（七ヶ浜町 七ヶ浜国際村）

合唱二、舞台発表八、生活文化三、写真展一、将棋一、団体紹介一、以上十六団体百六十七名の出場参加数であった。当日の参加人数は観客を含め四百七十七名であった。受賞団体（者）は次のとおりである。

○青年大会部門

合唱の部 最優秀賞 黒川郡連合青年団合唱部

優秀賞 塩釜高校OG合唱団

舞台発表の部 最優秀賞 NaNa5931（歌唱・ダンス）

優秀賞 七ヶ浜翔舞連

優秀賞 月詠

優勝 千葉泰彦

○展示部門

生活文化展 優秀賞 「お皿」武田大地

(11) 第六十八回全国青年大会

十一月八日～十一日（東京都）

本県代表の受賞結果

○柔道 個人戦 七十三kg以下

準優勝 内海 隆寿

○将棋

四位入賞 千葉 泰彦

○合唱競技

優秀賞 黒川郡連合青年団合唱部

(二) 宮城県図書館

情報拠点としての図書館の機能を強化し、県民のより充実した生涯学習を支援するため、各種の展示や講座、子どもの本の移動展示会等多様な活動を展開している。

1 展示

(1) 常設展

「本と人の文化史 ―アジア・日本を中心に―」

(2) 企画展

① 「東日本大震災文庫展Ⅹ 災害にそなえるゝいまこそあらためて カクニンしようゝ」

平成三十一年三月九日ゝ令和元年六月九日

② 「改元記念 古典籍特別展示『万葉集』」

平成三十一年四月二十八日ゝ令和元年五月三十一日

③ 「漫画家生活四十周年記念 いがらしみきお展」

令和元年六月十五日ゝ九月八日

④ 「宮城県図書館改称百周年記念企画展 宮城「県立」

図書館から宮城「県」図書館へゝ資料で見るあの頃の図書館ゝ」

同時開催 「修復完了貴重資料特別展示『所々御境目

絵図』

令和元年九月十四日ゝ十一月十日

⑤ 「県立測候所物語」ゝ近代宮城の気象観測と災害ゝ

宮城県公文書館による展

令和元年十一月十六日ゝ令和二年三月一日

⑥ 「東日本大震災文庫展Ⅹ 1.17と3.11―ふたつの震

災がもたらした変化とこれからを考える―」

令和二年三月七日ゝ五月三十一日

(3) 子どもの本展示会

平成三十一年四月二十日ゝ令和元年五月十日

入場 三千八百十六人

子どもの本移動展示会

・県内市町村図書館・公民館 十六会場

入場 五千四十二人

・県内小中学校・特別支援学校 三十二会場

入場 一万一千八百四十三人

(4) 一般図書・児童視聴覚・資料情報・震災文庫各フロア

での季節・催事等に関する資料展示

平成三十一年四月ゝ令和二年三月

開催回数 八十回

(5) 情報エントランス(外部機関・団体によるパネル等展示)

平成三十一年四月ゝ令和二年三月

開催回数 九機関・団体 十回

2 講座・講演会等

(1) みやぎ県民大学専門施設開放講座

受講者 二十五人

災害・防災を知るゝ様々な視点からゝ

① 「高等学校における防災減災教育の取組」

令和元年八月二十四日

講師 宮城県多賀城高等学校

主幹教諭 原田 実

② 「県立測候所物語―近代宮城の気象観測と災害」

令和元年九月七日

講師 宮城県公文書館 専門調査員 松岡 祐也

③ 「文化遺産の防災・減災よりよい復興のために」

令和元年九月二十一日

講師 東北歴史博物館 主任研究員 小谷 竜介

④ 「宮城県図書館の震災伝承活動」

令和元年十月五日

講師 宮城県図書館 主事 日比 遼太

(2) ビブリオバトル

令和元年十一月九日

参加者 バトラー 六人

オーディエンス 二十人

(3) 第五十回子どもの本展示会記念講演会

「とよた かずひこ講演会」

平成三十一年四月二十八日

講師 絵本・紙芝居作家 とよた かずひこ

受講者 百五十人

3 各種上映会（ビデオ・DVD・LD・16ミリ）

上映回数二十五回

(1) 上映会

月一回（十二月を除く）

(2) こども映画会

①令和元年五月四日

②令和元年八月三日

③令和元年十一月九日

④令和二年一月十一日

⑤令和二年三月十四日

(3) 懐かしの16ミリ映画フィルム上映会

①令和元年六月八日

②令和元年十月五日

③令和二年二月二十二日

④ボランティアによる16ミリ映画フィルム上映会

①令和元年七月十三日

②令和元年十一月二十二日

(5) 出前による16ミリ映画フィルム上映会

①令和元年六月十四日

②令和元年十月十七日

③令和二年一月十六日

会場 県庁みやぎ広報室

④令和二年一月十五日

会場 女川町生涯学習センター

4 おはなし会

四月～三月

第一木曜日、第一～第四金曜日、毎週土曜日・

日曜日 実施

実施団体 七団体

5 親子新聞スクラップ道場

令和元年八月十日

参加組数 十二組 三十名

6 複製資料貸出

栗原市立図書館、塩釜高等学校外十六会場 十六回

(三) 宮城県美術館

様々な美術文化活動に積極的に参加できる多角的機能を備えた場、また、美術と関わりの深い表現領域にも接することのできる総合美術センターとして、展覧会（常設展・特別展）や、多くの講演会・各種の講座・音楽会等多彩な鑑賞・創作普及活動を積極的に展開している。

1 常設展

本館では、所蔵作品による展示を三ヶ月単位で入れ替え、特色ある展示を行い、収蔵作品等を用いて特集展示を開催した。また、毎月、美術館学芸員がギャラリー・トークを行った。佐藤忠良記念館では、佐藤忠良の彫刻・素描や他の作家の絵本原画などを三ヶ月単位で入れ替え、テーマ展示を行った。

(1) 特集「佐藤一郎」

四月十七日～六月三十日

(2) 特集「天野邦弘と現代の木版画」

七月三日～九月八日

(3) 特集「陶工・河合卯之助の図案」

九月十一日～十二月十五日

(4) 特集「小林正人」

一月二十二日～四月五日

2 特別展

(1) 「横山華山」

四月二十日～六月二十三日

鑑賞者数 一万七千七百三十五人

講演会 五月十八日・六月八日

まちなか美術講座 五月十一日

展示解説 四月二十七日、五月二十五日、六月一日、十五日

(2) 「平福百穂展」

七月十三日～九月一日

鑑賞者数 五千七百七十六人

講演会 七月十三日

まちなか美術講座 七月二十日

展示解説 八月三日、十七日

(3) 「ストラスブル美術館展」

九月十三日～十一月四日

鑑賞者数 三万二千十五人

まちなか美術講座 十月五日

展示解説 九月十六日、十月二十日

(4) 「アイヌの美しき手仕事」

柳宗悦と芹沢銈介のコレクションから」

一月二十五日～三月十五日

鑑賞者数 七千六百六十八人

講演会 一月二十五日

まちなか美術講座 二月一日

展示解説 二月十五日、二十四日、三月七日

ふれて楽しむアイヌ文化 三月八日

3 教育普及活動

自由に創作活動を楽しめるオープンアトリエ、各種テーマ

を設けたワークショップ、おとな（十八歳以上）を対象にした実技と鑑賞（見て、感じて、考える）の講座等、多彩な教育普及活動を実施した。

(1) オープンアトリエ

開館中随時

(2) ワークショップ

講師 美術館教育普及部職員

① なんでも相談

開館中随時

② 美術館探検「宮城県美術館を使って鑑賞の練習」

随時、団体に対して実施した。

③ 美術探検「鑑賞―常設展をめぐって」

随時、団体に対して実施した。

(3) 実技ワークショップ

① 「絵画の練習 室内風景から抽象へ」

四月十三日、十四日

② 「抽象を撮る 写真表現の可能性」

五月二十五日、二十六日

③ 「絵の色 絵具の層をつくる」

六月十五日、十六日

④ 「日本画の一局面『写生』再考」

七月二十七日、二十八日

⑤ 「陰影をポイントとして油彩画を描く」 高校生対象

八月十日、十一日

⑥ 「立体と彫刻 見る空間・占める空間」

九月十四日、十五日

⑦ 「石膏蠟型鑄造 手びねり蠟からブロンズへ」

十月六日、十二日、十四日、十九日、二十日、二十六日

十一月十日、十六日、十七日、二十三日、二十四日、三十日

⑧ 「塊 イメージ生成へ」

十二月十四日、十五日

⑨ 「始めての木工 うつわ編」

A日程 一月二十六日、三月二十二日

B日程 一月二十八日、三月二十四日

⑩ 「線をつくる ドローイングの世界に分け入る」

二月八日、九日

(4) どうぶきッズ・プログラム

毎月第一土曜日など

四月 「たんけんの日①」

五月 GW特別企画

「いろであそぶ かたちであそぶ」

六月 「たんけんの日②」

七月 「水とあそぶ日」

八月 夏休み特別編「たんけんの日③」

4 講演会、ギャラリー・トーク等の開催

(1) 特別展開連

① 「横山華山展」

講演会一「『祇園祭礼図巻』を読む―横山華山の描く華麗な祇園祭の世界―」

五月十八日

講師 八反裕太郎（本展監修・颯川美術館学芸員）

講演会二「横山華山ってどんな絵師？―近世京都画壇と横山華山―」

六月八日

講師 井上海

（元千代田区立日比谷図書文化館学芸員）

展示解説 四月二十七日、五月二十五日、六月一日、十五日

② 「平福百穂展」

講演会「百穂についての覚え書き」

七月十三日

講師 山本文志氏（秋田県立博物館学芸員）

展示解説 八月三日、十七日

③ 「ストラスブル美術館展」

展示解説 九月十六日、十月二十日

④ 「アイヌの美しき手仕事展」

講演会「アイヌの美 柳と芹沢のまなざし」

一月二十五日

講師 五十嵐聡美氏（本展企画委員会委員長、北海

道立近代美術館学芸統括官）

展示解説 二月十五日、二十四日、三月七日

ふれて楽しむアイヌ文化

【一】 ムックリ演奏体験

【二】 国立アイヌ民族博物館PR展示

三月八日

【一】 早坂ユカ氏（アイヌ文化継承者）

【二】 国立アイヌ民族博物館設立準備室

(2) 県民大学

「ことばと美術2」

① 「絵画をかたる言葉」

七月二十八日

② 「文字を観る？絵を読む？日本美術の『文字』と『絵』」

八月二十五日

③ 「モティーフとしての言葉 パウル・クレーの場合」

九月二十二日

④ 「『生きている画家』松本竣介の言葉、松本竣介をめぐる言葉」

十月二十七日

(3) 美術館講座

「scape『景』をめぐる」

① 西洋風景画の歴史から

「伝統への敬意と対抗心…コンスタブルとターナー」

三月八日

講師 杉村浩哉（栃木県立美術館主任研究員）

② 未来に残す「景觀」とは

「ランドスケープ遺産インベントリーをつくる保存

すべき風景とは何か、どう考えるのか」

三月十五日

講師 温井 亨（東北公益文科大学教授）

③ 音と人との関係を探る

「世界の聴診

サウンドスケープというアイディア」

三月二十二日

講師 永幡幸司（福島大学教授）

④ 写真を通して「日常」を見る

「コモンスケープ ありふれた風景」

三月二十九日

講師 和田浩一（美術館学芸員）

(4) 公演会

① 「MUSEUM・MUSIUM〜美術館で耳を澄まそう〜」

十二月十四日

(5) まちなか美術講座

会場 東北工業大学一番町ロビー

① 「再発見！横山華山」

五月十一日

講師 美術館学芸員

② 「東北ゆかりの日本画家 平福百穂」

七月二十日

講師 美術館学芸員

③ 「ストラスプール そのコレクションの魅力」

十月五日

講師 美術館学芸員

④ 「当館コレクションより

陶工・河合卯之助の図案と作品」

十一月三十日

講師 美術館学芸員

⑤ 「アイヌの工芸」

二月一日

講師 美術館学芸員

(6) コレクション展示ギャラリー・トーク

① 「佐藤一郎」

四月二十七日

② 「クレーとカンディンスキー」

五月二十五日

③ 「シーレとウィーン世紀末」

六月八日

④ 「佐藤一郎」

六月二十二日

⑤ 「天野邦弘」

七月十三日

⑥ 「日本の近現代絵画」

七月二十七日

⑦ 「学芸員のおすすめ」

八月十日

⑧ 「天野邦弘」

八月二十四日

⑨ 「河合卯之助の図案」

九月十四日

⑩ 「クレーとカンディンスキー」

九月二十八日

⑪ 「三浦コレクシヨン パリのポスター」

十月十二日

⑫ 「河合卯之助の図案」

十月二十六日

⑬ 「学芸員のおすすめ」

十一月九日

⑭ 「佐藤忠良と屋外彫刻」

十一月二十三日

⑮ 「小林正人」

一月二十五日

⑯ 「クレーとカンディンスキー」

二月八日

⑰ 「小林正人」

二月二十二日

⑱ 「学芸員のおすすめ」

三月十四日

⑲ 「日本の近現代絵画」

三月二十八日

5 県民ギャラリーの運営

県民の創作活動の発表及び鑑賞の場を提供するため、県民ギャラリーを運営した。

6 美術に関する調査研究

美術館の事業を充実するため、その基礎となる調査研究を行った。

7 美術作品の収集、保存

優れた美術作品や資料の散逸、損傷、亡失を防ぎ、これらの作品等を後世に伝えるため、正確な基礎調査に基づいて、美術作品・資料の収集、保存を行った。

8 広報

「令和元年度の催し」「美術館ニュース」「宮城県美術館マップ＆ガイド」「小中学生向けグループ学習用ガイド」等の広報資料や展覧会ごとにポスター・チラシ等を制作し、配布した。

また、美術館ホームページや共催メディア等の広報媒体を広く活用するとともに、ツイッターを利用し、広報活動の積極的な推進に努めた。

9 刊行物の出版

「美術館年報／研究報告」を発行し、美術館活動の成果を公表した。

10 その他

年間を通じて、芸術図書の閲覧サービス、ハイビジョンギャラリーでの美術作品等に関する上映を行った。

(四) 文化財課

表彰関係

令和元年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○寺崎の法印神楽保存会（石巻市）

令和元年教育功績者表彰

○佐々木 末治（大和町）

○坂元神楽保存会（山元町）

(五) 東北歴史博物館

1 特別展

(1) 東京藝術大学スーパークロウン文化財展

「最先端技術でよみがえるシルクロード

―法隆寺・敦煌莫高窟・バミヤン―」

期日 四月十九日～六月二十三日

・記念講演会

「スーパークロウン文化財による保存と公開」

開催日 四月二十日

講師 東京藝術大学名誉教授 宮廻 正明 氏

・ワークショップ

① 東京藝術大学ワークショップ「金魚の気持ち」

開催日 ①五月三日 ②五月四日 ③五月五日

② 東京藝術大学ワークショップ

「自分だけのクレヨンを作ろう!」

開催日 六月八日

③ 東北歴史博物館ワークショップ

「レプリカを作ってみよう!」

開催日 ①四月二十七日 ②五月二十五日

講師 東北歴史博物館職員

・ギャラリートーク

開催日 ①五月十九日 ②六月二日 ③六月十六日

講師 東京藝術大学社会連携センター研究員ほか

・展示解説

開催日 会期中の毎週日曜日

解説者 東北歴史博物館職員

・スポット解説

開催日 会期中（五月十六日以降）の毎週火曜日・木曜日
解説者 東北歴史博物館職員

(2) 「モダンデザインが結ぶ暮らしの夢」

期日 七月十三日～九月一日

・講演会

「ブルーノ・タウトの業績と宮城での活動」

開催日 八月十一日

講師 お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明 氏

東北工業大学名誉教授 庄子 晃子 氏

・展示解説

開催日 会期中の毎週水曜日

解説者 東北歴史博物館職員

・ちょこつと解説

開催日 会期中の毎週土曜日・日曜日・祝日

（八月十一日を除く）

解説者 東北歴史博物館職員

(3) 東北歴史博物館開館二十周年記念

宮城県多賀城跡調査研究所設立五十周年記念
特別展「蝦夷―古代エミシと律令国家―」

期日 九月二十一日～十一月二十四日

・特別講演会

「古代東北統治の拠点 多賀城」

開催日 八月二十四日

講師 元多賀城跡調査研究所長 進藤 秋輝 氏
・記念講演会

① 「律令国家と蝦夷」

開催日 九月二十三日

講師 大学共同利用機関 人間文化研究機構理事

東京大学名誉教授 佐藤 信 氏

② 「古代蝦夷研究の現在」

開催日 十一月三日

講師 東北学院大学名誉教授 熊谷 公男 氏

・蝦夷講座

① 「蝦夷以前の東北―倭国の北縁―」

開催日 九月二十九日

講師 東北大学総合学術博物館長 藤澤 敦 氏

② 「本州北縁地域の蝦夷社会とその暮らし」

開催日 十月六日

講師 八戸市埋蔵文化財調査センター

是川縄文館発掘専門員 宇部 則保 氏
③ 「前九年・後三年合戦と平泉」

開催日 十月十三日

講師 岩手大学教授 樋口 知志 氏

④ 「最北の古代城柵 秋田城と蝦夷社会」

開催日 十月二十日

講師 秋田城跡歴史資料館事務長 伊藤 武士 氏

⑤ 「移民を東北へ、蝦夷を全国へ」

——律令国家の移民政策——

開催日 十月二十七日

講師 村田 晃一（多賀城跡調査研究所）

・多賀城講座

① 「多賀城跡調査研究所 発掘調査五十年のあゆみ」

開催日 十一月九日

講師 高橋 栄一（多賀城跡調査研究所）

② 「辺国から古代都市を考える——陸奥国府多賀城と賀美郡家東山官衙遺跡群の成果——」

開催日 十一月九日

講師 村田 晃一（多賀城跡調査研究所）

③ 「考古学からみた『伊治公麻呂の乱』」

開催日 十一月十六日

講師 村上 裕次（多賀城跡調査研究所）

④ 「発掘資料から多賀城と馬のかかわりを探る」

開催日 十一月十六日

講師 高橋 透（多賀城跡調査研究所）

⑤ 「東北経営を支えた二つの製鉄炉

——亘理南部製鉄遺跡群を中心に——」

開催日 十一月二十三日

講師 下山 貴生（多賀城跡調査研究所）

⑥ 「古代多賀城にはどんな建物が建っていたのか

——城前官衙の復元——」

開催日 十一月二十三日

講師 白崎 恵介（多賀城跡調査研究所）

・アニメ「アテルイ」上映会

開催日 八月二十四日

・展示解説

開催日 会期中の毎週土曜日

解説者 東北歴史博物館職員

2 パネル展

(1) 「古海図で見る東北の港の今昔」

期日 九月三日～九月十六日

主催 第二管区海上保安本部 共催 東北歴史博物館

(2) 開館二十周年記念パネル展

「東北歴史博物館二十年のあゆみ」明日へ、そしてその先の未来に向かって」

期日 十月二十二日～十二月一日

(3) 「記念物百年展」

期日 一月七日～二月九日

主催 文化庁 共催 宮城県教育委員会

3 館長講座

「祭礼・年中行事と芸能」

第一回 「春祈禱と神楽（代神楽）」

期日 五月十八日

第二回 「予祝と豊作占い」

期日 六月一日

第三回 「修正会と田楽・田植踊」

期日 六月十五日

第四回 「七夕と盆」

期日 七月六日

第五回 「東北の祖霊信仰と十三仏」

期日 七月二十日

第六回 「鹿踊と剣舞」

期日 八月四日

第七回 「収穫祭」

期日 八月十七日

第八回 「神楽（出雲流神楽）」

期日 九月七日

4

博物館講座

(1) 古文書講座

入門編

期日 八月二十五日・九月二十二日・十月二十六日

中級編

期日 十一月二十四日・十二月二十二日・一月二十六日

日・二月二十三日

講師 東北歴史博物館職員（入門編、中級編いずれも）

(2) 史料講読講座

期日 五月十九日・六月十六日・七月十四日

講師 東北歴史博物館職員

(3) 民俗芸能講座

第九回 「注連縄と七五三縄」

期日 九月二十一日

第十回 「神の魂鎮め（霜月神楽）」

期日 十月五日

第十一回 「節分」

期日 十月十九日

第十二回 「灌頂と正月の門松」

期日 十一月二日

講師 東北歴史博物館長

「東北地方の田植踊」

期日 一月十二日・二月九日・三月十五日（中止）

講師 東北歴史博物館職員

れきはく講座

5 体験教室

講師 東北歴史博物館職員

（第一～第八回いずれも）

第一回 「多賀城碑の里程と国号の謎に挑む」

期日 一月十八日

第二回 「文化財を真似（まね）るゝ文化財の複製・レプリカの技術について」

期日 一月二十五日

第三回 「建築を伝えるわざ」

期日 二月一日

第四回 「なんでも聞いてやろう！～BCLブームと若者の時代～」

期日 二月八日

第五回 「まだまだあった！東北の仏像と仏画」

期日 二月二十二日

第六回 「阿弓流為（アテルイ）と坂上田村麻呂」

期日 二月二十九日（中止）

第七回 「貞観津波堆積層の構造と珪藻分析」

期日 三月七日（中止）

第八回 「小池曲江の新出資料について」

期日 三月十四日（中止）

第一回 「板状土偶を作ろう！」

期日 七月二十日

第二回 「ミニはぎとり体験！」

期日 七月二十七日

第三回 「七夕かざりを作ろう！」

期日 八月三日

第四回 「石帯を作ろう！」

期日 八月十日

第五回 「色ウルシのコースターを作ろう！」

期日 八月十七日

第六回 「末期古墳を作ろう！」

期日 八月二十四日・八月三十一日

第七回 「小正月のまゆ玉を作ろう！」

期日 一月十一日

第八回 「ミニ屏風を作ろう！」

期日 一月十三日

第九回 「トンボ玉を作ろう！」

期日 一月十八日

第十回 「むかしのハンコを作ろう！」

期日 一月二十五日

6 展示解説

期日 随時

講師 東北歴史博物館職員

7 多賀城跡巡り

期日 五月～十月の主に第二・第四日曜日

講師 東北歴史博物館職員

8 お弁当をもって花と歴史のハイキング

期日 四月十三日・六月二十九日・九月二十八日

講師 東北歴史博物館職員

9 民話を聞く会

期日 五月十九日・七月二十一日・九月十五日

講師 多賀城民話の会・利府民話の会

10 民話を語ろう

(1) 民話にふれよう

期日 十月十二日

(2) 語り 多賀城民話の会・利府民話の会
民話を語ろう

期日 十月二十七日・十一月三日・十一月十日・十一月十七日

講師 利府民話の会

参加者 小学生

11 民話実演会・講演会

「次世代への民話伝承について考える」

期日 一月十九日

第一部 「こどもが語る民話」

実演者 小学生の民話語り手体験生

第二部 「民話が語られた風景」

聞き手 みやぎ民話の会顧問 小野 和子 氏

実演者 山形・宮城の民話語り手

12 体験イベント

(1) 「春のわくわく体験見本市二〇一九」

期日 五月十一日

(2) 「秋の『見』覚まるかじり博物館二〇一九」

期日 十月十二日

(3) 「冬も元気にはくぶつかん！二〇二〇」

期日 二月十五日

13 調査研究

歴史・文化に関する分野を対象とし、東北全体を視野に入れた調査研究活動を展開して、その成果を定期的に公開した。

三 (公財) 宮城県文化振興財団

(平成四年十月一日設立 理事長 宮原 賢一)

1 文化芸術に係る鑑賞及び参加の機会の提供並びに情報の発信

(1) 鑑賞機会の提供

イ 東京エレクトロンホール宮城における鑑賞及び参加の機会の提供

① 春風亭昇太さんとブルースカイオーケストラさん

期日 七月七日

会場 東京エレクトロンホール宮城

曲目 昭和のCMソング「レナウン」、「National」、

「コンバット」他

出演 春風亭昇太、ザ・ブルースカイオーケス

トラ 他

② 市川海老蔵「古典への誘い」

期日 四月二十三日

会場 東京エレクトロンホール宮城

演目 「傘之段」、「矢の根」、「口上」、「嫩」

出演 市川海老蔵、市川右團次 他

③ 松竹大歌舞伎公演

期日 七月十一日

会場 東京エレクトロンホール宮城
演目 「口上」、「双蝶々曲輪日記 引窓」、

「色彩間苳豆 かさね」

④ 出演 松本白鸚、松本幸四郎、市川猿之助 他
辻井伸行・ルシエンヌ パトリック・ハーン指揮
オーケストラ・アンサンブル金沢

期日 七月二十五日

会場 東京エレクトロンホール宮城
曲目 モーツァルト…ピアノ協奏曲第27番
K.595 他

出演 辻井伸行(ピアノ)、

ルシエンヌ(トランペット)、

パトリック・ハーン(指揮)、

オーケストラ・アンサンブル金沢

⑤ NISSAY OPERA2019 ヒッセイ名作シリーズ2019

期日 十月三十一日

会場 東京エレクトロンホール宮城

演目 ヘンゼルとグレーテル

出演 角田鋼亮(指揮)、NHK仙台少年少女

合唱隊、仙台フィルハーモニー管弦楽団

⑥ 定禅寺写真展

期日 十二月二日～八日

会場 東京エレクトロンホール宮城 五階 展示室
作品 宮城県文化振興財団賞「入魂」阿部 長一
宮城県芸術協会賞「イルミネーションin

勾当台公園」斎藤 清 全百三十二点

⑦ 佐渡裕指揮 兵庫芸術文化センター管弦楽団
創立十五周年記念特別演奏会

期日 一月二十九日

会場 東京エレクトロンホール宮城
曲目 ベートーヴェン…ピアノ協奏曲第5番
変ホ長調 作品73「皇帝」他

出演 佐渡裕(指揮)、兵庫芸術文化センター

管弦楽団、エフゲニ・ボジャノフ(ピアノ)

⑧ 笑いの芸術 野村万作・萬斎 狂言公演

期日 一月三十一日

会場 東京エレクトロンホール宮城

出演 野村万作、野村萬斎、石田幸雄 他

演目 小舞「名取川」
狂言「鍋八撥」「咲嘩」

ロ 地域文化会館との共催事業

① 陸上自衛隊東北方面音楽隊コンサート2019

期日 五月二十六日

会場 多賀城市民会館 大ホール

曲目 アヴェ・マリア、大空を越えて、ドラゴ

ンクエスト序曲 他

出演 陸上自衛隊東北方面音楽隊

② ふたり昭和歌謡祭出張公演 in 蔵王

期日 六月九日

会場 蔵王町ふるさと文化会館

曲目 勝手にしやがれ、恋の季節 他

出演 ティーナ・カリナ、エムサイズ佐久間 他

③ 仲道郁代ピアノ・リサイタル〜いつもあなたと

シヨパン〜

期日 九月一日

会場 七ヶ浜国際村

演目 ワルツ 第一番「華麗なる大円舞曲」作

品18変ホ長調 他

出演 仲道郁代（ピアノ）

④ 第15回 ときめき市民コンサート

期日 九月十五日

会場 登米祝祭劇場

曲目 世界の合唱曲「ハレルヤ」、日本抒情歌

曲集「椰子の実」 他

出演 とめ市民合唱団、ゲスト キハラ良尚

（指揮）、魚谷絵奈（ピアノ）

⑤ ウィーン―ベルリンプラス・クインテット

期日 九月十九日

会場 仙南芸術文化センター

演目 J. ハイドン…オラトリオ「天地創造」

Hob.XXI:2〜大いなるみわざは成就し

他

出演 ガボール・タルケヴィ（トランペット）、

ギヨーム・イエール（トランペット）、トー

マス・イエプストル（ホルン）、マーク・

ガール（トロンボーン）、アレクサンダー・

フォン・プットカマー（テューバ）

⑥

ドラゴンクエストの世界 すぎやまこういち交響

組曲「ドラゴンクエストV」天空の花嫁

期日 十一月三日

会場 名取市文化会館 大ホール

曲目 王宮のトランペット、街角のメロディ他

出演 佐々木新平（指揮）、山形交響楽団（管

弦楽）

⑦

まほろばお好み演芸会「魅知国たいわ寄席」

期日 一月十九日

会場 大和町ふれあい文化創造センター

演目 落語、和太鼓、漫才、講談、マジック

出演 六華亭遊花、神田鯉栄ほか

⑧ いわぬまサロンコンサート2019百花繚乱シリーズ特別企画 岩沼市民音楽家とハナミズキ室内合奏団との共演

期 日 二月二日

会 場 岩沼市民会館

演 目 神々しい光の永遠の源よ、ピチカートポ
ルカ、春の海他

出 演 小野綾子（ソプラノ）、関野由美子（箏）、
ハナミズキ室内合奏団

(2) 参加する機会の提供

① 子どもが主役のワークショップタイム！みやぎアー
トファミリアの日

期 日 美術タイム 九月十五日、十月六日、十一
月二日

演劇タイム 九月二十一日、十月二十六日、
十一月十六日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 会議室棟
講 師 佐野美里、佐久間茜、メリーメリークリス
マスランド、仙台シアターラボ
対 象 幼児から大人まで

(3) 文化芸術に係る情報の収集及び提供

① ホームページの管理運営

ホームページ等を活用し、県民に文化施設、文化団
体の状況及びその催事等の情報を提供した。

(4) 文化芸術活動に係る人材の育成及び体験機会の提供

① 文化芸術ボランティア育成事業

期 日 通年（東京エレクトロンホール宮城におけ
る鑑賞の機会の提供にて実施）

会 場 東京エレクトロンホール宮城

内 容 鑑賞事業におけるボランティア業務（チラ
シ配付・会場案内等）

② 鑑賞入門講座

(イ) 松竹大歌舞伎プレセミナー

期 日 七月五日
会 場 東京エレクトロンホール宮城 六〇一会
議室

講 師 葛西聖司

内 容 古典芸能を深く理解してもらうため、見
どころ等を解説。

(ロ) 笑いの芸術「野村万作・萬斎 狂言公演」プレセ
ミナー

期 日 令和二年一月二十日
会 場 東京エレクトロンホール宮城 六〇一会
議室

講 師 石田 幸雄
内 容 「野村万作・萬斎 狂言公演」見どころ
の解説、基本的な演技の体験

③ 芸術銀河アウトリーチ市町村事業

期 日 九月四日～三月十日

会 場 県内小中学校他

講 師 東京パリアンサンブル、加藤直明（トロン
ボーン）、中川賢一（ピアノ）、荒川洋（フ
ルート）、山形交響楽団団員他

内 容 生の芸術に触れる機会が少ない児童・生徒
に、鑑賞の機会を提供するいわゆる「アウ
トリーチ活動」として実施したもの。

④ 芸術銀河アウトリーチ普及事業

期 日 八月二十八日～二月五日

会 場 加美町立鳴瀬小学校 他、県内の小中学校
十四校

出 演 ほうねん座、仙台チェンバーアンサンブル、
櫻井希、田原さえ 他

⑤ みやぎ心の復興「ゴスペルワークショップ」

期 日 多賀城市・山元町共通 八月二十四日、
九月七日、二十一日、二十九日、十月二十
日、十一月九日

会 場 多賀城市山王地区公民館・山元町中央公民館
講 師 ジョン・ルーカス

内 容 沿岸部の被災地住民の心のケアを目的とし
たゴスペルワークショップ

⑥ みやぎ心の復興「朗読講座」

期 日 亘理 九月四日、十八日、十月二日、
十六日、三十日、十一月六日、二十日、
十二月四日、十八日

南三陸 九月十日、二十四日、十月八日、
十一月五日、十九日、十二月十日、二十四
日、一月七日、二十一日

亘理町立図書館、南三陸町生涯学習セン
ター

会 場 亘理町立図書館、南三陸町生涯学習セン
ター

講 師 渡辺祥子

内 容 沿岸部の被災地市民の心のケアを目的に実
施。

主に東北にゆかりのある作家の小説（昔話）
をテキストに使用。

⑦ 心の復興支援事業（県受託事業）

期 日 十月二十四日、二十五日、二十八日

会 場 南三陸町立志津川小学校

講 師 行山流水戸辺鹿子躍保存会 他

内 容 地域芸能アウトリーチ

⑧ ジュニアジャズミーティング in みやぎ

期 日 九月八日

会 場 東京エレクトロンホール宮城

出 演 石巻ジュニアジャズオーケストラ、スウィング・リバイティ・パイレーツ、登米ジュニア吹奏楽団、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ、スウィング・ドルフィンズ、

神奈川県 開成ジュニアアンサンブル、ブルーバード、ブライト☆キッズ、青森県

八戸ジャズ楽団ジュニア、仙台高等専門学校

校名取キャンパス吹奏楽部

2019 音楽アウトリーチ事業

期 日 九月十二日、十一月二十九日

会 場 亘理町立高屋小学校 他、県内の小中学校

十 校

出 演 トリオみゆう、ムジカノヴァ、最上陽子、大岩千華、木村麻衣子 他

(5) 文化芸術の振興及び支援

① 第四十四回東北現代工芸美術展（六月十四日～十九日、仙台メディアテーク、現代工芸美術家協会東北会）

② 第四十七回宮城県おかあさん合唱祭（六月十六日、多賀城市文化センター、宮城県おかあさん合唱連盟と共催）

③ 第七十一回全日本合唱コンクール宮城県大会（八月二十四日～二十五日、名取市文化会館、宮城県合唱連盟と共催）

④ 2019 仙台オペラ協会第四十四回公演「メリー・ウイドウ」（九月二十八日～二十九日、東京エレクトロンホール宮城、仙台オペラ協会と共催）

⑤ 第五十六回宮城県芸術祭（九月二十日～三月八日、せんだいメディアテーク他、宮城県芸術協会と共催）

⑥ 第二十三回みやぎ県民文化祭（十月二十六日～二十七日、白石市文化体育活動センター、宮城県文化協会連絡協議会と共催）

⑦ 第二十八回河北工芸展（十一月六日～十一日、東北福祉大学仙台駅東口キャンパス「TFUギャラリー Mini Mori」、河北文化事業団と共催）

⑧ 令和元年度宮城県写真展（一月二十八日～二月二日、宮城県美術館、宮城県写真連盟と共催）

⑨ 第六十五回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会（十一月

十日、松島町瑞巖寺本堂他、宮城県俳句協会と共催）

⑩ みやぎミュージックフェスタ2019 in しらいし
（三月十五日、白石市文化体育活動センター、みやぎ
ミュージックフェスタ2019 in しらいし実行委員会
と共催）

⑪ 第五十回洋舞公演（十一月十七日、東京エレクトロ
ンホール宮城、宮城県洋舞団体連合会と共催）

(6) 文化芸術活動支援事業

① 文化団体等支援事業 二十二件（上期五件、下期
十七件）（二月一日現在）

② 文化団体等震災復興支援事業 四件（上期一件、下
期三件）（二月一日現在）

③ 文化団体等人材育成支援事業 六件（上期二件、下
期四件）（二月一日現在）

④ 文化団体等地域連携支援事業 二件（上期一件、下
期一件）（二月一日現在）

⑤ 東日本大震災備品整備支援事業 〇件（上期〇件、
下期〇件）

⑥ 市町村支援事業 二件（上期〇件、下期二件）（二
月一日現在）

⑦ 名義後援事業

(7) 文化芸術活動に係る国際交流の推進及び支援

① 文化団体海外公演支援事業 二件（上期一件、下期
一件）（二月一日現在）

② 歌舞伎鑑賞講座事業

期 日 七月八日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 六〇二中会

議室

講 師 深澤 昌夫（宮城学院女子大学教授）

内 容 県内に在住する外国人留学生等に対し日本
の伝統文化である歌舞伎の理解を深めてい
ただくため、入門講座を開講した。

(8) 東京エレクトロンホール宮城管理運営業務

① 会館全体の管理運営。施設の使用許可申請の許可並
びに利用料金の徴収・収納他

② （公社）全国公立文化施設協会、同東北支部、宮城
県公立文化施設協議会に関する業務

四 (公財) 慶長遣欧使節船協会

(平成四年一月二十二日設立 代表理事 一力 雅彦)

1 ミュージアム管理事業

復元船サン・ファン・パウティスタを貴重な県民の財産として維持管理するため、適切な補修等を実施し、併せて船舶技術・船舶文化に関連する資料を展示するなど慶長使節の偉業と帆船文化に関する事業の充実に努め、各種関連団体と連携を図りながら、企画事業等を実施した。

2 復元船管理事業

老朽化に直面している復元船については、指定管理者として宮城県や復元船建造企業など専門知識を有する方々などと協議しながら、適切な保存管理方法などを検討し、展示を継続した。(乗船中止措置は平成二十八年三月より継続)

3 企画事業

サン・ファン友の会等との関係団体と積極的に連携を図りながら、地域の再生・文化振興に歴史・文化の分野から貢献できるよう、体験型のイベントや学校教育活動等の事業の充実に努めた。

(1) サン・ファン館GW関連イベント

期間 四月二十七日～五月六日

会場 サン・ファン館

内容 最大十連休となったGWに合わせて、お菓子つかみ取り、来場者プレゼント、昔の遊び体験、記念撮影コーナー、かぶと作り体験など様々なイベントを開催した。

(2) 第二十六回サン・ファン祭り(共催事業)

期 日 五月二十六日

会場 サン・ファンパーク及びミュージアム内

内容 地域の小学生による鼓笛隊や、地域団体によるダンス、郷土芸能など、各種イベントを行った。また、当日は入館料を無料とし、館内でもイベントを行った。

(3) サン・ファン歴史講座「慶長使節が育んだ世界」

期間 六月～十一月までの月一回土曜日(全六回)

会場 サン・ファン館 セミナールーム

内容 「慶長使節やサン・ファン・パウティスタ、伊達政宗」をテーマとした濱田館長による連続講座を行った。

(4) 体験学習 木工教室「帆船づくり体験」

期間 七月二十七日・二十八日

会場 サン・ファン館 ワークショップ

内容 船大工道具を使って木造の帆船を制作すること、大工の技術を体験しながら学んでもらうための木工教室を開催した。

(5) 企画展「サン・ファン号のすべて—1993～2021—」

期間 九月二十六日～令和二年三月二十六日

会場 サン・ファン館 企画展示室・ロビー

内容 サン・ファン号について歴史や技術など様々な視点から紹介する企画展を開催した。

(6) サン・ファン絵画教室「サン・ファン・バウティスタをテーマに君の夢を自由に描こう!」

期日 八月十一日

会場 サン・ファン館 会議室

内容 画家小野寺純一先生による絵画教室を行った。

(7) 小野寺純一先生のミニ絵画展「てくてく なつかし海の町」

期間 八月一日～九月一日

会場 サン・ファン館 展望棟ロビー

内容 絵画教室に併せて、コンクール審査委員長小野寺純一氏の絵画展を行った。

(8) 第十一回サン・ファン絵画コンクール

期間 十一月二十三日～令和二年一月十九日

会場 サン・ファン館 展望棟エントランス

内容 夏季から秋季にかけて慶長使節をテーマとした絵画作品を募集し、その後応募作品の展示を行った。

(9) サン・ファン出前講座—希望の帆船サン・ファン・バウティスタ号について学ぼう—

内容 当協会職員が各学校へ出向き、地域の高学年児童向けの講座を実施した。

(10) 絵本「おしかがえし」原画展—ぼくがであったむかしむかし—(共催事業)

期日 十月二十一日～十一月十七日

会場 サン・ファン館ロビー

内容 東北学院大学加藤幸治ゼミナールが鮎川をテーマに作成した絵本「おしかがえし」原画の展示・絵本の配布を行った。

(11) サン・ファン・バウティスタ出帆記念イベント(共催事業)

期日 十月二十七日

会場 サン・ファン館内

内容 出帆記念日に合わせて、伊達武将隊と支倉家第十四代当主とのトークショー、お笑い、郷土芸能などのステージイベント、学生茶席、

昔の遊び体験などの各種館内イベントを実施した。

- (12) 令和元年度シンポジウム「時空（とき）をむすぶ帆船——帆船海王丸とサン・ファン・パウティスタ号が育んだ世界——」（共催事業）

期 日 十一月十七日

会 場 サン・ファン館セミナールーム

内 容 サン・ファン号と帆船海王丸の両船を結び、それぞれが育んだ歴史や文化、現代において担うべき役割などについて話し合った。

- (13) サン・ファン・イルミネーション二〇一九

期 間 十一月八日〜令和二年一月五日

会 場 サン・ファン館

内 容 サン・ファン・パウティスタ号へ電飾を施し、期間中夜間にライトアップを行った。また今年には隣接するサン・ファンパークに二万球の電飾を設置し、拡充に努めた。（展望棟と合わせて合計約四万球）

- (14) ファンタジーフェスタ二〇一九

期 日 十二月二十一日

会 場 サン・ファン館（展望棟）

内 容 夜間開館に合わせ、ワークショップやゲーム

コーナーなど、親子で楽しめるクリスマスイベントを開催した。

令和元年度 芸術選奨

●美術（日本画）



三浦 長悦
みつうら ちやうえつ

昭和十年生まれ

基礎を大切に、地道な努力を重ね、優れた風景画を発表し続けている作家である。氏の作品は、奇をてらわず、真正面から対象にアプローチし、風景の中に人間の生活、気配が感じられ、そのことが作品をより魅力的にしており、作者である氏の誠実さが反映されたものと言える。これまで、日本美術院院友、宮城県芸術協会絵画部運営委員、河北美術展招待作家として、作品の制作及び発表を続ける一方、後進の指導にも当たってきた。

平成三十年度は、再興第百三回院展入選や、第七十四回春の院展入選、河北美術展をはじめとする公募展への招待出品等の活動が高く評価された。

シャープで力強い氏の作品は、本県の日本画界に刺激を与え、付加するものが多く、本県の日本画界をけん引していくことが期待される。

●美術（彫刻）



土門 邦勝
どもん くにかつ

昭和二十年生まれ

土を素材に、現代美術と工芸の枠を越え、独創的な立体造形作品を長年にわたり発表してきた。昭和五十六年に第六回日本陶芸展外務大臣賞を受賞し、昭和五十六年度宮城県芸術選奨新人賞（美術（工芸）部門）を受賞して以後も、数多くの個展や全国規模のグループ展、その他野外展等での作品発表を通し、工芸界のみならず、現代美術界に新たな方向性を示してきた。また、美術教諭として五十年近くにわたる美術教育と指導、作品の発表などを通して地域文化の向上に多大な貢献が認められる。

平成三十年度は、仙台アーティストランプレイスで開催した個展での、近年の立体造形作品と写真作品との同時発表・展示が高く評価された。

今後、土による新たな表現の可能性に挑戦し、追求を深め、展開すること、美術界に大いなる刺激と感動をもたらし、地域文化の向上への更なる寄与が期待される。

●美術（書）



たわら
まさはる
田村 政晴

昭和二十年生まれ

昭和五十年の毎日書道展入選、河北書道展特選といった功績により、昭和五十三年度宮城県芸術選奨新人賞を受賞して以後、毎日書道展、産経国際書展、河北書道展等で作品の制作・発表を続けてきた。また、近年は産経国際書展常任顧問、宮城県芸術協会参事、河北書道展企画会議副議長・運営委員、書成会名誉会長、岩沼桃源会会長として、熱心に後進の指導にも取り組んできた。

平成三十一年二月にセントラルミュージアム銀座で開催した「書成会書展第三十回記念田村政晴書展」は、自らの書にとつての集大成とも言えるもので、その作品群は、淡墨から濃墨まであらゆる墨の表現方法を駆使し、飽くなき表現者としての意欲を遺憾なく発揮するものだった。

今後、墨による書表現の可能性の深まりが期待されるとともに、書の伝統を多くの人に伝え広げていくことが望まれる。

●美術（写真）



しが
りえこ
志賀 理江子

昭和五十五年生まれ

写真は、属性のひとつである「記録性」から、「時間と空間」という言葉を用いて説明されるが、氏の写真作品は、それらが重層的な構造を持っているため、演出された写真であっても、まるで既視感が反転したような、あるいは、未来を予見させるような独特で不思議なリアリティーを持っている。

平成三十一年三月から開催された「ヒューマンズプリング」展も例外ではなく、氏の作品の特徴ともいえる神話性とリアリズムが描かれ、光と影、貴と賤、善と悪、美と醜、此岸と彼岸、それら相反する事物が、繰り返されるイメージの中で対立も無秩序に混交することなく、紛れもなく相補的に存在していた。

平成二十四年度宮城県芸術選奨新人賞受賞に続く芸術選奨の受賞であり、氏のミクロでありかつ、マクロであるような世界観を構築する稀有な能力は、写真に携わる者のみならず、映像全般、文学、芸能など、広く表現に携わる人々に間違いなく今後も影響を与え続けていくと期待される。

● 文芸



須藤 洋平
すとう ようへい

昭和五十二年生まれ

「トゥレット症候群」という障害を持った心象の不安を率直に引き受けながら、自問し、内向し、外界へと必死に切り結ぼうとし続け、詩想を深めた優れた詩作を続けている。第一詩集「みちのく鉄砲店」で第十二回中原中也賞を受賞して以来、第二詩集「あなたが最期の最期まで生きようと、むき出しで立ち向かったから」では、第二十七回詩歌文学館賞を受賞し、その功績から平成二十三年度宮城県芸術選奨新人賞を受賞している。

平成三十年九月に刊行した「赤い内壁」でも、独自の視点や精神から、現代詩の新しい領域を切り開いていく力を感じさせた。

今後、シユール的な手法、修辭の技巧などを駆使し、更に自在な作品の展開が望め、県内外での幅広い活躍が期待される。

● 演劇



白鳥 英一
しらとり えいいち

昭和四十六年生まれ

仙台を代表する俳優として、様々な舞台に出演している。また、劇作家・演出家としても、芦口十三の名義で、長編、短編を含め、水準の高い舞台作品の創作・演出を数多く手がけてきた。氏は、その高い演技力と、包容力のある人柄から、多数の劇団の客演依頼を受ける一方、自らが主宰を務める「劇団鳥や」では、ワークシヨッブやリーディングに積極的に取り組み、後進の育成に努めている。

平成三十年度は、「鳥屋のこてん2『アン・Anne』」での俳優と人形が一体となった演出が高い評価を得たほか、専門学校デジタルアーツ仙台声優科卒業公演「11人でいいの・・・」の脚本・演出など、精力的な活動が目を引いた。

今後、俳優、劇作家、演出家としてのより一層の活躍と、その優れた指導力を存分に発揮し、本県の演劇界の将来を担う人材を育成・輩出していくことが期待される。

●メディア芸術



やまざき かんいち
山寺 宏一

昭和三十六年生まれ
日本が世界に誇るアニメーションの世界で「七色の声を持つ男」の異名をとる自在な声帯技術を活かして、声による芸術表現の可能性の幅を拡げてきた。氏の表現の場はアニメーションに留まらず、外国映画の吹き替えも数多く務めるほか、司会業で見せる巧みな話術や明るいキャラクターにより老若男女幅広い方々から好感度を得ている。また、出身地である本県への支援の姿勢は東日本大震災の以前から一貫しており、大小を問わず、県内の復興支援活動に数多く参加を続けてきた。

平成三十年度は、アニメーション作品への出演のほか、「GAMA ROCK FES 2018」や「石ノ森萬画館×感伝祭2018」といった県内イベントへの出演でも注目を集めた。

メディアミックスが広がりを見せる現代の文化状況において、声優という存在は二次元と三次元をまたぐ立体的な表現手法として大きな可能性を持ち、国際的なアニメ・ブームの中でも注目を集めており、氏の幅広い活動は、本県出身者として県の活性化にも大きく連動していくことが期待される。

芸術選奨新人賞

●美術（洋画）



たなか もちずき
田中 望

平成元年生まれ

地域のアートプロジェクトに多数参加し、積極的に地域調査、フィールドワークを行うようになり、それに基づいた表現を行ってきたかのように見えるが、氏の作品は、多くの地域アートやドキュメントに基づいた直接的表現とは一線を画している。氏の言葉によれば、「地域」というより、「場所」のローカリズムだけではなく、グローバルズムに侵された「没場所性」を重層的に捉え、作品は制作されている。そこでは直線的な表現は見られず、むしろ、ドキュメントから自律した、繊細な画面が作られている。また、伝統的な洋画では使わない、岩絵の具や墨などを使用し、密度高く大画面の作品を作り上げている。

平成三十年七月のグループ展「氏家昂大・田中望展 土のまち土のさち」、平成三十一年二月の「アートみやぎ2019」出展など、氏の創作活動は高く評価されている。

今後、自律した絵画の密度だけではなく、より複合的で多様な存在形式を持つ作品群の関係を作り出していくことが期待される。

●音楽



にしもと
西本 幸弘
ゆきひろ

昭和五十九年生まれ

仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターとして定期演奏会への出演のほか、グループ「Rain Cats & Dogs」のライブコンサートや、ソロリサイタルツアーの開催、CDリリースなど、着実に演奏活動を続けている。ソロリサイタルツアーでは、各地の高校吹奏楽部などを対象としたワークショップも開催し、発見を伴った音楽を創る喜びを伝えているほか、メインパーソナリティとして出演するTBCラジオ「日立システムズエンジョイ! クラシック」でも、毎回、中高生が出演し、トークを行うなど、若い世代への音楽啓もう活動を行っている。また、Date fm「TOHknet Sound Pizz.」にもレギュラー出演し、ジャズ、ロック、R&Bなど、幅広い音楽を取り上げている。

平成三十年度は、九州交響楽団のコンサートマスターへの就任に加え、ソロリサイタルツアー「[VIOLINable discovery vol.5]」の開催など、幅広い演奏活動を展開した。

今後も仙台フィルハーモニー管弦楽団の更なる飛躍に貢献するとともに、若い世代のけん引役としての活躍が期待される。

●舞踊



くじらい
鯨井 謙太郎
けんたろう

昭和五十五年生まれ

笠井勲氏に師事し、オイリュトミー・シユールレ天使館第三期修了後、天使館の国内外での公演に多数出演。定方まこと氏と結成したユニット「CORVUS」として、東京、仙台を中心に精力的に舞台活動を行い、意欲的、継続的に作品を発表している。

平成三十年度は、笠井瑞丈氏とのデュオ作品「笠井瑞丈×鯨井謙太郎『暁ニ告グ』」仙台公演や、奥山ばらば氏との新作デュオ作品「阿吽山水 A HUM SAN SU」の上演などの活動が高い評価を集め、「阿吽山水 A HUM SAN SU」での舞台表現は、第五十回舞踊批評家協会新人賞を受賞した。

今後は、海外公演への積極的な参加や、近年行ってきた様々な分野の表現者の協働など、表現の幅を広げ、多面的なアイデアを打ち出し、更なる飛躍を遂げることが期待される。



ギャラリー専は絵画・写真・立体芸術一般の貸しギャラリーです。皆様の表現のスペースとしてどなたでもご利用できます。

- 使用時間はご要望に応じますのでご相談下さい。
 - 使用時間／午前10時から午後5時30分
(最終日は午後4時まで)
 - 搬入・搬出／会期期間によってご要望に応じます。
 - 休館日／企画展・常設展の場合は日曜日・祝日
 - 利用料金／1日10,000円(税別)
- ※詳細はお問合せ下さい。

ジャンルを問わない表現スペース

ギャラリー

Sen
専

仙台市青葉区国分町3-9-9 コーポキクセン1F
TEL.FAX 022-721-5221 or 022-212-5030
E-mail co-pokikusen@abella.ocn.ne.jp
URL <http://sen335.blog.fc2.com/>

この芸術年鑑は七〇〇部作成し、一部当たりの印刷単価は八〇〇円です。

編集・発行 宮城県環境生活部消費生活・文化課
仙台市青葉区本町三丁目八番一号
〒九八〇―八五七〇
電話 〇二二―二二二―二五二七(直通)

令和二年四月一日発行
限定七〇〇部

宮城県芸術年鑑
第四十九巻

宮城野書人会

本会は古典(漢字)・古筆(かな)に立脚した現代書への
展開を目的とし、伝統と革新を目指す

創設者 加藤翠柳先生(河北文化賞受賞者)

月刊誌 ～ 書芸苑 [漢字、かな、細字三体とペン字(実用書)

(昭和22年4月創刊) 近代詩文書、少字、墨象他] ～ 発行

学生版書芸苑 [毛筆、硬筆、毛筆自由部] ～ 発行

初心者歓迎 書く喜び! 書く楽しみを! 会員随時募集

事務局 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡 3-7-30 降旗ビル 404 号

TEL 022-295-6365 FAX 022-295-6378

メールアドレス m-shojinkai@rice.ocn.ne.jp

東京エレクトロンホール宮城



施設の概要

大ホール (固定席1,500席)	
大会議室 (定員 200名)	1室
中会議室 (定員 100名)	2室
小会議室 (定員 40名)	1室
(定員 30名)	1室
(定員 15名)	1室
和室 (定員 20名 18畳)	3室
(定員 15名 12.5畳)	1室
教書室 (定員 20名)	2室
展示室 (184㎡、193㎡)	各1室
リハーサル室 (135㎡)	1室

公益財団法人 宮城県文化振興財団

〒980-0803

仙台市青葉区国分町三丁目3番7号

TEL 022(225)8641 FAX 022(223)8728

URL: <http://www.niyagi-hall.jp/>

e-mail: kemmin@niyagi-hall.jp

公益財団法人宮城県文化振興財団は、株式会社東北共立と陽光ビルサービス株式会社とともに指定管理者として、「東京エレクトロンホール宮城」の管理運営を行っております。

美術を
とことん
見つめる
4年間

 **東北生活文化大学**

美術学部 美術表現学科

[3年次よりコース制]
美術・工芸コース
デザイン・メディア芸術コース



<https://www.mishima.ac.jp/tsb/>

〒981-8585 仙台市泉区虹の丘一丁目18番地の2 ☎022-272-7519

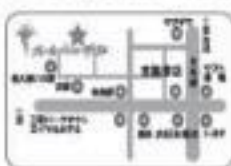


グレル パレ アトリエ

ワクワク楽しいパレエ★
あなたも一緒に始めませんか？

45年の歴史をもつパレエ教室です。

可愛い3歳のお子様から大人のエクササイズまで、幅広いクラス構成で楽しく
レッスンをしています。初心者からプロを目指す方まで、丁寧に指導致します。



☆お問い合わせ☆八木山南スタジオ本部

TEL/FAX 022-244-7547

仙台市太白区八木山南5丁目1の4

高橋厚子

ホームページも
見てね☆



トロフィ・カップ・楯・メダル・バッジ・染め旗・優勝旗等



株式会社 **仙台カップ**

事務所 宮城県仙台市青葉区木町18-16

☎022-234-8510 FAX022-234-8566

メールアドレス sendaicup@coffee.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.sendaicup.co.jp>

パーティ・御宴会・受け賜ります

中国料理 **東 龍 門**

青葉区国分町 3-3-7

(東京エレクトロンホール宮城 2F)

TEL 215-8181

URL toryumon.act01.com

宮城県洋舞団体連合会

旬のダンスを 50 年
宮城の文化振興をささえ続けて半世紀



宮城県洋舞団体連合会

加盟団体紹介

石巻バレエ研究所（古川バレエ教室） 佐東 悦子

Tel 0229-22-8488

Fax 0229-25-5480

【古川】【石巻】

さくらモダンバレエスクール 横田 百合子

Tel 022-373-5513 (Fax 兼)

【泉ヶ丘】【旭ヶ丘】【上杉】【八幡】【長町】

佐取純子モダンバレエスタジオ 佐取 純子

Tel 022-712-1730 (Fax 兼)

Tel 022-262-0729

【一番町】【泉中央】【榴岡】【若林】【長町南】

仙台ノイエタンツ研究所

千尋 洋子 布山 さとみ

Tel 022-223-7640 (Fax 兼)

【五橋】【原町】【新田】【利府】【名取】【岩沼】【角田】

Soki Ballet International 左右木 健一

Tel 022-377-2055

【寺岡】

藤井サト子バレエ研究所

藤井 サト子

Tel 022-251-4917

Tel 022-225-8707

【定禅寺】【鶴ヶ谷】【松島】【多賀城】【七ヶ浜】

第 16 回 全国ダンスコンペティション in 仙台 2021

開催日時 / 2021.2.13(土) モダンダンス部門

2.14(日) クラシック部門

会場 / 多賀城市文化センター市民会館・大ホール

お問い合わせ / DCS実行委員会 090-6229-9405